



Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールガイド (UNIX 版)

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-3313
2005 年 10 月

Copyright 2005 Sun Microsystems, Inc. 4150 Network Circle, Santa Clara, CA 95054 U.S.A. All rights reserved.

本製品および本書は著作権法によって保護されており、その使用、複製、頒布、および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社による事前の許可なく、本製品および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品の一部は Berkeley BSD システムより派生したもので、カリフォルニア大学よりライセンスを受けています。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、docs.sun.com、AnswerBook、AnswerBook2、Java、Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。Sun のロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPEN LOOK および Sun™ Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装するか、または米国 Sun Microsystems 社の書面によるライセンス契約に従う米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

U.S. Government Rights – Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されな
い、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。



051219@13215



目次

はじめに	17
1 インストールの準備	23
Java ES インストーラのしくみ	23
このリリースで使用される Java ES コンポーネント	24
インストーラのモード	25
言語の選択	25
既存のコンポーネントのチェック	26
依存性の確認	26
設定オプションとパラメータの設定	27
アンインストーラ	28
既存ホストの調査	28
Solaris OS に Java ES ソフトウェアが事前にロードされている場合	28
互換性のないコンポーネントがインストールされている場合	29
ホストの準備が整ったかどうかの確認	31
インストールシーケンス例を使用できるかどうかの確認	32
インストール前提条件	33
Java ES ソフトウェアの入手	36
インストールイメージの作成	37
▼ ネットワーク上にイメージを作成するには	37
2 インストールシーケンスの例	39
この章の利用方法	39
単一セッションインストールの例	40
評価の例	41
▼ Java ES 評価のシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	41

Access Manager と Portal Server の例	42
▼ Access Manager と Portal Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	42
Application Server のみをインストールする例	44
Directory Server のみをインストールする例	46
Directory Proxy Server の例	48
Instant Messaging のみをインストールする例	50
Message Queue のみをインストールする例	52
Portal Server Secure Remote Access の例	53
Service Registry のみをインストールする例	56
Web Server のみをインストールする例	57
Solaris 10 ゾーン	59
Solaris ゾーンの概要	59
Solaris 10 ゾーンの例	60
▼ Solaris 10 ゾーンへのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	60
Sun Cluster ソフトウェアの例	61
要件およびシーケンスの問題	61
第 1 段階: Sun Cluster フレームワークのインストールと設定	62
▼ Sun Cluster フレームワークのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	62
第 2 段階: コンポーネントとエージェントのインストールと設定	63
▼ コンポーネントとエージェントの設定シーケンスを作成するには、次の手順に従います。	63
コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例	65
要件	65
▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	65
▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	66
Calendar Server と Messaging Server の例	67
要件およびシーケンスの問題	68
▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	68
▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	68
▼ ホスト C 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	69
Calendar-Messaging Schema 1 の例	70
要件	71

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 71

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 71

Communications Express と Messaging Server の例 72

要件およびシーケンスの問題 72

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 73

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 73

Instant Messaging と Access Manager の例 74

要件およびシーケンスの問題 75

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 75

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 75

通信サービスと共同作業サービスの例 76

要件およびシーケンスの問題 77

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 78

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 78

▼ ホスト C 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 79

▼ ホスト D の最初のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 79

▼ ホスト D の 2 番目のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 80

▼ ホスト D の 3 番目のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 80

アイデンティティ管理の例 80

要件 80

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 81

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 81

Web とアプリケーションサービスの例 82

要件およびシーケンスの問題 82

▼ Web とアプリケーションサービスのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。 83

リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例 84

	要件	84
	▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	85
	▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	85
	非ルートの場合	86
	非ルートユーザーとして実行するように設定された Access Manager の例	87
	非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Portal Server の例	89
3	グラフィカルインタフェースによるインストール	93
	前提条件	93
	グラフィカルモードでのインストーラの実行	94
	▼ インストールを開始するには	94
	▼ 言語とコンポーネントを選択するには	96
	▼ 依存性と互換性の問題を解決するには	98
	▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには	99
	▼ 設定の種類と共通サーバー設定を指定するには	101
	▼ コンポーネントの設定を指定するには	103
	▼ ソフトウェアをインストールするには	104
	▼ インストールセッションを終了するには	105
	コンポーネントの追加	106
	次の手順	107
4	テキストベースのインタフェースによるインストール	109
	前提条件	109
	テキストベースのインタフェースの使用方法	109
	テキストベースモードでのインストーラの実行	110
	▼ インストールを開始するには	110
	▼ 言語とコンポーネントを選択するには	111
	▼ 依存性と互換性の問題を解決するには	113
	▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには	114
	▼ 設定の種類を選択するには	115
	▼ 設定データを指定するには	115
	▼ ソフトウェアをインストールするには	117
	コンポーネントの追加	118
	次の手順	118

- 5 サイレントモードでのインストール 119
 - 前提条件 119
 - サイレントインストールの作業手順 120
 - 状態ファイルの作成 121
 - 状態ファイルの生成 121
 - 状態ファイルの編集 121
 - プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成 124
 - ▼ インストーラを使用して状態ファイル ID を生成するには 125
 - ▼ プラットフォーム固有の配布ファイルを使用して状態ファイル ID を生成するには 125
 - サイレントモードでのインストーラの実行 126
 - ▼ サイレントモードでインストーラを実行するには 127
 - ▼ サイレントインストールの進行状況を監視するには 127
 - 次の手順 128

- 6 インストール後のコンポーネントの設定 129
 - この章の利用方法 130
 - MANPATH の設定 130
 - ▼ MANPATH 変数を更新するには 131
 - Sun Cluster のインストール後の設定 132
 - フェーズ I. Sun Cluster フレームワーク 132
 - フェーズ II. コンポーネントデータサービス 133
 - Access Manager のインストール後の設定 133
 - 「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定 134
 - 「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定 136
 - 管理サーバーのインストール後の設定 137
 - ▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に管理サーバーを設定するには 137
 - Application Server のインストール後の設定 138
 - ▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定するには 138
 - Calendar Server のインストール後の設定 141
 - ▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Calendar Server を設定するには 141
 - Communications Express のインストール後の設定 142
 - ▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Communications Express を設定するには 142

Directory Proxy Server のインストール後の設定	143
▼ 「あとで設定」 設定オプションでのインストール後に Directory Proxy Server を設定するには	144
Directory Server のインストール後の設定	145
▼ 「あとで設定」 設定オプションでのインストール後に Directory Server を設定するには	145
HADB のインストール後の設定	146
「あとで設定」 設定オプションでのインストール後の HADB の設定	147
Instant Messaging のインストール後の設定	147
「あとで設定」 設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定	147
Message Queue のインストール後の設定	148
Messaging Server のインストール後の設定	148
▼ 「あとで設定」 設定オプションでのインストール後に Messaging Server を設定するには	149
Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定	150
「今すぐ設定」 設定オプションでのインストール後の Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の設定	150
「あとで設定」 設定オプションでのインストール後の Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の設定	152
Service Registry のインストール後の設定	154
▼ 「あとで設定」 設定オプションでのインストール後にデフォルトのプロパティを使って Service Registry を設定するには	154
Web Proxy Server のインストール後の設定	155
▼ 「あとで設定」 設定オプションでのインストール後に Web Proxy Server を設定するには	155
Web Server のインストール後の設定	156
▼ 「あとで設定」 設定オプションでのインストール後に Web Server を設定するには	156
Sun Cluster データサービスの設定	156
管理サーバーデータサービス	157
Application Server データサービス	157
Application Server EE (HADB) データサービス	158
Calendar Server データサービス	158
Directory Server データサービス	158
Instant Messaging データサービス	159
Message Queue データサービス	159
Messaging Server データサービス	159
Web Server データサービス	159

その他の製品用のデータサービス	160
Java 仮想マシン (JVM) の設定	160
ルート以外の ID によるコンポーネントの設定	161
ルート以外の ID による管理サーバーの設定	161
ルート以外の ID による Application Server の設定	162
ルート以外の ID による Calendar Server の設定	162
ルート以外の ID による Directory Proxy Server の設定	162
ルート以外の ID による Directory Server の設定	163
ルート以外の ID による Messaging Server の設定	163
ルート以外の ID による Portal Server の設定	163
ルート以外の ID による Web Server の設定	163
次の手順	163
7 インストール済みコンポーネントの確認	165
インストール後の確認	166
▼ インストールが成功したかどうかの確認	166
インストール後設定後の確認	168
Access Manager の起動と停止	170
▼ Access Manager のログインページへのアクセス	170
管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止	170
▼ 管理サーバーの起動	171
▼ サーバーコンソールの起動	171
▼ サーバーコンソールの停止	172
▼ 管理サーバーの停止	172
Application Server の起動と停止	172
▼ Application Server のドメインの起動	172
▼ 管理コンソールへのアクセス	173
▼ Application Server の停止	173
Calendar Server の起動と停止	174
▼ Calendar Server の起動	174
▼ Calendar Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス	174
▼ Calendar Server の停止	175
Communications Express の起動と停止	175
Directory Proxy Server の起動と停止	175
▼ Directory Proxy Server の起動	176
▼ Directory Proxy Server の停止	176
Directory Server の起動と停止	176
▼ Directory Server の起動	176

▼ Directory Server の停止	177
Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動と停止	177
▼ Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動	178
▼ Instant Messaging の停止	178
Message Queue の起動	179
▼ Message Queue Message Server ブローカの起動	179
Messaging Server の起動と停止	179
▼ Messaging Server の起動	179
▼ Messaging Server の停止	180
▼ Messenger Express へのアクセス	180
Web コンテナの起動と Portal Server デスクトップへのアクセス	181
▼ Sun Web コンテナから Portal Server デスクトップへのアクセス	181
▼ BEA WebLogic から Portal Server デスクトップへのアクセス	181
▼ IBM WebSphere から Portal Server デスクトップへのアクセス	182
Portal Server Secure Remote Access の起動と停止	182
▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの起動	182
▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの停止	183
Service Registry の起動と停止	183
▼ Service Registry の起動	183
▼ 管理コンソールへのアクセス	184
▼ Service Registry の停止	184
Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動	185
Web Server の起動と停止	185
▼ Web Server Administration Server とインスタンスの起動	185
▼ Web Server Administration Server とインスタンスの停止	186
Web Proxy Server の起動と停止	186
▼ Web Proxy Server の管理サーバーとインスタンスの起動	186
▼ 管理サーバーのグラフィカルインタフェースへのアクセス	187
▼ Web Proxy Server の停止	187
次の手順	187
8 コンポーネントのアンインストール	189
アンインストーラのしくみ	189
アンインストーラの制限	190
相互依存関係の処理	191
アンインストールの前提条件	192
アンインストールの計画	193
インストール済み Java ES ソフトウェアの調査	193

▼ アンインストーラによるインストール済みソフトウェアの表示	193
▼ Solaris の prodreg ユーティリティーによるインストール済みソフトウェアの表示	194
Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認	194
アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与	208
アンインストーラの実行	210
グラフィカルモードでのアンインストーラの実行	210
▼ グラフィカルアンインストーラの起動	210
▼ アンインストールするコンポーネントの選択	211
▼ 管理者アクセス権の付与	212
▼ ソフトウェアのアンインストール	212
テキストベースモードでのアンインストーラの実行	213
▼ テキストベースモードでのアンインストーラの起動	213
▼ アンインストールするコンポーネントの選択	213
▼ 管理者アクセス権の付与	214
▼ ソフトウェアのアンインストール	214
サイレントモードでのアンインストーラの実行	215
▼ 状態ファイルの作成	215
▼ サイレントモードでのアンインストーラの実行	216
▼ サイレントアンインストールの進行状況の監視	217
Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール	218
アンインストール後の作業	218
Access Manager アンインストール後の問題	218
Application Server アンインストール後の作業	219
▼ Application Server のアンインストールの完了	219
Messaging Server インストール後	219
Service Registry インストール後の作業	220
Web Server アンインストール後の作業	220
▼ Web Server のアンインストールの完了	220
9 トラブルシューティング	221
トラブルシューティングの手法	221
インストールログファイルの検証	222
▼ ログファイルによるトラブルシューティング	222
コンポーネントログファイルの検証	223
製品の依存関係の検証	223
リソースと設定のチェック	224
インストール後の設定のチェック	224

配布メディアのチェック	224
Directory Server の接続性チェック	224
Web Server のファイルおよびディレクトリの削除	225
パスワードの確認	225
コンポーネントのインストール状態の検証	225
管理者アクセスの確認	226
インストールに関する問題	226
アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗	226
▼ 部分的なインストールのクリーンアップ	227
アンインストール後に製品レジストリに含まれる共有コンポーネントが削除されたためにインストールが失敗する	228
IBM WebSphere を Portal Server の Web コンテナとして設定できない	228
予期せぬ外部エラーが発生する	229
グラフィカルインストーラが応答しない	230
サイレントインストールの失敗: 状態ファイルに互換性がない、または破損している	230
サイレントインストールに失敗した	230
マニュアルページが表示されない	231
アンインストールに関する問題	231
アンインストーラが見つからない	231
アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った	232
▼ 手動でのパッケージのクリーンアップ	232
製品レジストリが破損している	233
Common Agent Container の問題	233
ポート番号の競合	233
ルートパスワードの安全性が危惧される場合	235
ロックファイルに関するエラー通知	236
コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント	236
Access Manager のトラブルシューティングのヒント	237
管理サーバーのトラブルシューティングのヒント	238
Application Server のトラブルシューティングのヒント	238
Calendar Server のトラブルシューティングのヒント	239
Communications Express のトラブルシューティングのヒント	239
Delegated Administrator のトラブルシューティングのヒント	240
Directory Proxy Server のトラブルシューティングのヒント	240
Directory Server のトラブルシューティングのヒント	241
Instant Messaging のトラブルシューティングのヒント	241
Message Queue のトラブルシューティングのヒント	241
Messaging Server のトラブルシューティングのヒント	242

Portal Server のトラブルシューティングのヒント	242
Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント	243
Service Registry のトラブルシューティングのヒント	243
Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント	243
Web Server のトラブルシューティングのヒント	244
Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント	245
トラブルシューティングの追加情報	245
A このリリースの Java ES コンポーネント	247
選択可能なコンポーネント	247
共有コンポーネント	249
B インストールコマンド	251
インストーラコマンド	251
例	252
アンインストールコマンド	253
例	253
C 状態ファイルの例	255
索引	261

表目次

表 1-1	インストール前のチェックリスト	33
表 4-1	テキストベースインストーラのプロンプトに対する応答	110
表 5-1	編集する状態ファイルのパラメータ	123
表 6-1	マニュアルページのデフォルトの場所	131
表 6-2	Directory Server に対する Access Manager インデックス候補	135
表 7-1	Java ES の推奨起動シーケンス	169
表 8-1	アンインストール前のチェックリスト	192
表 8-2	Access Manager のアンインストールの詳細	195
表 8-3	管理サーバーのアンインストールの詳細	196
表 8-4	Application Server のアンインストールの詳細	197
表 8-5	Calendar Server のアンインストールの詳細	198
表 8-6	Communications Express のアンインストールの詳細	199
表 8-7	Delegated Administrator のアンインストールの詳細	200
表 8-8	Directory Server のアンインストールの詳細	201
表 8-9	Directory Proxy Server のアンインストールの詳細	202
表 8-10	Instant Messaging のアンインストールの詳細	202
表 8-11	Messaging Server のアンインストールの詳細	203
表 8-12	Message Queue のアンインストールに関する詳細	203
表 8-13	Portal Server のアンインストールの詳細	204
表 8-14	Portal Server Secure Remote Access のアンインストールに関する詳細	205
表 8-15	Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールの詳細	207
表 8-16	Web Server のアンインストールの詳細	207
表 8-17	Web Proxy Server のアンインストールの詳細	208
表 8-18	必要な管理情報	209
表 9-1	Java ES ログファイル名の形式	222
表 9-2	Access Manager のトラブルシューティングのヒント	237

表 9-3	管理サーバーのトラブルシューティングのヒント	238
表 9-4	Application Server のトラブルシューティングのヒント	238
表 9-5	Calendar Server のトラブルシューティングのヒント	239
表 9-6	Communications Express のトラブルシューティングのヒント	239
表 9-7	Delegated Administrator のトラブルシューティングのヒント	240
表 9-8	Directory Proxy Server のトラブルシューティングのヒント	240
表 9-9	Directory Server のトラブルシューティングのヒント	241
表 9-10	Message Queue のトラブルシューティングのヒント	241
表 9-11	Messaging Server のトラブルシューティングのヒント	242
表 9-12	Portal Server のトラブルシューティングのヒント	242
表 9-13	Service Registry のトラブルシューティングのヒント	243
表 9-14	Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント	243
表 9-15	Web Server のトラブルシューティングのヒント	244
表 9-16	Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント	245
表 B-1	Java ES インストーラのコマンド行オプション	251
表 B-2	Java ES アンインストールのコマンド行オプション	253

はじめに

この『Java Enterprise System インストールガイド (UNIX 版)』には、Sun Solaris™ Operating System (Solaris OS) または Linux オペレーティング環境への Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアのインストール手順が記載されています。このマニュアルの手順の中には、いずれかのプラットフォームに固有のものやプラットフォームごとに異なるものも存在していますが、そうした情報はプラットフォーム別に分類されています。ただし、大部分の手順はプラットフォーム別に分類されておらず、Solaris OS と Linux の両方に適用されます。

対象読者

このマニュアルに記載される内容は、Java ES ソフトウェアをインストールする評価担当者、システム管理者、およびソフトウェア技術者を対象としています。このマニュアルは、次の事項に習熟している方を対象に記述されています。

- エンタープライズレベルのソフトウェア製品のインストール
- サポートする Java ES プラットフォーム上のシステム管理とネットワーク
- クラスタリングモデル (クラスタリングソフトウェアをインストールする場合)
- インターネットと World Wide Web

Java ES のマニュアルセット

Java ES のマニュアルセットでは、配備計画やシステムインストールについて説明しています。システムマニュアルの URL は <http://docs.sun.com/co11/1286.1> です。Java ES の概要を把握するには、次の表に記載されている順番でマニュアルを参照してください。

表 P-1 Java Enterprise System ドキュメント

マニュアル名	内容
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』	既知の問題など、Java ES に関する最新の情報が記載されています。これ以外に、コンポーネントごとにリリースノートがあります。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 ドキュメントロードマップ』	JES をシステムとしておよび個々のコンポーネントについて解説した、Java ES に関係するすべてのマニュアルについて説明しています。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 技術の概要』	Java ES の技術的および概念的な基礎について説明します。コンポーネント、アーキテクチャ、プロセス、および機能について説明しています。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 配備計画ガイド』	一Java ES に基づく企業配備ソリューションの計画および設計に関する情報を提供します。配備の計画および設計に関する基本的概念と原則を示し、ソリューションのライフサイクルについて説明し、Java ES に基づくソリューションを計画する際に使用する高度な例と戦略を提供します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストール計画ガイド』	Java ES の配備において、ハードウェア、オペレーティングシステム、およびネットワークの面で実装仕様の開発に役立つ情報を提供します。インストールと設定の計画の際に対処する必要があるコンポーネントの依存性などの問題について説明しています。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールガイド(UNIX 版)』	Solaris オペレーティングシステムまたは Linux オペレーティングシステムでの Java ES のインストール手順について説明します。インストールしたコンポーネントを設定する方法、および設定したコンポーネントが正常に機能するかどうかを確認する方法についても説明します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』	設定パラメータに関する追加情報、設定計画で使用するワークシート、およびデフォルトディレクトリやポート番号などの参照資料を提供します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q1 配備実例集: 評価のシナリオ』	任意のシステムに Java ES をインストールし、共有され、ネットワーク化されたコアとなるサービスを確立し、確立したサービスにアクセス可能なユーザーアカウントを設定する方法について説明します。

表 P-1 Java Enterprise System ドキュメント (続き)

マニュアル名	内容
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』	Solaris オペレーティングシステムまたはLinux オペレーティング環境におけるJava ES のアップグレードに必要な情報および手順について説明します。
『Sun Java Enterprise System 用語集』	Java ES のドキュメントで使用される用語について説明します。

デフォルトのパスやファイル名

次の表は、このマニュアルで使用するデフォルトのパスやファイル名について説明したものです。

表 P-2 デフォルトのパスやファイル名

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<i>AccessManager-base</i>	Access Manager のベースインストールディレクトリを表します。	Solaris システムの場合: /opt/SUNWam Linux システムの場合: /opt/sun/identity
<i>DirectoryServer-base</i>	Sun Java System Directory Server のベースインストールディレクトリを表します。	[Give the path name or link to the relevant product documentation]
<i>ApplicationServer-base</i>	Sun Java System Application Server のベースインストールディレクトリを表します。	[Give the path name or link to the relevant product documentation]
<i>WebServer-base</i>	Sun Java System Web Server のベースインストールディレクトリを表します。	[Give the path name or link to the relevant product documentation]

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用しません。

表 P-3 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:
aabbcc123	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「 」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep `^#define \ XV_VERSION_STRING`

コード例は次のように表示されます。

■ C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

■ C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

■ Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

■ Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

コマンド例で使用されるシェルプロンプト

次の表は、デフォルトのシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを示しています。

表 P-4 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
UNIX および Linux システムの C Shell	machine_name%
UNIX および Linux システムの C Shell のスーパーユーザー	machine_name#
UNIX および Linux システムの Bourne Shell および Korn Shell	\$
UNIX および Linux システムの Bourne Shell および Korn Shell のスーパーユーザー	#
Microsoft Windows コマンド行	C:\

記号の表記規則

次の表で、このマニュアルで使用する表記規則について説明します。

表 P-5 記号の表記規則

記号	説明	例	意味
[]	任意指定の引数およびコマンドオプションを含みます。	ls [-1]	-1 オプションは省略可能です。

表 P-5 記号の表記規則 (続き)

記号	説明	例	意味
{ }	必須コマンドオプションの選択肢を含みます。	-d {y n}	-d オプションは、引数 y または n のいずれかを使用する必要があります。
\${ }	変数参照を表します。	\${com.sun.javaRoot}	com.sun.javaRoot 変数の値を参照します。
-	同時に押すキーを連結します。	Control-A	Control キーと A キーを同時に押します。
+	連続して押すキーを連結します。	Ctrl+A+N	Control キーを押し、放してから、以後のキーを続けて押します。
→	グラフィカルユーザーインターフェイスで選択するメニュー項目を示します。	「ファイル」→「新規」 →「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから、「テンプレート」を選択します。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun のサービス	URL	内容
マニュアル	http://jp.sun.com/documentation/	PDF 文書および HTML 文書をダウンロードできます。
サポートおよび トレーニング	http://jp.sun.com/supporttraining/	技術サポート、パッチのダウンロード、および Sun のトレーニングコース情報を提供します。

第 1 章

インストールの準備

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする際に役立つ情報を提供します。このマニュアルで説明している作業を開始する前に、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストール計画ガイド』に従ってインストール計画を立てておいてください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 23 ページの「Java ES インストーラのしくみ」
- 28 ページの「既存ホストの調査」
- 32 ページの「インストールシーケンス例を使用できるかどうかの確認」
- 33 ページの「インストール前提条件」
- 36 ページの「Java ES ソフトウェアの入手」
- 37 ページの「インストールイメージの作成」

Java ES インストーラのしくみ

Sun Java™ Enterprise System (Java ES) は、多くの Sun のサーバー側製品を 1 つのソフトウェアシステムに統合し、分散型のエンタープライズアプリケーションのサポートに必要なサーバーソフトウェアを提供します。このマニュアルでは、これらの製品を「Java ES コンポーネント」と呼びます。Java ES コンポーネントをさまざまな組み合わせでインストールするための単一のインストーラが用意されています。これらのコンポーネント間には複雑な相互関係が存在するため、それらをインストールする際には、単一のコンポーネントをインストールする場合よりも多くのインストール前作業やインストール後作業が必要となります。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 24 ページの「このリリースで使用される Java ES コンポーネント」
- 25 ページの「インストーラのモード」
- 25 ページの「言語の選択」

- 26 ページの「既存のコンポーネントのチェック」
- 26 ページの「依存性の確認」
- 27 ページの「設定オプションとパラメータの設定」
- 28 ページの「アンインストーラ」

このリリースで使用される Java ES コンポーネント

2005Q4 リリースに関連付けられた Java ES ソフトウェアに含まれる選択可能なコンポーネントは、次のとおりです。(名前とバージョンの後に、このマニュアル内で使用する省略名を示す。)

- Communication Services Delegated Administrator 6.3 (Delegated Administrator)
- Service Registry 3.0
- Sun Cluster 3.1 8/05 (Sun Cluster ソフトウェア)
- Sun Cluster Agents for Sun Java System (Sun Cluster エージェント)
- Sun Java System Access Manager 7.0 (Access Manager)
- Sun Java System 管理サーバー 5.2P4 (管理サーバー)
- Sun Java System Application Server 8.1 Enterprise Edition + パッチ (Application Server)
- Sun Java System Calendar Server 6.2 + パッチ (Calendar Server)
- Sun Java System Communications Express 6.2 + パッチ (Communications Express)
- Sun Java System Directory Preparation Tool 6.3P2 (Directory Preparation Tool)
- Sun Java System Directory Server 5.2P4 (Directory Server)
- Sun Java System Directory Proxy Server 5.2P4 (Directory Proxy Server)
- Sun Java System Instant Messaging 7.0.1 (Instant Messaging)
- Sun Java System Message Queue 3.6 Enterprise Edition SP3 (Message Queue)
- Sun Java System Messaging Server 6.2 + パッチ (Messaging Server)
- Sun Java System Portal Server 6.3.1P3 (Portal Server)
- Sun Java System Portal Server Secure Remote Access 6.3.1P3 (Portal Server Secure Remote Access)
- Sun Java System Web Server 6.1 SP5 (Web Server)
- Sun Java System Web Proxy Server 4.0 (Web Proxy Server)
- High Availability Session Store (HADB) 4.4.2

Java ES インストーラに表示されるサービスおよびサブコンポーネントの完全な一覧については、[付録 A](#) を参照してください。この付録では、今回のリリースで提供する共有コンポーネントの一覧も示します。

インストーラのモード

Java ES インストーラは、Solaris pkgadd、Linux rpm のいずれかのユーティリティーを使ってJava ES ソフトウェアをシステムに転送するためのインストールフレームワークです。Java ES のインストールは、対話的に実行することも、再利用可能なスクリプトを使用して実行することもできます。

- **グラフィカルモード (対話式):** グラフィカルワークステーションへの Java ES ソフトウェアのインストール作業の手順を示す、対話式のグラフィカルウィザードを提供します。
- **テキストモード (対話式):** グラフィカルモードと同じ機能を提供しますが、端末ウィンドウのコマンド行で1行ごとに応答が求められます。
- **サイレントモード:** 入力を指定するために生成した状態ファイルを使用して、複数のホスト上でインストーラを実行するオプションを提供します。

ヒント—ソフトウェアをインストールせずに Java ES インストーラを実行することができます。これは、サイレントインストール用の状態ファイルを作成したり、既存のホスト上の Java ES ソフトウェアを調査したりする場合に便利です。

言語の選択

対話式インストーラは、オペレーティングシステムのロケール設定で指定されている言語で実行されます。次の言語を利用できます。

- 英語
- フランス語
- ドイツ語
- 日本語
- 韓国語
- スペイン語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語

オペレーティングシステムの言語がこのリストに含まれていない場合、インストーラは英語で実行されます。

インストーラにより、英語版の Java ES のコンポーネントがすべて自動的にインストールされます。さらに、コンポーネントパッケージをリスト内のいずれかの言語でインストールできます。インストールセッションでは、インストールするすべてのコンポーネントに選択した言語が適用されます。ある言語で一部のコンポーネントをインストールし、別の言語でその他のコンポーネントをインストールする場合は、インストーラを複数回実行する必要があります。

Solaris OS 上では、オペレーティングシステムの言語が一覧に含まれていた場合、その言語が自動的にコンポーネントインストール用として選択されます。ただし、別の言語を選択することも可能です。

以前にインストールしたコンポーネントに対し、Java ES インストーラを使用して追加言語パッケージをインストールすることはできません。ただし、pkgadd または rpm コーティリティーを使用することで、いつでも言語を追加できます。

既存のコンポーネントのチェック

インストール時に、Java ES インストーラは、インストールするホスト上にすでにインストールされているソフトウェアを調べ、次のコンポーネントを識別します。

- 互換性のある Java ES 製品コンポーネント。
互換性のあるコンポーネントは再インストールの必要がなく、またインストーラでは選択できません。
- 互換性のない Java ES 製品コンポーネント。
インストーラが選択したコンポーネントとすでにローカルにインストールされているコンポーネントとで互換性がないことを確認した場合、すでにインストールされている互換性のないコンポーネントを削除またはアップグレードするよう求められます。これらの互換性のないコンポーネントが処理されるまで、インストーラを続けて実行することはできません。これらのコンポーネントの処理を行ってから、コンポーネントの選択リストを更新し、インストールを続行することができます。
- 互換性のない Java ES 共有コンポーネント。
J2SE や NSS など、各種バージョンの Java ES 共有コンポーネントが既存のホストにすでに含まれていることはよくあることです。インストーラがインストールしようとする Java ES のバージョンと互換性のない共有コンポーネントのバージョンを検出した場合、これらの共有コンポーネントがリスト表示されます。インストールを続行すると、インストーラにより共有コンポーネントが互換性のあるバージョンにアップグレードされます。

依存性の確認

コンポーネントの多くは、主要な機能を提供するために、ほかのコンポーネントの存在に依存しています。インストール時に選択したコンポーネントが共同して正常に機能するように、インストーラはコンポーネント間のチェックを広範囲に行います。このため、インストーラは、ユーザーが選択するコンポーネントに応じて、特定のコンポーネントをインストールに含めるよう求められます。

通常、Java ES インストーラは、次の規則を使用して Java ES コンポーネント間の依存性を処理します。

- コンポーネントの選択: インストールするコンポーネントを選択すると、ほとんどの場合、インストーラはすべてのサブコンポーネントを自動的に選択します。
また、インストーラは、選択したコンポーネントが依存するコンポーネントとサブコンポーネントも選択します。たとえば、Application Server を選択すると、インストーラは Message Queue を自動的に選択します。

- **コンポーネントの選択の解除:** コンポーネントの選択を解除すると、ほとんどの場合、インストーラはすべてのサブコンポーネントの選択を自動的に解除します。
 選択している別のコンポーネントがローカルまたはリモートに必要とするコンポーネントの選択を解除すると、インストール手順を進めるときに、インストーラはさまざまな警告メッセージを表示します。
- **サブコンポーネントの選択:** サブコンポーネントを選択すると、インストーラはそのサブコンポーネントが属するコンポーネントを自動的に選択しますが、その他のサブコンポーネントは選択しません。
 選択したサブコンポーネントがほかのコンポーネントまたはサブコンポーネントに依存する場合、依存関係にあるこれらのコンポーネントは自動的に選択されます。
- **サブコンポーネントの選択の解除:** サブコンポーネントの選択を解除すると、インストーラはそのサブコンポーネントの選択のみを解除します。その他のサブコンポーネントの選択は解除しません。
 選択している別のコンポーネントがローカルまたはリモートに必要とするサブコンポーネントの選択を解除すると、インストール手順を進めるときに、インストーラはさまざまな警告メッセージを表示します。

設定オプションとパラメータの設定

Java ES のコンポーネント製品の多くは、インストール時にある程度の設定を行う必要があります。インストール時に実行する設定の範囲は、選択したコンポーネントおよびインストールオプションの種類によって異なります。

インストーラで、次の設定オプションを使用できます。

- 「あとで設定」: インストール時は、インストールに必要な最小限の値だけを入力し、インストール後に詳細な設定を行います。
- 「今すぐ設定」: インストール時に、インストール中の設定が可能なコンポーネント製品を設定できます。指定する情報は、いくつかの共通パラメータだけの場合もあれば (共通サーバー設定)、コンポーネントに固有の詳細なパラメータを含む場合もあります (コンポーネント設定)。

「共通サーバー設定」は、複数のコンポーネントが使用するパラメータを設定します。たとえば、ほとんどのコンポーネントでは、管理 ID およびパスワードを指定する必要があります。これらの共通の値を設定することで、すべてのコンポーネントの管理 ID とパスワードのデフォルト値を設定できます。「コンポーネント設定」は、特定のコンポーネントに適用するパラメータを設定します。これらの設定は、インストール時に「今すぐ設定」オプションを選択した場合にのみ要求されます。これらの設定の一部は、共通サーバー設定から取り込まれます。

アンインストーラ

Java ES には、Java ES インストーラを使用してローカルホストにインストールしたコンポーネント製品を消去するためのアンインストールプログラムが用意されています。Java ES アンインストーラは、アンインストーラが稼働しているホストで製品の依存関係をチェックし、他の製品への依存が検出された場合は警告メッセージを出力します。

アンインストーラは、グラフィカル、テキストベース、またはサイレントの各モードで実行できます。

Java ES インストールの完了後、アンインストーラは次の場所に格納されています。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys4`
- Linux の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys4`

既存ホストの調査

インストールの前に、Java ES ソフトウェアをインストールしようとするホストにどのようなコンポーネントが存在するかを把握することが重要です。Java ES ソフトウェアが事前にロードされた新しい Solaris システムを使用する場合、ホストの調査は不要です。ただし、既存のホストが Java ES コンポーネントがすでにインストールされているバージョンを使用している場合、Java ES インストーラを実行する前に、ソフトウェアの一部をアップグレードするか、または削除する必要があります。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 28 ページの「Solaris OS に Java ES ソフトウェアが事前にロードされている場合」
- 29 ページの「互換性のないコンポーネントがインストールされている場合」
- 31 ページの「ホストの準備が整ったかどうかの確認」

Solaris OS に Java ES ソフトウェアが事前にロードされている場合

事前にソフトウェアがロードされた Sun Solaris ハードウェアシステムを使用する場合、Java ES ソフトウェアのインストールイメージは、すでにシステムにコピーされています。

Java ES ソフトウェアがホストに事前にロードされている場合は、次のディレクトリが存在します。

```
/var/spool/stage/JES_05Q4_architecture/
```

architecture 変数は、SPARC または x86 など、システムのハードウェアのアーキテクチャーを示します。

このマニュアルで説明されているとおり、インストールイメージを展開し、Java ES インストーラを使用して、事前にロードされた Java ES ソフトウェアをインストールし、設定する必要があります。ホストに既存の Java ES コンポーネントが存在しない場合でも、インストールシーケンスを計画する必要があります。

注 - ロード済みの Java ES ソフトウェアが Solaris 10 システム上に存在している場合、インストールイメージを展開する前に 59 ページの「Solaris 10 ゾーン」を参照してください。

互換性のないコンポーネントがインストールされている場合

インストーラはインストール時に、ホストにすでにインストールされている Java ES コンポーネントがインストールする Java ES のリリースと互換性があるかどうかをチェックします。コンポーネントの一部に互換性がない場合、互換性がないことを示すエラーメッセージが表示され、インストールが中断する場合があります。したがって、インストール済みのソフトウェアを調べ、必要なアップグレードを行った「あと」で、Java ES インストーラを実行することが重要です。

注 - Java ES インストーラはインストール時に、選択可能なコンポーネントをアップグレードしません。ただし、1 つ例外があります。Application Server および Message Queue がすでに Solaris OS にインストールされている場合、インストーラは、これらのコンポーネントをインストール時にアップグレードするかどうかをユーザーに尋ねます。

Java ES インストーラは、インストールする選択可能なコンポーネントで必要となるすべての共有コンポーネントを、アップグレードまたはインストールします。

インストーラを使用したインストール済みソフトウェアの調査

`prodreg`、`pkginfo` などの Solaris コマンドや Linux `rpm` コマンドを使用すれば、インストール済みのソフトウェアを調査できます。また、インストーラそのものを使用して、この項で説明する手順に従って、パッケージベースのソフトウェアインストールを調べることもできます。

注 - インストールされているソフトウェアに関する情報を得るために、Java ES インストーラだけを頼りにすることは、避けるべきです。インストール済みのソフトウェアについて、ホストを独自に調査して確認することも必要です。

▼ グラフィカルインストーラをローカルディスプレイにアクセスさせるには

手順 1. **DISPLAY** 環境変数を設定します。

リモートホストにログインしているときには、**DISPLAY** 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。**DISPLAY** 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースモードで実行されます。

- C Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
setenv DISPLAY myhost:0.0
```

- Korn Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
DISPLAY=myhost:0.0
```

2. 表示権限を付与します。

ローカルディスプレイでインストーラを実行するには、表示権限の付与が必要になる場合があります。たとえば、次のコマンドを使用して、myhost から serverhost のルートユーザーに表示権限を付与することができます。

```
myhost\> xauth extract - myhost:0.0|rsh -l root serverhost xauth merge -
```

注 - このような権限を安全に付与する手順については、『Solaris X Window System 開発ガイド』の「サーバーに対するアクセスの操作」の章を参照してください。

▼ アップグレードに関する問題の確認のためにインストーラを使用するには

手順 1. 各ホストで、アクティブインストールではないことを示す **-no** オプションを指定してインストーラを起動します。

グラフィカルインストーラの場合、次のとおり入力します。

```
./installer -no
```

テキストベースのインストーラの場合、次のとおり入力します。

```
./installer -nodisplay -no
```

2. コンポーネントの選択に進みます。
3. このホストにインストールするコンポーネントを選択します。
状態列は、選択したコンポーネントに必要な製品を示します。
4. インストーラが選択可能なコンポーネントのバージョンに互換性がないことを検出した場合、互換性のないバージョンのアップグレードまたは削除が求められます。
この問題を解決したら、選択リストを更新し、選択し、インストーラを先に進めません。
5. インストーラが共有コンポーネントのバージョンに互換性がないことを検出した場合、アップグレードの必要がある共有コンポーネントのリストが表示されます。
表示された各共有コンポーネントについて、「インストール済みのバージョン」と「必要なバージョン」を比較し、アップグレードする必要があるかどうかを確認します。共有コンポーネントの新しい Java ES バージョンと、ホストにインストールされているその他のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを確認する必要があります。
6. インストーラを終了し、必要なアップグレードを実行します。
 - 選択可能なコンポーネントについては、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』を参照してください。
 - 共有コンポーネントの場合は、インストール時に大部分のアップグレードを実行できます。
7. 各ターゲットホストに対して手順を繰り返します。

注 - インストーラは Solaris OS によって配布される Directory Server のバージョンを調べ、この Solaris の配布の中に含まれている Directory Server のスクリプトの名前がインストーラによって変更されることを警告します。何も対処する必要はありません。

ホストの準備が整ったかどうかの確認

インストーラを起動する前に、この項で説明する問題を確認します。

システム要件

Java ES をインストールする前に、システム内のホストがハードウェアとオペレーティングシステムの最小要件を満たしていることを確認します。サポートされているプラットフォーム、ソフトウェア要件、およびハードウェア要件に関する最新情報については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』の「ハードウェアおよびソフトウェアの要件」を参照してください。

ホストに実装されているオペレーティングシステムが Java ES の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは処理を中断します。インストール前に、この問題を解決する必要があります。

アクセス権

Java ES ソフトウェアをインストールするには、root としてログインするか、スーパーユーザーになる必要があります。

メモリーとディスク容量の要件

選択したコンポーネントが必要とするメモリーとディスク容量が十分であるかどうかについて、インストーラはホストを検証します。

- ホストのメモリーが Java ES の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは警告メッセージを表示します。インストールは続行可能です。
- ホストのディスク容量が不足している場合は、インストーラは処理を中断します。この問題を解決してからインストールを再開する必要があります。

注 – Solaris 10 の非大域ゾーンにインストールする場合には、メモリーチェックは実行されません。

Linux 上の Portal Server で必要な Korn Shell の要件

Linux 上で Portal Server をインストールおよび設定するには、インストーラが /bin/ksh の Korn Shell にアクセスできる必要があります。ホストに Korn Shell がインストールされていない場合、次のコマンドを実行して Korn Shell を取得することができます。

```
up2date pdksh
```

インストールシーケンス例を使用できるかどうかの確認

システムのホストに Java ES コンポーネントをインストールする順番は、インストールを成功させるためにきわめて重要です。第 2 章に含まれる 1 つ以上のシーケンス例を参考にできる可能性があります。これらのシーケンスには、いくつかの典型的な Java ES インストールで必要となる高レベルの作業が含まれています。

インストール計画の完全な手順については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストール計画ガイド』を参照してください。

インストール前提条件

次の表は、すべての種類のインストールを開始する前に必要なタスクを示しています。左の列は、タスクの一般的な実行順序を示し、中央の列は実行する操作を説明しています。右の列は、手順の参照先と便利なその他の情報を示しています。すべてのインストールですべてのタスクが必要なわけではありません。

表 1-1 インストール前のチェックリスト

実行するタスク	便利な情報と参照先
1. Java ES インストールを計画します。	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストール計画ガイド』を参照してください。 Sun Cluster ソフトウェアをインストールする場合は、61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。
2. インストールに影響する問題がリリースノートに記載されていないか確認します。	インストールガイドの手順を実行する前に、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』をお読みください。このリリースノートには、個別の配備に関するインストール時の問題についての情報が記載されています。
3. ホスト上の既存ソフトウェアを調査します。	28 ページの「既存ホストの調査」を参照してください。
4. Java ES 2005Q4 との互換性を持たない既存のコンポーネントをアップグレードします。	29 ページの「互換性のないコンポーネントがインストールされている場合」 prodreg, pkginfo、または rpm コマンド。使用方法については、各コマンドのマニュアルページを参照してください。 『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』
5. システム要件が満たされていることを確認します。	31 ページの「ホストの準備が整ったかどうかの確認」を参照してください。 『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』
6. 使用可能なインストールシーケンス例が存在するか確認します。	第 2 章を参照してください。

表 1-1 インストール前のチェックリスト	(続き)
実行するタスク	便利な情報と参照先
7. 「今すぐ設定」設定オプションでのインストールの場合、コンポーネントの設定情報を収集します。	<p>コンポーネントの設定情報については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストーリリファレンス』の第 1 章「設定情報」を参照してください。</p> <p>データ収集用ワークシートについては、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストーリリファレンス』の第 2 章「設定用ワークシート」を参照してください。</p>
8. 製品レジストリファイルのコピーを作成します。バックアップコピーは、インストール失敗時の復旧に役立ちます。	<p>Solaris の場合: /var/sadm/install/productregistry</p> <p>Linux の場合: /var/opt/sun/install/productregistry</p>
9. ルート以外のユーザーの場合、必要なシステムアカウントを作成します。	<p>Directory Server、Directory Proxy Server、または管理サーバーをルート以外のユーザーとして実行する場合は、設定前にシステムアカウントを作成する必要があります。</p>
10. すでにインストールされているサーバーまたはサービスに依存するコンポーネントをインストールする場合は、既存のサーバーおよびサービスがアクセス可能であることを確認します。	<p>たとえば、Portal Server Secure Remote Access サブコンポーネントをインストールする場合は、Secure Remote Access コアが稼働し、アクセス可能である必要があります。</p>
11. Directory Server をインストールする場合、Perl がインストールされていることを確認します。	<p>Solaris の場合: Solaris 媒体上に Perl のパッケージ (SUNWperl15*) が用意されています。</p> <p>Linux の場合: インストールの前に /usr/bin/perl が存在していなければなりません。</p> <p>Perl が存在しない場合、pkgadd または rpm -i を使用してパッケージを追加します。</p>
12. 通信コンポーネントをインストールする場合、Access Manager のインストール先ホストのドメイン名が設定されていることを確認します。	<p>ドメイン名を設定するには、次のいずれかの操作を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /etc/resolv.conf ファイルが存在する場合は、domain 設定エントリに完全修飾ドメイン名を入力します。例: mycomputer.company.com ■ /etc/resolv.conf ファイルが存在しない場合は、次のコマンドを実行します。 # domainname <i>fullyqualified_domain_name</i>
13. /etc/hosts ファイルの 2 番目の列の内容が、単純なホスト名ではなく完全修飾ドメイン名 (FQDN) であることを確認します。例:	<pre>192.18.99.999 mycomputer.company.com mycomputer loghost</pre>

表 1-1 インストール前のチェックリスト	(続き)
実行するタスク	便利な情報と参照先
14. 完全修飾ドメイン名のクエリーがシステム上で正しく機能することを確認します。	<p>次に例を示します。</p> <pre>host-name install-target-server.sun.com getent host-name install-target-server.sun.com</pre>
15. Apache Web Server とともにロードバランシングプラグインをインストールするときは、Java ES のインストールを開始する前に Apache Web Server をインストールおよび設定します。(Linux の場合は、まず Application Server をインストールし、次に Apache Web Server をインストールし、最後にロードバランシングプラグインをインストールする必要がある。)	<p>詳細については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の「Configuring Web Servers for HTTP Load Balancing」を参照してください。</p>
16. サードパーティー製の Web コンテナに配備する目的で Access Manager をインストールする場合、「あとで設定」オプションを選択し、インストール後設定スクリプトを実行する必要があります。	<p>詳細については、『Sun Java System Access Manager 7 2005Q4 Administration Guide』の「Access Manager Sample Configuration Script Input File」を参照してください。</p>
17. 再インストールを行う場合、Web Server のインストールディレクトリが存在「しない」ことを確認します。存在する場合、そのディレクトリを削除するか、名前を変更します。	<p>Web Server のデフォルトインストールディレクトリ:</p> <p>Solaris の場合: /opt/SUNWwbsvr</p> <p>Linux の場合: /opt/sun/webserver</p>
18. J2SE ソフトウェアをアップグレードする場合は、アップグレードする J2SE コンポーネントに依存するその他の製品が停止されていることを確認します。	<p>『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』を参照してください。</p>
19. Directory Proxy Server が、すでにインストールされている設定用 Directory Server を使用する場合は、Directory Proxy Server をインストールする前に、設定用 Directory Server が稼働していることを確認します。	<p>Directory Proxy Server と設定用 Directory Server を同時にインストールするときは、このタスクを省略できます。</p>
20. Messaging Server または Communications Express を実装する場合、sendmail が無効になっていることを確認します。	<p>必要に応じて、Solaris 8/9 および Linux 上の sendmail を次のようにして無効にします。</p> <pre>/etc/init.d/sendmail stop</pre> <p>必要に応じて、Solaris 10 上の sendmail を次のようにして無効にします。</p> <pre>svcadm disable sendmail</pre>

Java ES ソフトウェアの入手

Java ES ソフトウェアは、次のいずれかの方法で入手できます。

- **CD または DVD**

<http://www.sun.com/software/javaenterprisesystem/index.html>
またはご購入先から、CD または DVD を含むメディアキットを入手できます。各 CD セットには、単一オペレーティングシステム用のインストールファイル、Java ES インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネントパッケージが収録されています。DVD には、Solaris オペレーティングシステム用のインストールファイル、Java ES インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネントパッケージが収録されています。

- **Web ダウンロード**

Sun Download Center (<http://www.sun.com/download>) から、Java ES ソフトウェアをいくつかの形式でダウンロードできます。次の形式が用意されています。

- 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む ISO CD セットイメージ。
 - 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ。
 - 単一コンポーネントのすべてのインストールファイルの圧縮アーカイブ。選択されたコンポーネントが依存するすべてのサブコンポーネントを含む。
- システムに事前にロードまたはインストールされているソフトウェア
ソフトウェアが事前にロードまたはインストールされている Sun のハードウェアシステムを注文した場合は、Java ES ソフトウェアがシステムにすでにロードされている可能性があります。システムに次のディレクトリが存在すれば、Java ES ソフトウェアは事前にロードされています。

```
/var/spool/stage/JES_05Q4_architecture/
```

この *architecture* は、たとえば SPARC や x86 など、システムのハードウェアアーキテクチャーを示します。

注 – Sun Cluster ソフトウェアは事前にロードされた形式でのみ入手できます。

- ネットワーク上のファイルサーバー

各企業の操作手順によっては、社内ネットワークに Java ES のインストールファイルが用意されている場合があります。このような環境に該当するかどうかについて、システムを操作または管理する担当者に確認してください。

Java ES のインストールファイルを利用可能にする責任がある場合には、37 ページの「インストールイメージの作成」を参照してください。

このリリースの配布バンドルの一覧については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第4章「Java ES の配布内容」を参照してください。

インストールイメージの作成

Java ES の配布は、共有される場所にインストールファイルを簡単に格納できるように設計されています。この設計の利点は、インストールファイルをこの共有の場所から何度でも実行できることです。

▼ ネットワーク上にイメージを作成するには

ここでは、Solaris SPARC インストールイメージを作成してサイトのネットワークで公開するための手順を示します。

- 手順
1. **root** としてログインするか、スーパーユーザーになります。
 2. ネットワーク上に共有ディレクトリを作成します。次に例を示します。

```
mkdir shared-location/java_ent_sys_2005Q4
```
 3. **Web** サイト、**CD**、または **DVD** に含まれるインストールファイルにアクセスし、共有すべきインストールファイルを準備します。
 - a. マウントされた **ISO** イメージからインストールイメージを作成します。次に例を示します。

注 - マウントされた **ISO** イメージからインストールを直接実行することはできません。代わりに、イメージをネットワーク上にコピーする必要があります。

```
unzip java_es_05Q4-ga-solaris-sparc-1-iso.zip
lofiadm -a pathname/java_es_05Q4-ga-solaris-sparc-1.iso /dev/lofi/1
```

`/dev/lofi/1` がすでに使用中である場合、`lofiadm(1M)` のマニュアルページを参照してください。

```
mkdir mountpoint
mount -F hsfs /dev/lofi/1 mountpoint
cd mountpoint
find . -print | cpio -pdum shared-location/java_ent_sys_2005Q4
```

コピーが完了したら、ISO イメージのマウントを解除します。

```
cd
umount mountpoint
lofiadm -d /dev/lofi/1
```

残りの ISO イメージについても、この手順を繰り返します。

- b.** CD または DVD からインストールイメージを作成します。次に例を示します。

```
cd /cdrom/cdrom0
find . -print | cpio -pdum shared-location/java_ent_sys_2005Q4
```

残りの CD についても、この手順を繰り返します。

- c.** 圧縮されたアーカイブからインストールイメージを作成します。次に例を示します。

```
cd shared-location/java_ent_sys_2005Q4
unzip pathname/java_sys_2005Q4-ga-solaris-sparc-1.zip
```

残りの圧縮アーカイブファイルについても、この手順を繰り返します。

注 - 複数プラットフォームのファイルを共有の場所にコピーした場合、README ファイルと COPYRIGHT ファイルに関する次のようなプロンプトが表示されます。

```
File already exists. OK to overwrite?
```

Yes と入力します。これらのファイルはすべてのプラットフォームで共通です。

第 2 章

インストールシーケンスの例

この章では、一般的な Sun Java™ Enterprise System (Java ES) インストールシーケンスのガイドラインについて説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 39 ページの「この章の利用方法」
- 40 ページの「単一セッションインストールの例」
- 59 ページの「Solaris 10 ゾーン」
- 61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」
- 65 ページの「コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例」
- 67 ページの「Calendar Server と Messaging Server の例」
- 70 ページの「Calendar-Messaging Schema 1 の例」
- 72 ページの「Communications Express と Messaging Server の例」
- 74 ページの「Instant Messaging と Access Manager の例」
- 76 ページの「通信サービスと共同作業サービスの例」
- 80 ページの「アイデンティティ管理の例」
- 82 ページの「Web とアプリケーションサービスの例」
- 84 ページの「リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例」
- 86 ページの「非ルートの例」

この章の利用方法

この章のインストールシーケンスの例は、一般的な Java ES インストールを実行する大まかなガイドラインを提供することを意図しています。これらは文字どおりの手順を示すものではありませんが、特定の配備シナリオの実装に必要な手順を順を追って説明します。

単一セッションの例では、単一ホストに、単一インストールセッションで1つまたは複数の Java ES コンポーネントをインストールする代表的な手順について説明します。これには評価の例が含まれます。残りの例では、さまざまなソリューションのた

めに、複数ホストで、複数インストールセッションを実行する状況について説明します。ほとんどの場合、この章のシーケンスは、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストール計画ガイド』に示すコンポーネント間の依存関係に基づきます。

注 - LDAP Schema 1 に基づいた例は、70 ページの「[Calendar-Messaging Schema 1 の例](#)」のみで、この章の他のすべての例は Schema 2 に基づいています。

コンポーネントの選択では、Java ES インストーラは、コンポーネントの互換性のないバージョンと要件に適合しないバージョンを識別します。問題が識別されると警告メッセージが出力され、対処する必要がある内容が示されます。これらのメッセージの多くは、適合しない要件に関する指示を出力します。その他のメッセージは、インストールしようとするコンポーネントの一部または全部が、すでにローカルホスト上に存在するコンポーネントのバージョンと互換性がないことを示します。Java ES インストーラを使用して、ローカルホストにすでに存在しているコンポーネントを識別することができます。詳細については、29 ページの「[互換性のないコンポーネントがインストールされている場合](#)」を参照してください。

ヒント - Java ES コンポーネントの互換性のないバージョンを識別し、インストーラを起動する前に削除またはアップグレードすると、インストールを円滑に行うことができます。

すでにローカルホストに存在するコンポーネントをアップグレードする場合は、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』を参照してください。

単一セッションインストールの例

次の例は、単一セッションで、単一ホストにインストールする場合に適用されます。

- 41 ページの「[評価の例](#)」
- 42 ページの「[Access Manager と Portal Server の例](#)」
- 44 ページの「[Application Server のみをインストールする例](#)」
- 46 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」
- 48 ページの「[Directory Proxy Server の例](#)」
- 50 ページの「[Instant Messaging のみをインストールする例](#)」
- 52 ページの「[Message Queue のみをインストールする例](#)」
- 53 ページの「[Portal Server Secure Remote Access の例](#)」
- 56 ページの「[Service Registry のみをインストールする例](#)」
- 57 ページの「[Web Server のみをインストールする例](#)」

評価の例

評価インストールでは、通常、インストールがどのように行われるかを確認するために、トライアル配備、クイックインストールが検討されます。この例は、グラフィカルインタフェースと「今すぐ設定」オプションを使用します。設定ページが表示されたら、可能な限りデフォルト設定を受け入れます。

この例では、単一インストールセッションで、単一ホストに Sun Cluster ソフトウェアを除くすべての Java ES コンポーネントをインストールします。Web Server は Web コンテナとして使用されるため、Application Server はインストールされません。

▼ Java ES 評価のシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** グラフィカルインストーラを起動します。
 2. インストールの前提要件をチェックします。
 3. コンポーネントの選択で、「全て選択」を選択し、次に **Application Server** と **Sun Cluster** コンポーネントの選択を解除します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. インストールディレクトリを確認します。
 5. 「今すぐ設定」オプションを選択します。
インストール時に設定できないコンポーネントを示すメッセージが表示されます。
 6. デフォルト設定がある場合は、それを受け入れます。
非デフォルトの設定情報を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」の該当する設定の表を確認します。
 7. インストールサマリーとログを表示します。
 8. インストール後の設定を完了します。
インストール後の設定の手順については、[第 6 章](#)を参照してください。
 9. コンポーネントを起動します。
[168 ページ](#)の「インストール後設定後の確認」には、推奨 Java ES 起動シーケンスが記載されています。この表の起動手順に従います。

注 - リモートコンポーネントを使用して、依存性の要件を満たす場合は、依存するコンポーネントをインストールする前に、リモートコンポーネントをインストールし、稼働しておく必要があります。

Access Manager と Portal Server の例

この例では、単一ホストの Access Manager で、Web コンテナとして Web Server を使用して、Portal Server をインストールします。Portal Server と Access Manager で同じ種類の Web コンテナを使用してください。

アイデンティティ管理およびポリシーコアサービス、Access Manager 管理コンソール、および連携の共有ドメインサービスを異なるホスト上で使用する場合は、これらの Access Manager サブコンポーネントの選択を解除します。

注 - Access Manager を Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともにインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントを 1 つもインストールしない場合にのみ使用できます。

▼ Access Manager と Portal Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

手順 1. **Java ES** インストーラを実行します。

2. コンポーネントの選択で、**Portal Server** と **Web Server** を選択します。

Access Manager、Directory Server、および Directory Preparation Tool は自動的に選択されます。管理サーバーは Directory Server のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

- Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 - その他任意のコンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、46 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」を参照してください。

- Access Manager のリモートコピーを使用する場合は、Access Manager の選択を解除し、インストール後の設定時にリモートコピーを指定します。
3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
 - 「今すぐ設定」オプションでは、インストール時の設定が可能なコンポーネントを示す設定ページが表示されます。リモートに配置するコンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。
 - 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
 5. インストールを実行します。
 6. インストールサマリーとログを表示します。
 7. インストール後の設定を完了します。
 - 156 ページの「Web Server のインストール後の設定」
 - 145 ページの「Directory Server のインストール後の設定」
 - 133 ページの「Access Manager のインストール後の設定」
 - 150 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」
 8. コンポーネントを起動します。
 - 176 ページの「Directory Server の起動と停止」
 - 185 ページの「Web Server の起動と停止」 (Access Manager と Portal Server が Web Server とともに自動的に起動する)。
 9. デフォルトの **Access Manager** ログインページにアクセスします。
`http://webserver-host:port /amconsole`
次の表には、Access Manager の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Access Manager 設定情報」
インストール後の設定	133 ページの「Access Manager のインストール後の設定」
起動と停止	170 ページの「Access Manager の起動と停止」
アンインストール	195 ページの「Access Manager のアンインストール動作」
トラブルシューティング	237 ページの「Access Manager のトラブルシューティングのヒント」

実行するタスク	関連情報
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

次の表には、Portal Server の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Portal Server の設定情報」
インストール後の設定	150 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」
起動と停止	181 ページの「Web コンテナの起動と Portal Server デスクトップへのアクセス」
アンインストール	204 ページの「Portal Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	242 ページの「Portal Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

Application Server のみをインストールする例

この例では、Application Server を単独でインストールします。

要件

Application Server は、Message Queue のローカルコピーが必要です。負荷分散を使用する場合は、Web Server のローカルコピーが必要です。

注 - このコンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合、コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。Sun Cluster のガイドラインについては、61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。

▼ Application Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Application Server** を選択します。
Message Queue は自動的に選択されます。ロードバランスプラグインおよび Application Server ノードエージェントは選択されません。

(オプション) 負荷分散を実装する場合は、Application Server を展開し、ロードバランスプラグインのサブコンポーネントを選択します。Web Server は必要に応じて選択します。Apache Web Server を使用する場合は、すでに Apache Web Server がインストールされている必要があります。Web Server もインストールされません。Application Server のインストールページで、Web Server と Apache のいずれかを選択します。Web Server のパスを入力します。
 3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. インストールディレクトリを確認します。
 5. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」オプションでは、インストール時の設定が可能なローカルコンポーネントを示す設定ページが表示されます。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Application Server の設定情報」に示す表から、Application Server の設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
 6. インストールを実行します。
 7. インストールサマリーとログを表示します。
 8. インストール後の設定を完了します。
 - 138 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定するには」
 - (オプション) 156 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Web Server を設定するには」
 - (オプション) 148 ページの「Message Queue のインストール後の設定」
 9. **Application Server** を起動します (**Message Queue** が自動的に起動する)。
 - 172 ページの「Application Server の起動と停止」
 - (オプション) 185 ページの「Web Server の起動と停止」

次の表には、Application Server の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Application Server の設定情報」
インストール後の設定	138 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定するには」
起動と停止	172 ページの「Application Server の起動と停止」
アンインストール	197 ページの「Application Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	238 ページの「Application Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

Directory Server のみをインストールする例

この例では、Directory Server を単独でインストールします。

要件およびシーケンスの問題

Directory Server は、他の Java ES コンポーネントとの依存関係はありません。ただし、管理サーバーは Directory Server のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

注 - Directory Server の暗号化のためにレプリケーションを使用する場合は、コンポーネントの選択で管理サーバーを選択してください。

- このコンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合は、コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。
- Directory Server は、Directory Server に依存するその他のコンポーネントをインストールする前に実行する必要があります。
- 配備で Schema 2 が必要な場合、その他のコンポーネントを実装する前に Schema 2 用の Directory Server を設定する必要があります。

▼ **Directory Server** のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Directory Server** とオプションで管理サーバーを選択します。
Directory Preparation Tool は自動的に選択されます。
 3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. インストールディレクトリを確認します。
 5. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」オプションでは、インストール時の設定が可能なローカルコンポーネントを示す設定ページが表示されます。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」に示す表から、設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
 6. インストールを実行します。
 7. インストールサマリーとログを表示します。
 8. インストール後の設定を完了します。
 - 145 ページの「**Directory Server** のインストール後の設定」
 - (オプション) 137 ページの「管理サーバーのインストール後の設定」
 9. 次の順序で、コンポーネントを起動します。
 - a. 176 ページの「**Directory Server** の起動と停止」
 - b. (オプション) 170 ページの「管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止」
次の表には、Directory Server の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Directory Server 設定情報」
インストール後の設定	145 ページの「Directory Server のインストール後の設定」
起動と停止	176 ページの「Directory Server の起動と停止」
アンインストール	201 ページの「Directory Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	241 ページの「Directory Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

Directory Proxy Server の例

この例では、単一ホストで、Directory Server とともに Directory Proxy Server をインストールします。

要件

Directory Proxy Server は Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。また、Directory Proxy Server は、管理サーバーのローカルコピーが必要です。

▼ Directory Proxy Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Directory Proxy Server** を選択します。
Directory Server、Directory Preparation Tool、および管理サーバーは自動的に選択されます。

(オプション) Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 - その他任意のコンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、46 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」を参照してください。

3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
4. インストールディレクトリを確認します。
5. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」オプションでは、インストール時の設定が可能なローカルコンポーネントを示す設定ページが表示されます。
リモートに配置するコンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。

『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」に示す表から、設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
6. インストールを実行します。
7. インストールサマリーとログを表示します。
8. インストール後の設定を完了します。
 - 145 ページの「[Directory Server のインストール後の設定](#)」
 - 137 ページの「[管理サーバーのインストール後の設定](#)」
 - 143 ページの「[Directory Proxy Server のインストール後の設定](#)」
9. 次の順序で、コンポーネントを起動します。
 - a. 176 ページの「[Directory Server の起動と停止](#)」
 - b. 170 ページの「[管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止](#)」
 - c. 175 ページの「[Directory Proxy Server の起動と停止](#)」
次の表には、Directory Proxy Server の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Directory Proxy Server 設定情報」
インストール後の設定	143 ページの「Directory Proxy Server のインストール後の設定」
起動と停止	175 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
アンインストール	202 ページの「Directory Proxy Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	240 ページの「Directory Proxy Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

Instant Messaging のみをインストールする例

この例では、Instant Messaging を単独でインストールします。その他のコンポーネントをインストールして設定してから、別のインストールセッションで Instant Messaging をインストールすることは、まれなことではありません。

注 - シングルサインオンまたは Access Manager 管理ポリシーを使用する場合は、Access Manager が必要です。ガイダンスについては、74 ページの「Instant Messaging と Access Manager の例」を参照してください。

シーケンスの問題

- インストーラは、Instant Messaging が依存するコンポーネントを自動的に選択しません。これらのコンポーネントは、手動で選択する必要があります。
- Instant Messaging でその他のコンポーネントを配備する場合は、Instant Messaging を設定する前に、その他のコンポーネントを設定する必要があります。Instant Messaging で一般的に使用される Java ES コンポーネントには、Messaging Server、Calendar Server、および Portal Server (Access Manager で使用) があります。

▼ Instant Messaging のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Instant Messaging** を選択します。
 3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. インストールディレクトリを確認します。
 5. 「あとで設定」オプションを選択します。
Instant Messaging は、インストール時に設定できません。
 6. インストールを実行します。
 7. インストールサマリーとログを表示します。
 8. インストール後の設定を完了します。
147 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定」
 9. **Instant Messaging** を起動します (**Instant Messaging** が依存する可能性のあるその他のコンポーネントを起動後)。
177 ページの「Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動と停止」
- 次の表には、Instant Messaging の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	147 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定」
起動と停止	177 ページの「Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動と停止」
アンインストール	202 ページの「Instant Messaging のアンインストール動作」
トラブルシューティング	241 ページの「Instant Messaging のトラブルシューティングのヒント」

実行するタスク	関連情報
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』
配備シナリオ	Sun Java System Communications Deployment Planning Guide

Message Queue のみをインストールする例

この例では、Message Queue を単独でインストールします。

要件

Message Queue は、他の Java ES コンポーネントとの依存関係はありません。

注 - このコンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合は、コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照して、Sun Cluster のガイドラインを確認します。

▼ Message Queue のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

手順 1. **Java ES** インストーラを実行します。

2. コンポーネントの選択で、**Message Queue** を選択します。

3. 非互換性の問題を解決します。

インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。

- Solaris OS の場合:

以前の Message Queue の Platform Edition のコピーがホストで検出された場合、インストーラは Message Queue の Enterprise Edition に、自動的にインストールをアップグレードします。

以前の Message Queue の Enterprise Edition のコピーがホストで検出された場合、インストーラを終了し、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』で説明する Message Queue の Enterprise Edition へのアップグレード手順に従う必要があります。

■ Linux の場合:

以前の Message Queue のコピー (Platform または Enterprise Edition) がホストで検出された場合、インストーラを終了し、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』で説明する Message Queue の Enterprise Edition へのアップグレードおよび移行手順に従う必要があります。

4. 「あとで設定」オプションを選択します。
Message Queue は、インストール時に設定できません。
5. インストールを実行します。
6. インストールサマリーとログを表示します。
7. **Message Queue** を起動します。

179 ページの「[Message Queue の起動](#)」

次の表には、Message Queue の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	148 ページの「 Message Queue のインストール後の設定 」
起動と停止	179 ページの「 Message Queue の起動 」
アンインストール	203 ページの「 Message Queue のアンインストール動作 」
トラブルシューティング	241 ページの「 Message Queue のトラブルシューティングのヒント 」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

Portal Server Secure Remote Access の例

この例では、単一ホストの Access Manager で、Web コンテナとして Web Server を使用して、Portal Server Secure Remote Access をインストールします。

要件

Portal Server Secure Remote Access は、Access Manager または Access Manager SDK のローカルコピーが必要です。Portal Server Secure Remote Access コアには、ゲートウェイの場合を除き Portal Server のローカルコピーが必要です。ゲートウェイの場合、Portal Server Secure Remote Access は Portal Server のローカルコピーは必要とせず、別のホストにインストールできます。Portal Server Secure Remote Access は、Portal Server と同じ場所にインストールする必要があります。Directory Server は Portal Server で必要になりますが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Access Manager には、ローカルの Web コンテナが必要です。

注 – Access Manager を Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともにインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントを1つもインストールしない場合にのみ使用できます。

▼ Portal Server Secure Remote Access のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Portal Server Secure Remote Access** と **Web Server** を選択します。
Portal Server、Access Manager、Directory Server、および Directory Preparation Tool は自動的に選択されます。
 - Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 – その他任意のコンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、46 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」を参照してください。

- Access Manager のリモートコピーを使用する場合は、Access Manager の選択を解除し、インストール後の設定時にリモートコピーを指定します。

注 – その他任意のコンポーネントをインストールする前に、リモートの Access Manager を実行する必要があります。Access Manager のインストール手順については、80 ページの「[アイデンティティ管理の例](#)」を参照してください。

3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
4. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。

- a. 「今すぐ設定」オプションでは、インストール時の設定が可能なコンポーネントを示す設定ページが表示されます。リモートに配置するコンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第1章「設定情報」に示す表から、設定情報を収集する必要があります。
 - b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
5. インストールを実行します。
 6. インストールサマリーとログを表示します。
 7. インストール後の設定を完了します。
「今すぐ設定」の場合は、次を参照してください。
 - 134 ページの「「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
 - 150 ページの「Sun の Web コンテナ上での「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後のポータル設定」「あとで設定」の場合は、次を参照してください。
 - 145 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Directory Server を設定するには」
 - 136 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
 - 156 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Web Server を設定するには」
 - 152 ページの「Sun の Web コンテナ上での「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」
 8. コンポーネントを起動します。
 - 176 ページの「Directory Server の起動と停止」
 - 185 ページの「Web Server の起動と停止」 (Access Manager と Portal Server が自動的に起動する)
 - 182 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
 9. デフォルトの **Access Manager** ログインページにアクセスします。
`http://webserver-host:port/amserver`
 10. ポータルにアクセスします。
`http://webserver-host:port/portal/dt`
 11. **Portal Gateway** にアクセスします。
`http://gateway-server:port/`
- 次の表には、Portal Server Secure Remote Access の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Portal Server Secure Remote Access の設定情報」
起動と停止	182 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
アンインストール	205 ページの「Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作」
トラブルシューティング	243 ページの「Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

Service Registry のみをインストールする例

この例では、Service Registry を単独でインストールします。

要件

Service Registry は、Application Server のローカルコピーと少なくともその 2 つのサブコンポーネント、ドメイン管理サーバーとコマンド行管理ツールが必要です。Message Queue も必要です。

▼ Service Registry のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Service Registry** を選択します。
Application Server とその必須サブコンポーネント、および Message Queue は自動的に選択されます。
 3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. インストールディレクトリを確認します。

5. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」オプションでは、インストーラによって **Application Server** 設定ページが表示されます。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」に示す表から、設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
Service Registry は、インストール時に設定できません。
6. インストールを実行します。
7. インストールサマリーとログを表示します。
8. 次の順序で、インストール後の設定を完了します。
 - a. 138 ページの「**Application Server** のインストール後の設定」
 - b. 154 ページの「**Service Registry** のインストール後の設定」
9. **Application Server** と **Service Registry** を起動します。
 - 172 ページの「**Application Server** の起動と停止」
 - 183 ページの「**Service Registry** の起動と停止」

次の表には、Service Registry のインストールの追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	154 ページの「 Service Registry のインストール後の設定」
アンインストール	206 ページの「 Service Registry のアンインストール動作」
トラブルシューティング	243 ページの「 Service Registry のトラブルシューティングのヒント」

Web Server のみをインストールする例

この例では、Web Server を単独でインストールします。

要件

Web Server は、他のコンポーネントとの依存関係はありません。

注 – このコンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合、コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照して、Sun Cluster のガイドラインを確認します。

▼ Web Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Web Server** を選択します。
 3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. インストールディレクトリを確認します。
 5. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」オプションでは、インストーラによって **Web Server** 設定ページが表示されます。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」に示す表から、設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
 6. インストールを実行します。
 7. インストールサマリーとログを表示します。
 8. インストール後の設定を完了します。
156 ページの「Web Server のインストール後の設定」
 9. **Web Server** を起動します。
185 ページの「Web Server の起動と停止」
次の表には、Web Server のインストールの追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定	156 ページの「Web Server のインストール後の設定」
起動と停止	185 ページの「Web Server の起動と停止」
アンインストール	207 ページの「Web Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	244 ページの「Web Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

Solaris 10 ゾーン

ここでは、Java ES の現在のリリースの Solaris 10 ゾーンのサポートについてその概要を説明します。インストールシーケンスの例が含まれます。

Solaris ゾーンの概要

Solaris 10 ゾーン (Solaris コンテナとも呼ばれる) 機能は、Solaris OS のインスタンス内に、オペレーティングシステム環境を仮想化する手段を提供します。この機能により、ホストの別のアクティビティーとは分離して1つまたは複数のプロセスが実行可能になります。たとえば、ゾーンで実行するプロセスは、ユーザー ID やその他の資格情報に関係なく、同じゾーンの別のプロセスに信号を送信する機能だけを持ちます。

すべての Solaris 10 ホストには、1つの大域ゾーンが含まれています。大域ゾーンは、ホストのデフォルトゾーンであると同時にシステム全体の管理コントロールに使用するゾーンです。グローバル管理者によって非大域ゾーンが作成されない場合、すべてのプロセスが大域ゾーンで実行されます。Sun Cluster ソフトウェアなど一部の Java ES コンポーネントは、大域ゾーンにのみインストールできます。

非大域ゾーンは、ボックスとみなすことができます。残りのホストと相互に作用することなく、このボックス内で1つまたは複数のアプリケーションを実行することができます。各非大域ゾーンは、その非大域ゾーンに特有の設定およびその他の情報を持つ、インストールされた Solaris 10 オペレーティングシステムの独自のインスタンスであるように見えます。非大域ゾーンのデフォルトの設定は、ファイルシステムの一部を大域ゾーンと共有します (読み取り専用のループバックファイルシステムのマウントとして)。Java ES では、すべての非大域ゾーンを、継承ファイルシステムを含まない“完全にルート”のゾーンとして作成する必要があります。

Java ES のこのリリースでのゾーンサポート

Java ES のこのリリースでの Java ES ゾーンサポートのレベルは、次のとおりです。

1. 非大域ゾーンがすでに存在する場合、Java ES を大域ゾーンにインストールできません。
2. 非大域ゾーンは、Java ES を大域ゾーンにインストールした後に作成できます。
3. 大域ゾーンに別の Java ES インストールがすでにインストールされていても、Java ES を完全にルートの非大域ゾーンにインストールできます。
4. デフォルトの疎ルート非大域ゾーンへの Java ES のインストールは、サポートされません。疎ルートファイルシステムが検出されると、Java ES インストーラは、インストールを続行できません。
5. 完全にルートの非大域ゾーンに Java ES がすでにインストールされている場合でも、Java ES を大域ゾーンにインストールできます。

Solaris 10 ゾーンの例

この例では、Solaris 10 非大域ゾーンに Java ES ソフトウェアをインストールします。

▼ Solaris 10 ゾーンへのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 手順
1. ホストに **Solaris 10** がインストールされているかどうかを確認します。
大域ゾーンは自動的に作成されます。
 2. 実装計画に指定したすべての非大域ゾーンが、大域ゾーン管理者によって“完全にルート”のゾーンとして作成されているかどうかを確認します。
非大域ゾーンの作成に関する詳細については、『System Administration Guide: Solaris Containers-Resource Management and Solaris Zones』の第 18 章「Planning and Configuring Non-Global Zones (Tasks)」を参照してください。
 3. 希望する非大域ゾーンで **Java ES** インストーラを起動します。
 4. コンポーネントの選択で、希望するコンポーネントを選択します。
一部のコンポーネントは、大域ゾーン機能にアクセスするため非大域ゾーンにはインストールできません。これらのコンポーネントは、コンポーネントの選択で利用できません。
 5. インストールを実行します。
 6. インストールサマリーとログを表示します。

7. 必要に応じて、インストール後の設定を完了します。
インストール後の設定手順については、第 6 章を参照してください。
8. コンポーネントを起動します。
Java ES コンポーネントの起動と停止の手順については、第 7 章を参照してください。
9. 必要に応じて、追加の非大域ゾーンでこのプロセスを繰り返します。

Sun Cluster ソフトウェアの例

この例では、Sun Cluster フレームワークで Messaging Server をインストールします。

注 - 単一サーバーではなく、クラスタ内で実行するように設定できるコンポーネントには、管理サーバー、Application Server Calendar Server、Directory Server、HADB、Message Queue、Messaging Server、および Web Server があります。

Sun Cluster ソフトウェアをインストールまたは設定する前に、クラスタ用に選択するハードウェアとソフトウェアの組み合わせが、現在サポートされている Sun Cluster 設定であることを確認します。

要件およびシーケンスの問題

Messaging Server は Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。また、Messaging Server は、管理サーバーのローカルコピーが必要です。Directory Server、管理サーバー、および Messaging Server 用の Sun Cluster コアコンポーネントおよび Sun Cluster エージェントが必要です。リモート Directory Server が使用されている場合は、Directory Server 用の Sun Cluster エージェントは必要ありません。

Sun Cluster の実装を成功させるには、コンポーネントを正しい順序でインストールし、設定し、起動することがきわめて重要です。

1. Java ES Sun Cluster コンポーネントをインストールします。
2. Sun Cluster フレームワークを設定します。
3. Messaging Server がクラスタ内で動作するために必要となる Java ES の追加コンポーネントをインストールします。
4. 関連する Java ES コンポーネントのエージェントを使用して、Sun Cluster データサービスを設定します。

クラスタの各ノードで、少なくとも2つのインストールセッションが実行されます。

第1段階: Sun Cluster フレームワークのインストールと設定

クラスタのすべてのノードで、次のタスクを実行する必要があります。

▼ Sun Cluster フレームワークのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

- 手順
1. ハードウェアがクラスタに正しく接続されているかどうか確認します。
 - Sun Cluster 3.0-3.1 Hardware Collection for Solaris OS (SPARC Platform Edition) <http://docs.sun.com/coll/1024.1>
 - Sun Cluster 3.0-3.1 Hardware Collection for Solaris OS (x86 Platform Edition) <http://docs.sun.com/coll/1142.1>
 2. **Java ES** インストーラを実行します。
Solaris 10 では、Sun Cluster ソフトウェアを大域ゾーンにのみインストールできません。
 3. コンポーネントの選択で、**Sun Cluster** コンポーネントだけを選択します。

ヒント - 「今すぐ設定」インストール時に (通常は、すべての Java ES コンポーネントのインストールを選択)、Sun Cluster のリモート設定のサポートを有効にするかどうかの指定が求められます。「はい」を選択すると、Sun Cluster ソフトウェアのインストール後の設定が容易になります。

4. 「あとで設定」オプションを選択します。
5. 手順に従って、クラスタの各ホストに対して **Sun Cluster** フレームワークを設定します。

『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』の第2章「Installing and Configuring Sun Cluster Software」に示す手順に従います。Sun Cluster のドキュメントで Sun Cluster CD-ROM の部分を、同等の Java ES CD-ROM の名前に置き換えてください。

リソースグループの作成およびデータサービスの設定に関するドキュメントについては、『Sun Cluster Data Services Planning and Administration Guide for Solaris OS』を参照してください。

6. 必要に応じて、**Sun Cluster** の特殊機能である **RSMAPI (SUNWscrif)**、**SCI-PCI アダプタ (SUNWsci)**、**RSMRDT ドライバ (SUNWscrdt)** をインストールします。
『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』

第2段階: コンポーネントとエージェントのインストールと設定

クラスタのすべてのノードで、次のタスクを実行する必要があります。

▼ コンポーネントとエージェントの設定シーケンスを作成するには、次の手順に従います。

手順 1. **Java ES** インストーラを実行します。

2. コンポーネントの選択で、次のとおり選択します。

a. **Messaging Server**

Directory Server、Directory Preparation Tool、および管理サーバーは自動的に選択されます。

(オプション) Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注 - その他任意のコンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、46 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」を参照してください。

b. **Sun Java System** 用 **Sun Cluster** エージェント

デフォルトで、すべてのエージェントが選択されます。

c. **Sun Java System** コンポーネント用の **Sun Cluster** エージェントを展開し、管理サーバー、**Directory Server**、**Messaging Server** を除く、すべてのエージェントの選択を解除します。

3. 非互換性の問題を解決します。

インストーラは、ノード上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。

4. インストールディレクトリを確認します。

5. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
Messaging Server と Sun Cluster エージェントは、インストール時に設定できません。
6. **Sun Cluster** エージェントを除く、選択したすべてのコンポーネントを設定します。
 - 145 ページの「Directory Server のインストール後の設定」
 - 137 ページの「管理サーバーのインストール後の設定」
 - 148 ページの「Messaging Server のインストール後の設定」
インストールディレクトリを指定するときは、Messaging Server のクラスタファイルシステム上の場所を使用します。
7. 次の順序で、**Sun Cluster** エージェントを除くすべてのコンポーネントを起動します。
 - a. 176 ページの「**Directory Server** の起動と停止」
 - b. 170 ページの「管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止」
 - c. 179 ページの「**Messaging Server** の起動と停止」
8. インストールして設定したコンポーネントのデータサービスを設定します。
156 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」

次の表には、Sun Cluster の追加情報が含まれています。

実行するタスク	関連情報
インストール後の設定情報	132 ページの「フェーズ I. Sun Cluster フレームワーク」 156 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」
起動と停止	185 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動」
アンインストール	207 ページの「Sun Cluster のアンインストール動作」
トラブルシューティング	243 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』

コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例

この例では、リモートホストにすでにインストールされている Access Manager のコピーを使用して、Access Manager SDK をインストールします。

注 - このシーケンス例を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』の既知の問題 6293225 も参照してください。

要件

Access Manager SDK をインストールする前に、リモートホストに Access Manager コアサービスをインストールし、稼動しておく必要があります。このインストールの例で実行中に指定する Web コンテナの情報と Directory Server の設定情報は、Access Manager コアサービスのインストール時に指定した Web コンテナ情報および Directory Server 設定情報と一致している必要があります。

注 - インストーラが Web コンテナと Directory Server に関する情報を要求するとき、ローカルホストの設定に基づいたデフォルト値が表示されます。

デフォルト値は形式の例としてだけ使用し、これらの値をそのまま適用しないでください。ここでは、デフォルト値の代わりに、リモートホストの正しい情報を指定する必要があります。

Access Manager SDK だけをインストールする場合、Java ES インストーラでは Web コンテナを設定することはできません。

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Access Manager** コアサービスをインストールし、起動します。
80 ページの「アイデンティティ管理の例」

▼ **ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
 2. コンポーネントの選択で、**Access Manager SDK** を選択します。
 3. 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
 4. 「あとで設定」オプションを選択します。
 5. インストールを実行します。
 6. インストールサマリーとログを表示します。
 7. **Web** コンテナがインストールされ、稼働されていることを確認します。
 8. **amsamplesilent** ファイルを編集します。
 - a. *AccessManager-base/SUNWam/bin* ディレクトリで、**amsamplesilent** ファイルのコピーを作成します。
 - b. デフォルトでは、**amsamplesilent** ファイルの多くの設定値は、コメントアウトされています。次の設定値のコメントを解除します。
 - `SERVER_NAME`
 - `SERVER_HOST`
 - `SERVER_PORT`
 - `ADMIN_PORT`
 - `DS_HOST`
 - `DS_DIRMGRPASSWD`
 - `ROOT_SUFFIX`
 - `ADMINPASSWD`
 - `AMLdapUSERPASSWD`
 - `COOKIE_DOMAIN`
 - `AM_ENC_PWD`
 - `NEW_OWNER`
 - `NEW_GROUP`
 - `PAM_SERVICE_NAME`
 - `WEB_CONTAINER`
 - c. **amsamplesilent** ファイルのパラメータを次のように変更します。
 - `DEPLOY_LEVEL` は 4 に設定してください。
 - `SERVER_HOST` と `SERVER_PORT` は、Access Manager SDK で使用する完全サーバーのホストとポートに設定してください。

- DS_HOST、DS_DIRMGRPASSWD、および ROOT_SUFFIX は、ホスト A Directory Server のホスト名、ディレクトリマネージャーパスワード、およびルートサフィックスに設定してください。
 - ADMINPASSWD と AMLDAPUSERPASSWD は、ホスト A で使用する amadmin パスワードと amldapuser パスワードに設定してください。
 - AM_ENC_PWD は、ホスト A で使用するパスワードの暗号鍵に設定してください。Access Manager SDK では、ホスト B への Access Manager のリモートインストール時に指定した暗号鍵と同じ暗号鍵を AM_ENC_PWD に使用します。この値は、次のコマンドを使用して取得します。

```
grep pwd /etc/opt/SUNWam/config/AMConfig.properties
```
 - WEB_CONTAINER は、使用している Web コンテナに対応する値に設定してください。
 - BASEDIR は、Access Manager SDK の「あとで設定」インストール時に使用するインストールディレクトリに設定してください。
 - ホスト A でレルムモードを使用する場合は AM_REALM を「Enabled」に、旧バージョンモードを使用する場合は「Disabled」に設定してください。
 - SDK で使用する Web コンテナに対応する設定値を見つけ、それらの設定値を当該 Web コンテナの詳細情報を使用して変更します。たとえば、WEB_CONTAINER を WS6 (Sun Java System Web Server) に設定した場合は、WS61_INSTANCE、WS61_HOME、WS61_PROTOCOL など WS61 プレフィックスの付く設定値を変更してください。
9. スーパーユーザーとして、編集した **amsamplesilent** ファイルを使用し、**Access Manager** を配備します。
- ```
./ amconfig -s ./am.sdk_install
```
10. Web コンテナを再起動します。

---

## Calendar Server と Messaging Server の例

この例では、ホストが3つ存在する Schema 2 環境で、Calendar Server と Messaging Server をインストールします。Access Manager と Directory Server のリモートコピーを使用します。

---

注 – Schema 1 の例については、70 ページの「[Calendar-Messaging Schema 1 の例](#)」を参照してください。

---

## 要件およびシーケンスの問題

シングルサインオンまたは Access Manager 管理ポリシーを実装する場合は、Access Manager が必要です。この場合は、Access Manager または Access Manager SDK のローカルコピーのいずれかが必要です。Access Manager SDK は Access Manager が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Calendar Server と Messaging Server は、両方とも Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Messaging Server は、管理サーバーのローカルコピーが必要です。

この例では、Directory Server と Access Manager のリモートコピーを使用します。Access Manager には、ローカルの Web コンテナが必要です。

---

注 – Access Manager を Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともにインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントを 1 つもインストールしない場合にのみ使用できます。

---

- このコンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合、コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。
- 依存するコンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server をインストールし、実行する必要があります。
- Access Manager SDK をインストールする前に、リモートの Access Manager を実行する必要があります。Access Manager のインストール手順については、80 ページの「アイデンティティ管理の例」を参照してください。

### ▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Directory Server** をインストールし、起動します。  
管理サーバーは Directory Server のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

46 ページの「Directory Server のみをインストールする例」

### ▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Web** コンテナと **Access Manager** をインストールし、起動します (**Directory Server** の選択を解除する)。  
80 ページの「アイデンティティ管理の例」

▼ **ホスト C 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. **Java ES** インストーラを実行します。
2. コンポーネントの選択で、**Calendar Server**、**Messaging Server**、および **Access Manager SDK** を選択します。  
Directory Server、Directory Preparation Tool、および管理サーバーは自動的に選択されます。
3. **Directory Server** の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。
4. 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
5. インストールディレクトリを確認します。
6. 「今すぐ設定」オプションを選択します。  
Calendar Server と Messaging Server は、インストール時に設定できません。  
インストール時に設定可能なローカルコンポーネントの設定ページが表示されます。リモートに配置するコンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」に示す表から、設定情報を収集します。
7. インストールを実行します。
8. インストールサマリーとログを表示します。
9. リモートコンポーネントの指定を含む、インストール後の設定を完了します。
- 141 ページの「Calendar Server のインストール後の設定」
  - 148 ページの「Messaging Server のインストール後の設定」
10. 次の順序で、コンポーネントを起動します。
- a. 170 ページの「管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止」
  - b. 179 ページの「Messaging Server の起動と停止」

c. 174 ページの「**Calendar Server** の起動と停止」

次の表には、Calendar Server の追加情報が含まれています。

| 実行するタスク     | 関連情報                                           |
|-------------|------------------------------------------------|
| インストール後の設定  | 141 ページの「Calendar Server のインストール後の設定」          |
| 起動と停止       | 174 ページの「Calendar Server の起動と停止」               |
| アンインストール    | 198 ページの「Calendar Server のアンインストール動作」          |
| トラブルシューティング | 239 ページの「Calendar Server のトラブルシューティングのヒント」     |
| アップグレード     | 『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』 |

次の表には、Messaging Server の追加情報が含まれています。

| 実行するタスク     | 関連情報                                                                         |
|-------------|------------------------------------------------------------------------------|
| インストール後の設定  | 148 ページの「Messaging Server のインストール後の設定」                                       |
| 起動と停止       | 179 ページの「Messaging Server の起動と停止」                                            |
| アンインストール    | 219 ページの「Messaging Server インストール後」<br>203 ページの「Messaging Server のアンインストール動作」 |
| トラブルシューティング | 242 ページの「Messaging Server のトラブルシューティングのヒント」                                  |
| アップグレード     | 『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』                               |

---

## Calendar-Messaging Schema 1 の例

この例では、2つのホストに、LDAP Schema 1 環境で Calendar Server と Messaging Server をインストールします。Directory Server のリモートバージョンを使用します。

## 要件

Calendar Server と Messaging Server は、両方とも Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。また、Messaging Server は、管理サーバーのローカルコピーが必要です。

### ▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Directory Server** をインストールし、起動します。
- 管理サーバーは Directory Server のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

[46 ページの「Directory Server のみをインストールする例」](#)

### ▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
  2. コンポーネントの選択で、**Calendar Server** と **Messaging Server** を選択します。  
Directory Server、Directory Preparation Tool、および管理サーバーは自動的に選択されます。
  3. **Directory Server** の選択を解除します。  
ローカルまたはリモートの Directory Server の選択が求められた場合は、リモート(すでにホスト A にインストールされ、稼働されている Directory Server) を選択します。
  4. 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
  5. 「今すぐ設定」オプションを選択します。  
Calendar Server と Messaging Server はインストール時に設定できないことを示すメッセージが表示されます。
  6. 管理サーバーの設定ページを確認します。
  7. インストールを実行します。

8. インストールサマリーとログを表示します。
9. インストール後の設定を完了します。
  - 141 ページの「Calendar Server のインストール後の設定」
  - 148 ページの「Messaging Server のインストール後の設定」
10. 次の順序で、コンポーネントを起動します。
  - a. 170 ページの「管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止」
  - b. 179 ページの「Messaging Server の起動と停止」
  - c. 174 ページの「Calendar Server の起動と停止」

---

## Communications Express と Messaging Server の例

この例では、2つのホストに、Schema 2 環境で、メッセージングサービス用の Communications Express をインストールします。Directory Server のリモートコピーを使用します。

---

注 - Linux の場合: このシーケンス例を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』の既知の問題 6283991 も参照してください。

---

### 要件およびシーケンスの問題

Communications Express は、Access Manager または Schema 2 用の Access Manager SDK が必要です。Access Manager SDK のローカルコピーは常に必要ですが、Access Manager はリモートコピーを使用することができます。Directory Server は Access Manager と Communications Express で必要ですが、Directory Server はローカルホスト上に配置する必要はありません。Communications Express は、Application Server または Web Server に配置できるローカル Web コンテナを必要とします。

メッセージングサービスを使用するには、Communications Express は、管理サーバーのローカルコピーを必要とする Messaging Server のローカルコピーが必要です。カレンダーサービスを使用する場合、Communications Express は Calendar Server を必要としますが、Calendar Server をローカルホスト上に配置する必要はありません。この例では、メッセージングサービスを使用します。

---

注 – Access Manager を Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともにインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントを 1 つもインストールしない場合にのみ使用できます。

---

- Messaging Server または Web Server を Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合、コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照して、Sun Cluster のガイドラインを確認します。
- 依存するコンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server をインストールし、実行する必要があります。

▼ **ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Directory Server** をインストールし、起動します。  
管理サーバーは Directory Server のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

46 ページの「Directory Server のみをインストールする例」

▼ **ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Java ES** インストーラを実行します。
  2. コンポーネントの選択で、**Communications Express**、**Access Manager**、**Messaging Server**、および **Web Server** を選択します。  
管理サーバー、Directory Server、および Directory Preparation Tool は自動的に選択されます。
  3. **Directory Server** の選択を解除します。  
ローカルまたはリモートの Directory Server の選択が求められた場合は、リモート (すでにホスト A にインストールされ、稼働されている Directory Server) を選択します。
  4. 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。

5. 「今すぐ設定」オプションを選択します。  
Communications Express はインストール時に設定できません。インストール後に設定する必要があります。  
  
インストール時に設定可能なこれらのコンポーネントに対して、設定ページが表示されます。
6. 設定ページを確認します。
7. インストールを実行します。
8. インストールサマリーとログを表示します。
9. インストール後の設定を完了します。
  - 133 ページの「Access Manager のインストール後の設定」
  - 148 ページの「Messaging Server のインストール後の設定」
  - 142 ページの「Communications Express のインストール後の設定」
10. コンポーネントを起動します。
  - 179 ページの「Messaging Server の起動と停止」
  - 185 ページの「Web Server の起動と停止」 (Access Manager は自動的に起動)
11. 次の URL を使用して、デフォルトの **Communications Express** のログインページにアクセスします。  
  
`http://webcontainer-host:webcontainer-port/  
uri-path-CommsExpress`
12. 次の URL を使用して、デフォルトの **Access Manager** のログインページにアクセスします。  
  
`http://web-container-host:web-container-port  
/amservice/UI/Login`

---

## Instant Messaging と Access Manager の例

この例では、リモートの Directory Server と Web コンテナとして Web Server を使用して、Access Manager で Instant Messaging をインストールします。

## 要件およびシーケンスの問題

Instant Messaging コアサブコンポーネントでは、Access Manager が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Instant Messaging リソースサブコンポーネントの場合、Access Manager SDK が Instant Messaging のローカルになければなりません。Access Manager には Web コンテナが必要です。このコンテナはリモートに配置できます。Access Manager を使用する場合、Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Instant Messaging で Access Manager を使用する場合、Access Manager SDK も使用する必要があります。

---

注 - Access Manager を Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともにインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントを 1 つもインストールしない場合にのみ使用できます。

---

- インストーラは、Instant Messaging が依存するコンポーネントを自動的に選択しません。これらのコンポーネントは、手動で選択する必要があります。
- Instant Messaging でその他のコンポーネントを配備する場合は、Instant Messaging を設定する前に、その他のコンポーネントを設定する必要があります。  
Instant Messaging で一般的に配備される Java ES コンポーネントには、Messaging Server、Calendar Server、および Portal Server (Access Manager で使用) があります。

### ▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Directory Server** をインストールし、起動します。  
管理サーバーは Directory Server のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

[46 ページの「Directory Server のみをインストールする例」](#)

### ▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. **Java ES** インストーラを実行します。  
2. コンポーネントの選択で、**Instant Messaging** と **Web Server** を選択します。

3. **Directory Server** の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。
4. 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
5. インストールディレクトリを確認します。
6. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。  
Instant Messaging は、インストール時に設定できません。
  - a. 「今すぐ設定」オプションでは、**Web Server** の設定ページが表示されます。  
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」に示す表から、設定情報を収集します。
  - b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
7. インストールを実行します。
8. インストールサマリーとログを表示します。
9. インストール後の設定を完了します。
  - 156 ページの「**Web Server** のインストール後の設定」
  - 147 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の **Instant Messaging** の設定」(オプション) リモートコンポーネントの場合は、**Instant Messaging** の設定時に **Directory Server**、**Access Manager**、および **Web Server** のリモートの場所を指定します。
10. 次の順序で、コンポーネントを起動します。
  - a. 185 ページの「**Web Server** の起動と停止」
  - b. 177 ページの「**Instant Messaging** サーバーとマルチプレクサの起動と停止」

---

## 通信サービスと共同作業サービスの例

この例では、4 ホストにまたがる通信サービスと共同作業サービスを実装するために、ほとんどの Java ES コンポーネントをインストールします。

---

注 – これらのコンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合、Java ES コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。

---

## 要件およびシーケンスの問題

Directory Server は、すべての通信コンポーネントで必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Messaging Server は、管理サーバーのローカルコピーが必要です。Access Manager または Access Manager SDK が必要です。ただし、Access Manager はリモートに配置できます。この例では、Web Server は Web コンテナとしての Access Manager の要件を満たします。Calendar Server と Messaging Server ではローカルの Web コンテナは必要ありませんが、Communications Express では必要になります。Communications Express は Calendar Server のリモートコピーを使用できますが、Messaging Server はローカルでなければなりません。

---

注 – Access Manager を Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともにインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントを 1 つもインストールしない場合にのみ使用できます。

---

シングルサインオンを実装するには、Instant Messaging に Access Manager とローカルまたはリモートの Web コンテナが必要です。Portal Server Secure Remote Access は、Access Manager とローカルの Web コンテナが必要です。Portal Server Secure Remote Access には Portal Server も必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Portal Server Secure Remote Access は、Portal Server と同じ場所にインストールする必要があります。Access Manager と Portal Server で異なる Web コンテナを使用することはできません。

大規模配備の場合、この例とほぼ同じ順序で、別個のサーバーに各コンポーネントを配備することが可能です。小規模配備の場合、コンポーネントは少数のサーバーの個別のインストールセッションでインストールします。

---

注 – このシーケンス例を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』の既知の問題 6284663 も参照してください。

---

この例では、次のインストールセッションを使用します。

- セッション 1、ホスト A: Access Manager と Directory Server をインストールします。

- セッション 2、ホスト B: Portal Server と Web Server をインストールします (ホスト A のリモートの Directory Server と Access Manager を使用)。
- セッション 3、ホスト C: Calendar Server をインストールします (ホスト A のリモートの Directory Server と Access Manager を使用)。
- セッション 4、ホスト D: Communications Express、Messaging Server、Access Manager SDK、および Web Server をインストールします (ホスト A のリモートの Directory Server と Access Manager、ホスト C のリモートの Calendar Server を使用)。
- セッション 5、ホスト D: その他のコンポーネントをインストールし、機能させてから、Instant Messaging をインストールします (ホスト A のリモートの Directory Server と Access Manager を使用)。
- セッション 6、ホスト D: Portal Server Secure Remote Access をインストールします (ホスト A のリモートの Directory Server と Access Manager を使用)。  
インストールを多数のセッションに分割することで、次のセッションに進む前に、各セッションのコンポーネントを検証することができます。

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Access Manager** と **Directory Server** をインストールし、起動します。  
管理サーバーは Directory Server のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

[80 ページの「アイデンティティ管理の例」](#)

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● ホスト A にインストールし、稼動しているリモートの **Access Manager** と **Directory Server** を指定して、**Portal Server** と **Web Server** をインストールし、起動します。

Web コンテナと Access Manager SDK は Portal Server のローカルになければなりません。

- [42 ページの「Access Manager と Portal Server の例」](#)
- [84 ページの「リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例」](#)

▼ ホスト C 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● ホスト A にインストールしたりリモートの **Access Manager** と **Directory Server** を指定して、**Calendar Server** をインストールし、起動します。
- Access Manager SDK は、Messaging Server と Calendar Server のローカルになければなりません。
- 67 ページの「**Calendar Server** と **Messaging Server** の例」を使用して、Calendar Server のみをインストールします。

▼ ホスト D の最初のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. 「あとで設定」オプションを使用して、**Communications Express**、**Messaging Server**、**Access Manager SDK**、および **Web Server** をインストールします。
2. **Web Server** のインストール後の設定を実行します。  
156 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に **Web Server** を設定するには」
3. **AM SDK** の設定を実行し、ローカルの **Web Server** とリモートの **Access Manager** で動作するようにします。  
65 ページの「コンテナの設定を使用する **Access Manager SDK** の例」
4. 管理サーバー のインストール後の設定を実行します。  
137 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に管理サーバーを設定するには」
5. **Messaging Server** のインストール後の設定を実行します。  
148 ページの「**Messaging Server** のインストール後の設定」
6. **Messaging Server** を起動します。  
179 ページの「**Messaging Server** の起動」
7. **Communications Express** のインストール後の設定を実行します。  
この設定中に、ホスト A の **Access Manager**、ホスト C の **Calendar Server**、およびホスト D の **Messaging Server** に関する情報を提供します。  
142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に **Communications Express** を設定するには」

8. ホスト D で **Web Server** を再起動します。  
185 ページの「[Web Server の起動と停止](#)」

▼ ホスト D の 2 番目のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. **Instant Messaging** をインストールします。  
50 ページの「[Instant Messaging のみをインストールする例](#)」
  2. **Instant Messaging** のインストール後の設定を実行します。  
147 ページの「[Instant Messaging のインストール後の設定](#)」

▼ ホスト D の 3 番目のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. ホスト A にインストールしたリモートの **Access Manager** と **Directory Server** を指定して、**Portal Server Secure Remote Access** をインストールします。  
Portal Server Secure Remote Access の要件の 1 つとして、Portal Server もインストールします。  
84 ページの「[リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例](#)」
  2. 初期ユーザーを確立し、シングルサインオンを設定します。

---

## アイデンティティ管理の例

この例では、リモートホストの Directory Server で、Access Manager と Directory Server をインストールして、アイデンティティ管理を実装します。

### 要件

Access Manager は Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Access Manager は、Web コンテナが必要です(この例では Web Server)。その他任意のコンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server を実行する必要があります。

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Directory Server** をインストールし、起動します。  
管理サーバーは **Directory Server** のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

46 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. **Java ES** インストーラを実行します。
2. コンポーネントの選択で、**Access Manager** と **Web Server** を選択します。  
**Directory Server** と **Directory Preparation Tool** は自動的に選択されます。
3. **Directory Server** の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。
4. 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
5. 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
- a. 「今すぐ設定」オプションでは、インストール時の設定が可能なコンポーネントを示す設定ページが表示されます。リモートに配置するコンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。  
『[Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス](#)』の第 1 章「[設定情報](#)」に示す表から、設定情報を収集する必要があります。
- b. 「あとで設定」オプションでは、設定ページは表示されません。
6. インストールを実行します。
7. インストールサマリーとログを表示します。
8. インストール後の設定を完了します。  
「今すぐ設定」の場合は、次を参照してください。

134 ページの「[「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定](#)」

「あとで設定」の場合は、次を参照してください。

- 156 ページの「Web Server のインストール後の設定」
- 136 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」

9. コンポーネントを起動します。

185 ページの「Web Server の起動と停止」 (Access Manager は自動的に起動する)

10. デフォルトの **Access Manager** ログインページにアクセスします。

`http://webserver-host:port/amserver`

11. 初期ユーザーを確立し、シングルサインオンを設定します。

---

## Web とアプリケーションサービスの例

HADB (高可用性セッションストレージで使用) は、Application Server で動作し、セッションの持続性を含むフェイルオーバー機能を提供します。

---

注 - これらのコンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合、Java ES コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照して、Sun Cluster のガイドラインを確認します。

---

この例では、負荷分散を装備する 2 ノードの HADB クラスタを実装するガイドラインについて説明します。ただし、お勧めするソリューションは、他に何もインストールされていない 4 つのホストに HADB をインストールすることです。管理用 HADB のコピーとロードバランサを装備するドメイン管理サーバー (DAS) と Web Server は、別個のマシンにインストールされます。

パーティション化されたオペレーティングシステムの場合、お勧めするソリューションは、それぞれ少なくとも 1 つの HADB プロセスを実行する 2 つのサーバー (ホストまたはゾーン) をインストールすることです。

## 要件およびシーケンスの問題

Application Server は、Message Queue のローカルコピーが必要です。Application Server が提供する統合管理ツールを利用するために、Application Server と HADB は同じホスト上になければなりません。Application Server のロードバランサプラグイン・サブコンポーネントは Web サーバーが必要です。この例では、コンテナとして Java ES Web Server を使用します。

一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES コンポーネントをインストールします。
2. サーバーを起動します。
3. HADB を設定します。
4. 負荷分散を設定します。

次のガイドラインを使用して、すべてのコンポーネントを1つのノードまたはゾーンにインストールできます。以降のノードには、配備に必要なコンポーネントをインストールします。最小で2つのインストールセッションが必要になります。

## ▼ Web とアプリケーションサービスのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. ハードウェアがクラスタに正しく接続されているかどうか確認します。
  2. **Java ES** インストーラを実行します。
  3. コンポーネントの選択で、**Application Server** と **High Availability Session Store** を選択します。  
Message Queue と Application Server Node Agent および Load Balancing Plugin を除くすべての Application Server のサブコンポーネントは、自動的に選択されません。
  4. **Application Server** コンポーネントを展開し、**Load Balancing Plugin** を選択します。
- 
- 注 - 同じアクセス権を使用して、Web Server と Load Balancing Plug-in をインストールする必要があります。
- 
5. 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
  6. 「今すぐ設定」オプションを選択します。  
Message Queue は、設定が不要です。  
インストール時に設定可能なコンポーネントに対して、設定ページが表示されます。『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「HADB の設定情報」に示す表から、設定情報を収集します。
  7. インストールを実行します。
  8. インストールサマリーとログを表示します。

9. コンポーネントを起動します。
  - 172 ページの「Application Server の起動と停止」 (Message Queue は自動的に起動)
  - 185 ページの「Web Server の起動と停止」
10. HADB のインストール後の設定を完了します。

147 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の HADB の設定」を参照してください。
11. 負荷分散の設定を完了します。

『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 4 章「ロードバランスとフェイルオーバーの設定」を参照してください。

---

## リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例

この例では、Directory Server を使用して別のホストにすでにインストールした Access Manager のコピーを使用して、Portal Server とそれに必要なコンポーネントを 1 つのホストにインストールします。Access Manager と Portal Server は、同じ種類の Web コンテナを使用する必要があります。

---

注 - このシーケンス例を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』の既知の問題 6284663 も参照してください。

---

### 要件

Portal Server は、Access Manager が必要です。Access Manager は、Directory Server のローカルまたはリモートのコピーと、ローカルの Web コンテナが必要です。Access Manager とは別のホストで Portal Server を実行することができます。この場合、Portal Server は Access Manager SDK のローカルコピーとローカルの Web コンテナが必要です。Portal Server と Access Manager SDK をインストールする場合、Access Manager の不要なサブコンポーネントの選択を解除する必要があります。(Portal Server の選択時に、インストーラは、すべての Access Manager のサブコンポーネントを自動的に選択する。)

---

注 – Access Manager を Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともにインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントを1つもインストールしない場合にのみ使用できます。

---

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Access Manager** と **Directory Server** がインストールされ、稼動していることを確認します。

管理サーバーは **Directory Server** のグラフィカルインタフェースを提供するので、管理サーバーも選択することをお勧めします。

80 ページの「アイデンティティ管理の例」

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. **Java ES** インストーラを実行します。
2. コンポーネントの選択で、**Portal Server** を選択します。  
Access Manager のすべてのコンポーネントとともに、**Directory Server** と **Directory Preparation Tool** が自動的に選択されます。  
Web コンテナは選択されません。「Web コンテナの選択」ページが表示され、Web コンテナの選択が求められます。
3. **Directory Server** と、**Access Manager SDK** を除く **Access Manager** のすべてのサブコンポーネントの選択を解除します。  
依存性に関するメッセージに従って、次のとおり実行します。
- a. **Application Server**、**Web Server**、または以前にインストールしたローカルの **Web** コンテナを選択します。
  - b. **Access Manager** のリモートインスタンスを選択します。
4. 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。

5. 「今すぐ設定」オプションを選択します。  
設定ページが表示されます。
6. 「**Access Manager: 管理 (1 / 4)**」ページで、リモートの **Access Manager** に次の値を設定します。
  - 管理者 (amAdmin) パスワード (再入力)
  - LDAP ユーザー (amldapuser) パスワード (再入力)
  - パスワードの暗号鍵
7. 「**Access Manager: Directory Server 情報**」ページで、ホスト **A** の **Directory Server** の情報を指定します。
  - Directory Server 情報
  - ディレクトリマネージャーパスワード
  - サフィックス
8. 「**Access Manager: Sun Java System Access Manager サービスを実行するための Web コンテナ**」で、ホスト **A** 上のリモートの **Access Manager** についての情報を指定します。  
ホスト名は、ホスト **A** の完全修飾名にしてください。
9. 「**Portal Server: webcontainer**」ページで、**Portal Server** が稼動している **Web コンテナ** (および任意の設定パラメータ) を指定します。
10. インストールを実行します。
11. インストールサマリーとログを表示します。
12. 必要なインストール後の設定を完了します。
  - 150 ページの「Sun の Web コンテナ上での「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後のポータルの設定」
  - 150 ページの「サードパーティー製 Web コンテナ上での「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後のポータルの設定」

---

## 非ルートの例

ここでは、次の項で非ルートの例を説明します。

- 87 ページの「非ルートユーザーとして実行するように設定された Access Manager の例」
- 89 ページの「非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Portal Server の例」

その他の非ルートの情報については、161 ページの「ルート以外の ID によるコンポーネントの設定」を参照してください。

---

注 - Linux の場合: これらのシーケンス例を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 リリースノート』の既知の問題 6284698 も参照してください。

---

## 非ルートユーザーとして実行するように設定された Access Manager の例

この例では、ルートが所有しない Web コンテナで実行可能な Access Manager のインストールシーケンスと設定手順について説明します。

### 要件およびシーケンスの問題

インストール計画で、スーパーユーザー ( root ) が所有していない Web Server または Application Server のインスタンスに Access Manager を配備する必要があるときは、Directory Server、Web Server、または Application Server とは異なるインストールセッションで Access Manager をインストールする必要があります。

このインストールシーケンスを作成する一般的な手順は、次のとおりです。

- セッション 1、ホスト A: Directory Server と管理サーバーをインストールします。
- セッション 2、ホスト B: Web Server をインストールします。
- セッション 3、ホスト B: Access Manager をインストールします。

---

注 - Web Server または Application Server のルートが所有するインスタンスに Access Manager をすでに配備している場合、この項の次の手順に進む前に Access Manager のコピーをアンインストールします。

---

### ▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順
1. 「今すぐ設定」オプションを使用して、**Directory Server** と管理サーバーをインストールします。
    - 「共通サーバー設定」ページで、システムユーザーの非ルートユーザーおよびシステムグループの非ルートグループを入力します。
    - **Directory Server** と管理サーバーのポート番号を 1024 を超える値で選択します (389 と 390 は使用しないこと)。
  2. 非ルートユーザーとして、**Directory Server** と管理サーバーを起動します (非ルートユーザーが、すべてのプロセスを所有する必要がある)。

▼ ホスト B の最初のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. 「今すぐ設定」オプションを使用して、**Web Server** をインストールします。
- 「共通サーバー設定」ページで、システムユーザーの非ルートユーザーおよびシステムグループの非ルートグループを入力します。
  - 「Web Server: 管理 (1 / 2)」ページで、管理実行時ユーザー ID を非ルートユーザーに変更します。
  - 「Web Server: デフォルトの Web Server インスタンス」ページで、次のとおり設定します。
    - a. 実行時ユーザー ID を非ルートユーザーに変更します。
    - b. 実行時グループを非ルートグループに変更します。
    - c. 1024 より大きい HTTP ポートの値を選択します。
2. 非ルートユーザーとして、**Web Server** の管理インスタンスと **Web Server** インスタンスを起動します。  
非ルートユーザーが、すべてのプロセスを所有するようにしてください。

▼ ホスト B の 2 番目のセッション用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. 「あとで設定」オプションを使用して、**Access Manager** をインストールします。
2. 次のディレクトリの所有者を **root/other** から **non-root user/non-root group** に変更します。  
次の共有コンポーネントディレクトリは、**Access Manager** の設定プログラムによって Web コンテナのクラスパス内に設定されているため、変更する必要があります。
- Solaris OS の場合: `/opt/SUNWma` および `/etc/opt/SUNWma`
- Linux の場合: `/opt/sun/mobileaccess` および `/etc/opt/sun/mobileaccess`
- ```
chown -R nonroot-user:nonroot-group  
/opt/SUNWma /etc/opt/SUNWma
```
3. **amsamplesilent** ファイルを編集します。
- a. **Access Manager** の **bin** ディレクトリに移動します。
Solaris OS の場合: `cd AccessManager-base /SUNWam/bin`

Linux の場合: `cd AccessManager-base /identity/bin`

- b. **amsamplesilent** ファイルのコピーを作成します。例:

```
cp -p amsamplesilent am.non_root_install
```

- c. **amsamplesilent** ファイルのコピーを編集します。

- BASEDIR を、インストール時に Access Manager のインストールディレクトリ用に選択した値と同じ値に設定します。
- SERVER_HOST、SERVER_PORT、DS_HOST、DS_PORT、ROOT_SUFFIX、WS61_ADMINPORT、および関連するすべてのパスワードフィールド (DS_DIRMGRPASSWD、ADMINPASSWD、AMLDAPUSERPASSWD) を更新します。

4. 編集した **amsamplesilent** ファイルを使用して、**Access Manager** を配備します。

```
./amconfig -s ./am.non_root_install
```

- a. **NEW_OWNER** を非ルートユーザーに設定します。

- b. **NEW_GROUP** を非ルートグループに設定します。

5. 非ルートユーザーとして、**Web Server** 管理インスタンスと **Web Server** インスタンスを停止します。

6. ルートとして、**Web Server** のインストールディレクトリの所有者を変更します。

```
chown -R <non-root-user>:<non-root-group> WebServer-base
```

7. 非ルートユーザーとして、**Web Server** 管理インスタンスと **Web Server** インスタンスを起動します。

8. ブラウザで **Web Server** 管理コンソールにアクセスし、管理ユーザーとしてログインします。

9. **Access Manager** を配備したインスタンスを選択します。

- a. 「**Manage**」をクリックします。

- b. 「**Apply**」をクリックし、「**Apply Changes**」をクリックします。

非ルート所有の Web Server または Application Server インスタンスでの Portal Server の例

この例では、ルートが所有しない Web コンテナで実行可能な Portal Server のインストールシーケンスと設定手順について説明します。

要件

インストール計画で、スーパーユーザー (root) が所有しない Web Server または Application Server のインスタンスに Portal Server の配備が必要な場合、Web Server または Application Server とは別のインストールセッションで Portal Server をインストールする必要があります。



注意 – Portal Server ホストを非ルートユーザーとして実行するように設定して、その後パッチを適用する場合、パッチはルートユーザーとして適用されるため、一部のディレクトリでは所有者がルート所有者にリセットされます。

パッチを適用後、非ルートユーザーとして実行するようにホストを再設定します。

▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 ● **Web** コンテナと **Access Manager** をインストールし、起動します (**Directory Server** の選択を解除する)。

80 ページの「アイデンティティ管理の例」

Portal Server が、リモートホストですでに稼動している Access Manager のコピーを使用する場合は、このタスクを省略します。

▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 手順 1. **Web Server** または **Application Server** の非ルートインスタンスが、**Portal Server** をインストールするホストと同じホストにインストールされ、設定されていることを確認します。

- Web Server の場合は、次のとおり実行します。

Web Server がまだインストールされていない場合、インストーラを使用して Web Server をインストールし、「今すぐ設定」オプションを選択します。実行時ユーザーおよび実行時グループの設定パラメータで、非ルートの所有者を指定します。

57 ページの「Web Server のみをインストールする例」

Web Server がすでにインストールされている場合は、Web Server の管理ユーティリティを使用して、非ルートユーザーが所有する新しい Web Server インスタンスを作成します。

- Application Server の場合は、次のとおり実行します。
Application Server がまだインストールされていない場合は、インストーラを使用して Application Server をインストールします。
[44 ページの「Application Server のみをインストールする例」](#)
Application Server をインストールしたら、Application Server の管理ユーティリティを使用して、非ルートユーザーが所有する新しい Application Server インスタンスを作成します。
2. **Web Server** または **Application Server** の非ルートインスタンスとともに、**Web Server** または **Application Server** の管理インスタンスが稼動していることを確認します。
 3. 「今すぐ設定」オプションを使用して、**Portal Server** をインストールします。
 4. **Portal Server** の設定時に、次のとおり実行します。
 - 「共通サーバー設定」ページに値を指定するときに、システムユーザーとシステムグループのパラメータとして、ルート以外のインスタンス所有者のユーザー情報とグループ情報を入力します。
 - 「Portal Server: Sun Java System Web Server」ページ、または「Portal Server Sun Java System Application Server」ページで値を指定する場合、非ルートインスタンスに関する情報を入力します。
 5. インストールが完了したら、**Portal Server** ディレクトリの所有者を **root** から **Userid: UserGroup** に変更します。
Solaris OS の場合:


```
chown -R Userid:UserGroup /opt/SUNWps
chown -R Userid:UserGroup /etc/opt/SUNWps
chown -R Userid:UserGroup /var/opt/SUNWps
```

 Linux の場合:


```
chown -R Userid:UserGroup /opt/sun/portal
chown -R Userid:UserGroup /etc/opt/sun/portal
chown -R Userid:UserGroup /var/opt/sun/portal
```
 6. **Portal Server** ディレクトリのアクセス権を設定します。
Solaris OS の場合:


```
chmod 0755 /opt/SUNWps
chmod 0755 /etc/opt/SUNWps
chmod 0755 /var/opt/SUNWps
```

 Linux の場合:


```
chmod 0755 /opt/sun/portal
chmod 0755 /etc/opt/sun/portal
chmod 0755 /var/opt/sun/portal
```
 7. **Web Server** または **Application Server** を停止し、その後、起動します。
[172 ページの「Application Server の起動と停止」](#)

185 ページの「Web Server の起動と停止」

第 3 章

グラフィカルインタフェースによるインストール

この章では、対話的なグラフィカルインタフェースを使用して、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 93 ページの「前提条件」
- 94 ページの「グラフィカルモードでのインストーラの実行」
- 106 ページの「コンポーネントの追加」
- 107 ページの「次の手順」

前提条件

この章で説明する手順を開始する前に、インストールの順序を作成し、非互換性についてシステムを調査し、必要な前提条件をすべて満たしておく必要があります。詳細については、33 ページの「インストール前提条件」を参照してください。

注 – Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともに Access Manager をインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントのどれもインストールしない場合にのみ使用できます。

- 「今すぐ設定」の場合は、次を参照してください。「Access Manager: 管理 (1 / 6)」ページで、「旧バージョン (バージョン 6.x スタイル)」を選択します。
「Access Manager: Access Manager コンソールを実行するための Web コンテナ (4 / 6)」ページで、「コンソール配備 URI」を amconsole (デフォルト値) に設定します。
 - 「あとで設定」の場合は、次を参照してください。インストール後に、root として amconfig スクリプトを実行して、Access Manager を設定します。旧バージョン (6.x) インストールタイプを選択するには、設定スクリプト入力ファイル amsamplesilent に次のパラメータを設定します。
 - AM_REALM=disabled
 - CONSOLE_DEPLOY_URI=/amconsole
-

グラフィカルモードでのインストーラの実行

インストール中に問題が発生した場合は、第 9 章のトラブルシューティング情報を参照してください。

▼ インストールを開始するには

- 手順 1. (オプション) ローカルディスプレイへのアクセスを確保します。
- リモートホストにログインしているときには、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースモードで実行されます。
- C Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
setenv DISPLAY myhost:0.0
```
 - Korn Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
DISPLAY=myhost:0.0
```

ローカルディスプレイでインストーラを実行するには、表示権限の付与が必要になる場合があります。たとえば、次のコマンドを使用して、`myhost` から `serverhost` のルートユーザーに表示権限を付与することができます。

```
myhost\> xauth extract - myhost:0.0 | rsh -l root serverhost xauth merge -
```

注 - このような権限を安全に付与する手順については、『Solaris X Window System Developer's Guide』の「Manipulating Access to the Server」の章を参照してください。

2. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。

3. グラフィカルインストールインタフェースを起動します。

`installer` コマンドのオプションの詳細については、[付録 B](#) を参照してください。

- **CD** の場合: インストールセッション中に CD を切り替えられるように、CD 上以外のディレクトリに移動します。例:

```
cd /tmp
```

インストーラへの完全修飾パスを使用し、コマンドを入力してインストーラを起動します。

```
mountpoint/os-arch/installer
```

このコマンドで、`mountpoint` は、CD をマウントした位置です。`os-arch` はプラットフォームを表します。例えば、`Solaris_sparc`、`Solaris_x86`、または `Linux_x86` などです。

- **DVD** の場合: インストール先のプラットフォームと一致する名前の DVD ディレクトリに移動してから、次のコマンドを入力してインストーラを起動します。

```
./installer
```

- **ダウンロードの場合:** ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリに移動してから、次のコマンドを入力してインストーラを起動します。

```
./installer
```

「ようこそ」ページが表示されます。

注 - 途中で「取消し」をクリックすると、インストーラセッションを本当に終了するか確認された後に、インストーラが終了します。

4. 「次へ」をクリックして処理を続けます。

「ソフトウェアライセンス契約」ページが表示されます。

5. ライセンス契約のすべての条項に同意する場合は、「はい、ライセンス契約に同意します」をクリックします。

ライセンス契約のすべての条項に同意しない場合は、「同意しません」を選択します。インストールプロセスが終了します。

「言語サポート」ページが表示されます。

注- インストーラウィンドウが小さすぎてすべてのテキストが表示されない場合は、ウィンドウの隅をドラッグして手でウィンドウのサイズを変更することができます。

▼ 言語とコンポーネントを選択するには

ここで選択した言語用のパッケージは、選択するすべてのコンポーネントにインストールされます。言語を追加するごとにインストールするパッケージが増え、インストールに必要なディスク容量が増えます。英語は必ずインストールされます。

コンポーネントの選択および「コンポーネントの選択」ページについて次の点を知っていると、選択を行う上で役立ちます。

- **Solaris 10:** インストーラを非大域ゾーンで実行する場合、非大域ゾーンにインストールできないコンポーネントは無効になります。
- **Solaris OS の場合:** 互換性のないバージョンの Application Server または Message Queue が検出された場合は、バンドルされているバージョンをインストール中にアップグレードすることを選択できます。データへのリスクがあるとインストーラが判断した場合や、アプリケーションがすでに配備されている場合、処理を続けるかどうかを確認されます。「いいえ」を選択した場合、インストーラを終了し、互換性のないバージョンの Application Server または Message Queue を削除してから、インストールプロセスを再開する必要があります。

注- インストーラによって実行されるこのアップグレードでは、データは移行されません。

- インストーラによってアップグレードすることができない互換性のないコンポーネントが検出された場合、そのコンポーネントを削除するか、または手動でアップグレードする必要があります。アップグレードの手順については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』を参照してください。問題を解決したあとで、「リストを更新」をクリックして「コンポーネントの選択」パネルを再表示します。

- 手順 1. **Java ES** コンポーネントのインストールに使用する言語を「言語サポート」ページで選択します。

2. 「次へ」をクリックして処理を続けます。
「コンポーネントの選択」ページが表示されます。
3. 「コンポーネントの選択」ページには、関連サービスごとにグループ分けされたコンポーネントのリストが表示されます。



- 個別のコンポーネントについての情報を見るには、その項目の上にカーソルを置きます。その項目の説明が、ページ下部のテキストボックスに表示されます。すでにインストールされているコンポーネントの選択は解除 (グレー表示) されます。
 - コンポーネントの互換性状態についての情報を見るには、「詳細」列の省略記号 (...) をクリックします (存在する場合)。
4. インストールするコンポーネントを選択します。
 - すべてのコンポーネントを選択するには、「全て選択」を選択して「次へ」をクリックします。
 - 一部のコンポーネントをインストールするには、コンポーネントを個別に選択します。コンポーネントを選択するたびに、そのコンポーネントが依存するコンポーネントが自動的に選択されます。
 5. 選択可能な場合には、**Web** コンテナを選択します。
Web コンテナ用に使用するコンポーネントが確定していない場合、Application Server と Web Server の両方を選択し、「今すぐ設定」オプションを選択することができます。その後の設定ページで、Web コンテナを選択することができます。

Access Manager と Portal Server は、同じタイプの Web コンテナを使用する必要があります。

6. 選択可能な場合には、サードパーティー製の **Web** コンテナを選択します。
サードパーティー製の Web コンテナを使用する場合、次の手順に従います。
 - a. コンポーネント選択ページで、**Application Server** または **Web Server** を選択しないでください。
「次へ」をクリックすると、「Web コンテナの選択」ページが表示されます。
 - b. 「サードパーティーの **Web** コンテナを使用」を選択します。
 - c. 「了解」をクリックします。
7. 指定可能な場合には、リモート依存性を指定します。
ほかのホストにインストールされたコンポーネントを使うことによって依存性を満たす場合、次の手順に従います。
 - a. コンポーネントの選択を行ったあとで、コンポーネントのリスト全体を展開して調べ、インストーラによって自動的に選択されたコンポーネントを確認します。
 - b. **Directory Server** など、リモートホスト上でアクセスするコンポーネントの選択を解除します。「次へ」をクリックすると、「依存関係の警告」画面が表示されます。
 - c. リモートホストにインストールされたバージョンの使用を選択します。
 - d. 「了解」をクリックします。

▼ 依存性と互換性の問題を解決するには

インストーラは、選択されたコンポーネントの依存性チェックを実行します。問題がある場合、問題を通知して対処を促す 1 つ以上のメッセージがインストーラによって表示されます。

- 手順
1. コンポーネントの依存性の問題を解決して「次へ」をクリックします。次の処理に進めるようになるまで、この手順を繰り返します。
インストーラは次に、すでにインストールされている共有コンポーネントの互換性チェックを行います。互換性のないバージョンのコンポーネントが見つかったら、そのようなコンポーネントをホストから削除するかどうかを確認されます。
 2. 「はい」をクリックすると、インストーラは互換性のない共有コンポーネントを削除します。コンポーネントを手動で削除するには「いいえ」をクリックします。

注 - 「いいえ」を選択する場合、インストールを続ける前にコンポーネントを削除する必要があります。

問題のあるコンポーネントが削除されたあとで、インストーラはすでにインストールされている共有コンポーネントの互換性チェックを行います。共有コンポーネントの互換性のないバージョンが検出された場合は、「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」ページが表示されます。

3. 互換性のないコンポーネントのリストを確認し、リストされている共有コンポーネントをインストーラが自動的にアップグレードしても安全かどうかを判断します。
4. 表示された共有コンポーネントをインストーラが自動的にアップグレードすることを許可するには、「次へ」をクリックします。

このアップグレードは、「インストールの準備が完了しています」ページに進むまでは実行されません。

Solaris OS の場合:互換性のないシステム全体バージョンの J2SE SDK が検出された場合、「J2SE SDK のアップデートが必要です」ページが表示されます。インストーラによるこのチェックは Solaris プラットフォームでのみ行われます。



注意 - JES 以外のアプリケーションについては、ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。必要となる共有コンポーネントのバージョンと、これらの既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを最初に確認する必要があります。

「インストールディレクトリ」ページが表示されます。

▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには

「インストールディレクトリ」ページには、選択したコンポーネントのデフォルトのインストールディレクトリが表示されます。例:



- 手順 1. デフォルトのインストールディレクトリについて、次のことを確認します。
- すべてのデフォルトのディレクトリおよびポートのリストについては、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第3章「デフォルトのインストールディレクトリとポート」を参照してください。
- これから行う配備のディレクトリが正しいことを確認します。
 - デフォルトのディレクトリが適していない場合は、必要に応じて別のパスを参照し、変更します。
2. 「次へ」をクリックしてシステムチェックを開始します。
- インストーラは、指定されたインストールディレクトリに基づいて、ディスク容量、メモリー、オペレーティングシステムのパッチ、オペレーティングシステムのリソースをチェックします。次の表の左側の列には、システムチェックの結果表示されるメッセージを示しています。右の列は、それぞれの結果に対して必要となる対処方法を示しています。

表示されるメッセージ	対処方法
システムはインストールの準備が完了しています	「次へ」をクリックして処理を継続します。

表示されるメッセージ	対処方法
システムはインストールの準備が完了していません メモリーの量が推奨レベルに達していないことを示す警告メッセージを含む場合。	「次へ」をクリックしてインストールを続行しますが、インストール完了後にメモリーを追加します。メモリーを追加しない場合、パフォーマンスに深刻な影響が生じる可能性があります。
システムはインストールの準備ができていません	「レポートの参照」をクリックし、インストーラによって検出された問題に関する情報を参照します。必要なパッチがインストールされていない場合、このレポートにはパッチ番号が報告されます。 インストーラを停止することなく、レポートされた問題を解決できる場合は、問題を解決したあとで「再チェック」をクリックし、システムの再チェックを行います。

Solaris 10: インストーラを非大域ゾーンで実行している場合、メモリー情報を取得できないことを知らせるメッセージが表示されます。

注 – インストールされていないオペレーティングシステム パッチをインストールするには、次の作業を行います。

- a. Sunsolve サイトに移動します: <http://sunsolve.sun.com>。
- b. 「Patch Portal」をクリックします。
- c. 「PatchFinder」テキストボックスにパッチ番号を入力し、「Find Patch」をクリックします。
- d. パッチの zip ファイルをダウンロードします。
- e. zip ファイルを展開します。例: `unzip 112785-44.zip`
- f. パッチファイルのディレクトリが作成されます。
- g. パッチを適用します。例: `patchadd 117885-44`
- h. Java ES インストーラに戻り、「再チェック」をクリックします。すべてのシステム要件が再びチェックされます。

3. システムチェックが完了し、システムの状態に問題がなければ、「次へ」をクリックします。

▼ 設定の種類と共通サーバー設定を指定するには

選択したコンポーネントの中に、インストール時に設定可能なものがある場合、「設定タイプ」ページが表示されます。次の中から設定の種類を選択します。

- **今すぐ設定:**インストール時に設定可能なコンポーネントを設定できます。「今すぐ設定」の作業には、共通サーバー設定や、選択したコンポーネント製品の設定情報の指定が含まれます。

注 – 一部のコンポーネントは、インストール時に設定できません。これらのコンポーネントを選択した場合、インストール後にこれらのコンポーネントの設定が必要なことを知らせる警告が表示されます。

- **あとで設定:**パッケージのインストールに必要な最小限の値だけを入力します。インストーラは、詳細設定を行わずに処理を先に進めます。「あとで設定」オプションを選択する場合、94 ページの「グラフィカルモードでのインストーラの実行」に進みます。

手順 1. 設定の種類を指定します。

「今すぐ設定」設定オプションでのインストールでは、グローバル設定情報を指定するように求められます。パスワードを除いて、デフォルト値が表示されます。パスワードは 8 文字以上で指定する必要があります。

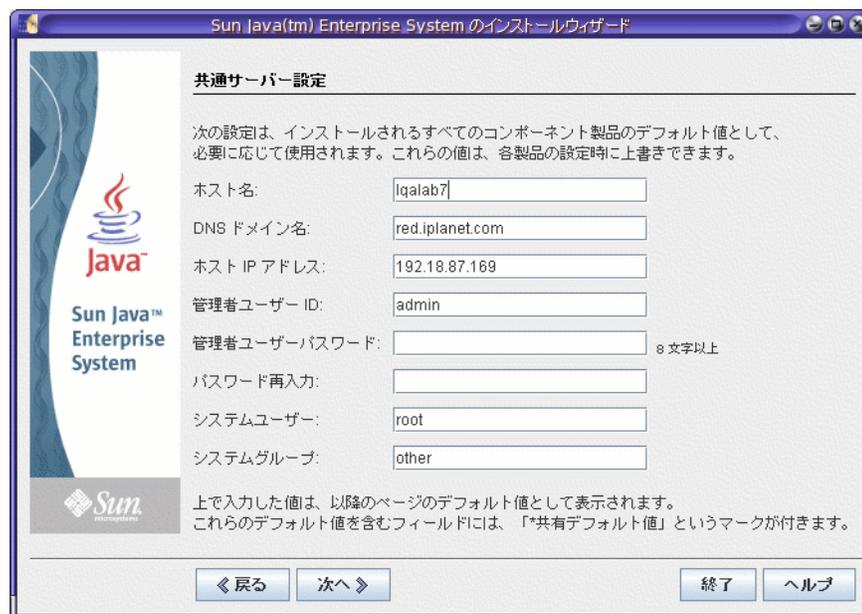
2. 共通サーバー設定を指定します。

ヒント – インストール処理中に、インストーラは設定情報を収集します。インストールが完了したあとで、「インストールサマリー」でこの情報を確認できます。

Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/logs`

Linux の場合: `/var/opt/sun/install/logs`

デフォルト値をそのまま使用するか、または別のデータを使用して、これらのグローバルフィールドに関するインストーラの質問に答えます。ここに入力する値は、以降のコンポーネント設定ページにデフォルト値として表示されます。これらのフィールドの詳細については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「共通サーバー設定」を参照してください。次の画面例は、「共通サーバー設定」ページを示しています。



3. 「次へ」をクリックして処理を続けます。

インストール時に設定可能な各コンポーネントのコンポーネント設定ページが順番に表示されます。

▼ コンポーネントの設定を指定するには

「今すぐ設定」設定オプションでのインストールの場合、インストーラは、選択したコンポーネントのうち、インストール時に設定可能なコンポーネントの設定ページを1つ以上表示します。選択を行う際には、次の情報が役立ちます。

- 各ページの構成値の詳細については、各ページの下部にあるオンラインヘルプボタンをクリックします。
- 各設定ページの設定値の詳細については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第1章「設定情報」を参照してください。
- 設定ワークシートについては、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第2章「設定用ワークシート」を参照してください。

コンポーネント設定ページの一部のフィールドには、「共通サーバー設定」ページに指定したデフォルト値が表示されます。これらの値は編集可能です。たとえば、Directory Server の画面例で、「管理者ユーザー ID」および「管理者パスワード」フィールドには、「共通サーバー設定」ページで設定されたデフォルト値が表示されています。これらのフィールドには「共有デフォルト値」というマークが付けられません。

次の画面例は、Directory Server の最初の設定ページを示しています。

The screenshot shows a window titled "Sun Java(tm) Enterprise System のインストールウィザード". The main content area is titled "Directory Server: 管理 (1 / 5)". On the left, there is a vertical banner with the Java logo and "Sun Java™ Enterprise System" text. The main form contains the following fields:

- 管理者ユーザー ID: (共有デフォルト値)
- 管理者のパスワード: (共有デフォルト値)
- パスワード再入力:
- ディレクトリマネージャ DN:
- ディレクトリマネージャパスワード: (8 文字以上)
- パスワード再入力:

Below the fields, there is a note: "特定の Directory Server 操作は、ディレクトリマネージャと呼ばれる権限のある管理者のみが実行できます。このユーザーのバインド DN は通常 cn=Directory Manager です。"

At the bottom, there are four buttons: "戻る" (Back), "次へ" (Next), "終了" (Finish), and "ヘルプ" (Help).

注 – Sun Cluster ソフトウェア自体はインストール時に設定できませんが、インストール後の設定を簡単にするためにリモートサポートを有効にするオプションがあります。デフォルトは Yes です。

- 手順
1. 表示される各設定ページに、設定に関する情報を指定します。
 2. 「次へ」をクリックして、次のコンポーネントの設定ページに進みます。
 3. 最後の設定ページで「次へ」をクリックすると、インストール時の設定が完了します。
「インストールの準備が完了しています」ページが表示されます。

▼ ソフトウェアをインストールするには

システムにソフトウェアを転送する前に、インストーラは、選択されたコンポーネントの一覧を表示します。ここには共有コンポーネントは表示されませんが、それらはすでに確認されており、必要に応じてインストールされます。

- 手順 1. 表示されたコンポーネントの一覧を確認し、必要な変更を行います。
- a. 特定の「コンポーネントの選択」ページに戻るには、「戻る」ボタンをクリックします。
目的の「コンポーネントの選択」ページが表示されるまで、各ページの「戻る」ボタンをクリックし続けます。
 - b. インストーラの先のページに進むには、「次へ」をクリックします。
すでに入力されている値を再入力する必要はありません。
2. 「インストールの準備が完了しています」ページの情報が適切であることを確認したら、「次へ」をクリックします。
「製品登録」ページが表示されます。
3. ソフトウェアのインストール中に製品を登録する場合は、デフォルトの「インストール中に登録ウィンドウを開きます」オプションを受け入れます。
登録しない場合は、デフォルトオプションの選択を解除します。
4. 「インストール」をクリックして、コンポーネントパッケージのインストールを開始します。

注- 「進行中」ページが表示されているときに「取消し」をクリックすると、インストーラセッションを本当に終了するか確認された後に、インストーラが終了します。

インストールの進行中に「中止」をクリックすると、インストーラはそれまでにインストールされたすべてのコンポーネントをロールバックして、「サマリー」ページを表示します。インストーラセッションを終了するかどうかを確認するように求められます。

インストール中の状態は、次のようになります。

- インストール中に表示される項目は次のとおりです。
- インストールがどこまで完了したか、割合を示す進捗バー。
- インストールしているパッケージの名前。製品登録オプションを受け入れた場合は、登録を行うためのブラウザウィンドウ。

インストールのサイズと複雑さによっては、インストールに長い時間がかかる場合があります。

▼ インストールセッションを終了するには

インストールが完了すると、「インストールが完了しました」ページが表示されます。メモリ不足など、インストールに関する問題はこのページに表示されます。また、このページからインストールサマリーおよびログを参照することができます。

手順 1. 「サマリーの表示」または「ログの表示」ボタンをクリックすると、インストールに関する情報が表示されます。

- インストールサマリー。インストールされた各コンポーネントおよび指定した設定をリストにして表示します。「今すぐ設定」設定オプションを選択した場合、このサマリーファイルにはすべての設定値が記録されます。
- インストールログ。インストーラによるコンポーネントのログメッセージを表示します。

この情報は、インストーラを終了したあとで次の場所から参照できます。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs

Linux の場合: /var/opt/sun/install/logs

Java ES ログの完全なリストについては、[222 ページの「インストールログファイルの検証」](#)を参照してください。

2. インストール後の手順を表示するには、『インストールガイド (UNIX 版)』を自動的に表示するチェックボックスを選択します。
3. 「閉じる」をクリックしてインストーラを終了します。
これでインストールセッションは完了です。インストールされたコンポーネントは、インストール後の作業をすべて完了したあとで開始する必要があります。

コンポーネントの追加

インストーラを再び実行し、追加のコンポーネントをインストールできます。インストーラは、新しくインストールされたコンポーネントを検出し、他のコンポーネントとの依存関係を満たすコンポーネントを使用します。インストールされたコンポーネントは、「コンポーネントの選択」ページで無効になります。

たとえば、今回のインストールで Access Manager とそれに必要なコンポーネントをインストールしたとします。そのあとで、Portal Server をインストールすることになりました。Access Manager に対する Portal Server の依存性を満たすために、Access Manager の既存のインスタンスが使用されます。Access Manager を再インストールするように求められることはありません。

次の手順

インストーラによる Java ES のインストールが完了したら、次の手順に進みます。

- 166 ページの「[インストール後の確認](#)」には、ここで行ったインストール作業が正常に実行されたかを検査する手順が示されています。
- 第 6 章には、インストール後の最終的な設定に関する手順が示されています。インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどのコンポーネントでは追加設定が必要です。

第 4 章

テキストベースのインタフェースによるインストール

この章では、対話的なテキストベースのインタフェースを使用して、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 93 ページの「前提条件」
- 109 ページの「テキストベースのインタフェースの使用法」
- 110 ページの「テキストベースモードでのインストーラの実行」
- 118 ページの「コンポーネントの追加」
- 118 ページの「次の手順」

前提条件

この章で説明する手順を開始する前に、インストールの順序を作成し、非互換性についてシステムを調査し、すべての前提条件を満たしておく必要があります。個別の前提条件については、33 ページの「インストール前提条件」を参照してください。

テキストベースのインタフェースの使用法

インストーラのテキストベースモードでは、グラフィカルインタフェースは表示されず、一連の質問の形式で情報が要求されます。次の表は、インストーラのテキストベースのプロンプトに応答する方法の説明です。

表 4-1 テキストベースインストーラのプロンプトに対する応答

処理	入力
角カッコ ([]) 内に示されているデフォルト値を受け入れる	Return キーを押します。
リストから項目を選択する	項目の番号を入力し、複数の場合はコンマで区切り、Return キーを押します。空白文字は使用できません。たとえば、リスト内の項目 2 を選択するには、2 と入力して Return キーを押します。 項目 1、3、4 を選択するには、1,3,4 と入力して Return キーを押します。
リストに含まれる項目の選択を解除する	項目番号の前にマイナス記号 (-) を入力し、複数の場合はコンマで区切り、Return キーを押します。空白文字は使用できません。たとえば、リスト内の項目 2 の選択を解除するには、-2 を入力して Return キーを押します。 項目 1、3、4 の選択を解除するには、-1,-3,-4 と入力して Return キーを押します。
テキストフィールドに値を指定する	値を入力し、Return キーを押します。
パスワードを指定する	パスワードを入力し、Return キーを押します。 パスワードは端末ウィンドウには表示されません。
前のページに戻る	左向きの不等号 (<) を入力し、Return キーを押します。
セッションを終了する	感嘆符 (!) を入力し、Return キーを押します。

テキストベースモードでのインストーラの実行

インストール中に問題が発生した場合は、第 9 章のトラブルシューティング情報を参照してください。

▼ インストールを開始するには

- 手順
1. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
 2. テキストベースのインストールインタフェースを起動します。

注 - installer コマンドのオプションの詳細については、[付録 B](#) を参照してください。

- **CD** の場合:インストールセッション中に CD を切り替えられるように、CD 上以外のディレクトリに移動します。例:

```
cd /tmp
```

インストーラへの完全修飾パスを使用し、コマンドを入力してインストーラを起動します。

```
mountpoint/os-arch
```

```
/installer -nodisplay
```

このコマンドで、*mount-point* は、CD をマウントした位置であり、*os-arch* はプラットフォームを表します。プラットフォームは *Solaris_sparc*、*Solaris_x86*、または *Linux_x86* のいずれかです。

- **DVD** の場合:インストール先のプラットフォームと一致する名前の DVD ディレクトリに移動し、次のコマンドを入力してインストーラを起動します。

```
./installer -nodisplay
```

- ダウンロードの場合:ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリに移動し、次のコマンドを入力してインストーラを起動します。

```
./installer -nodisplay
```

「ようこそ」情報が表示されます。

3. **Enter** キーを押して、「ソフトウェアライセンス契約」に進みます。
4. **Enter** キーを押して、「ソフトウェアライセンス契約」を表示します。
Enter キーを押し続けて、契約書を最後まで読みます。
5. ライセンス契約のすべての条項に同意する場合は、**yes** と入力して **Enter** キーを押します。「言語サポート」ページが表示されます。
ライセンス契約のすべての条項に同意しない場合は、**Enter** キーを押すことによってデフォルトの **no** を選択します。インストールプロセスが終了します。

▼ 言語とコンポーネントを選択するには

インストーラはまず、すでにインストールされているコンポーネントのバージョンがないかシステムを調べ、検出された場合は、検出されたコンポーネントのリストが「このホストのコンポーネント製品」というタイトルの下に表示されます。

注 - 検出されたコンポーネント製品は選択ページでは選択できませんが、そのバージョンが Java ES の要件またはほかのコンポーネントとの依存要件を満たしていない場合、アップグレードが必要になることがあります。

- 手順
1. 各言語に対応する番号をコンマで区切って入力し、インストールする追加の言語パッケージを指定して **Return** キーを押します。
英語は必ずインストールされます。
 2. インストールするコンポーネントに対応する番号をコンマで区切って入力し、インストールするコンポーネントを指定して **Return** キーを押します。
すでにインストールされているコンポーネントのバージョンが検出されなかった場合、インストーラはコンポーネント選択メインメニューを表示します。

Component Selection - Main Menu

Note: "*" indicates that the selection is disabled

```
[ ] 1. Sun Java(TM) System Calendar Server 6
[ ] 2. Sun Java(TM) System Directory Preparation Tool
[ ] 3. Sun Java(TM) System Web Server 6.1 SP5
[ ] 4. Sun Java(TM) System Messaging Server 6
[ ] 5. Sun Java (TM) System Web Proxy Server 4.0
[ ] 6. Sun Java(TM) System Administration Server 5
[ ] 7. High Availability Session Store (HADB)
[ ] 8. Sun Cluster 3.1U4
[ ] 9. Sun Java(TM) System Access Manager 7
[ ] 10. Sun Java(TM) System Communications Express 6
[ ] 11. Sun Java(TM) System Message Queue 3 Enterprise Edition
[ ] 12. Sun Java(TM) System Application Server Enterprise Edition 8.1
[ ] 13. Sun Java(TM) System Directory Proxy Server 5
[ ] 14. Sun Java(TM) System Portal Server Secure Remote Access
[ ] 15. Sun Java(TM) System Instant Messaging 7
[ ] 16. Sun Java(TM) System Portal Server 6
[ ] 17. Sun Cluster Agents for Sun Java(TM) System
[ ] 18. Sun Java(TM) System Directory Server 5
[ ] 19. Sun Java (TM) System Delegated Administrator
[ ] 20. Service Registry 3.0
```

Enter a comma separated list of products to install [] {"<" goes back, "!" exits):

3. 必要に応じて、表示されるメッセージに従って、選択した各コンポーネントのサブコンポーネントを選択します。

注 - サブコンポーネントがないコンポーネントもあります。そのような製品については、サブコンポーネントの選択メッセージは表示されません。

コンポーネントとそのサブコンポーネントの選択が完了すると、インストーラは依存性チェックを行います。依存性に問題がある場合、問題の種類に応じて「製品の依存関係のチェック」エラーまたは警告が表示されます。一般的な問題には次のものがあります。

- ローカル依存性が満たされていない
この場合、コンポーネント選択に戻り、ローカル依存関係を解決できるように、適切なコンポーネントを選択します。
 - あとで行うインストール後設定の間にリモート依存性が満たされる
リモートインストールを指定するつもりがない場合、コンポーネントの選択に戻り、ローカルで依存性を満たすように適切なコンポーネントを選択します。
 - コンポーネントの以前のバージョンがローカルホストにすでにインストールされている
この場合、報告されたコンポーネントをアップグレードまたは削除し、インストーラに再びチェックを実行させます。以前の Java ES バージョンからコンポーネントをアップグレードする手順については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』を参照してください。
4. 互換性のないバージョンのコンポーネントが見つかったと、そのようなコンポーネントをホストから削除するかどうかを確認されます。互換性のないコンポーネントをインストーラで削除するには、**yes** と入力して **Return** キーを押します。コンポーネントを手動で削除するには、そのまま **Return** キーを押してデフォルトの **no** を選択します。

注 - デフォルトの no を選択する場合、インストールを続ける前にコンポーネントを削除する必要があります。

▼ 依存性と互換性の問題を解決するには

コンポーネントの依存性検査の実行後、インストーラはすでにインストールされている共有コンポーネントの互換性チェックを行います。互換性のないバージョンの共有コンポーネントが検出された場合、インストーラは「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」レポートを表示し、互換性のない共有コンポーネントを示します。

- 手順
1. コンポーネントの依存性の問題をすべて解決して、「次へ」をクリックします。
インストーラは次に、すでにインストールされている共有コンポーネントの互換性チェックを行います。互換性のない共有コンポーネントが検出された場合、インストーラはそれらのコンポーネントのリストを表示します。

2. 互換性のない共有コンポーネントのリストを確認し、リストされている共有コンポーネントをインストーラが自動的にアップグレードしても問題がないかどうか判断してください。

Solaris OS の場合:互換性のないシステム全体バージョンの J2SE SDK が検出された場合、「J2SE SDK のアップデートが必要です」ページが表示されます。Linux プラットフォームには、J2SE SDK のシステム全体の特定インストールが存在しないため、インストーラによるこのチェックは Solaris プラットフォームでのみ行われます。



注意 - JES 以外のアプリケーションについては、ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。必要となる共有コンポーネントのバージョンと、これらの既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを最初に確認する必要があります。

アップグレードについては、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』を参照してください。

3. 表示された共有コンポーネントをインストーラが自動的にアップグレードできるようにするには、**Return** キーを押します。
このアップグレードは、「インストールの準備が完了しています」ページに進むまでは実行されません。

▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには

選択された各コンポーネントについて、デフォルトのインストールディレクトリが表示されます。

- 手順
1. この場所をそのまま使用するか、これから行う配備に応じてデフォルトの場所を変更します。
 2. インストールするものとして選択されたすべてのコンポーネントについて、この手順を繰り返す必要があります。
選択されたコンポーネントのインストールディレクトリの選択が完了すると、インストーラは自動的にシステムチェックを行います。インストーラは、ディスク容量、メモリー、オペレーティングシステムのパッチ、およびオペレーティングシステムリソースをチェックします。
 3. オペレーティングシステムパッチがインストールされていない場合、次の手順に従ってパッチを適用します。

注 – インストールされていないオペレーティングシステムパッチをインストールするには、次の作業を行います。

- a. SunSolve サイトに移動します: <http://sunsolve.sun.com>。
 - b. 「Patch Portal」をクリックします。
 - c. 「PatchFinder」テキストボックスにパッチ番号を入力し、「Find Patch」をクリックします。
 - d. パッチの zip ファイルをダウンロードします。
 - e. zip ファイルを展開します。例: `unzip 112785-44.zip`
 - f. パッチファイルのディレクトリが作成されます。
 - g. パッチを適用します。例: `patchadd 117885-44`
 - h. Java ES インストーラに戻り、「再チェック」をクリックします。すべてのシステム要件が再びチェックされます。
-

▼ 設定の種類を選択するには

- 手順 ● 次のオプションから設定の種類を指定します。
- 今すぐ設定: インストール時に設定可能なコンポーネントを設定できます。「今すぐ設定」の作業には、共通サーバー設定や、選択したコンポーネント製品の設定情報の指定が含まれます。

注 – 一部のコンポーネントは、「今すぐ設定」設定オプションでのインストール時に設定できません。インストール後にこれらのコンポーネントの設定が必要なことを知らせる警告が表示される場合は、「次へ」をクリックして先に進み、第 6 章を参照してください。

- あとで設定: パッケージのインストールに必要な最小限の値だけを入力します。インストーラは、詳細設定を行わずに処理を先に進めます。このオプションを選択する場合、110 ページの「テキストベースモードでのインストーラの実行」に進みます。

▼ 設定データを指定するには

「今すぐ設定」設定オプションでのインストールの場合、インストール時の設定が可能なコンポーネントについて、設定情報の入力を求められます。パスワードを除いて、デフォルト値が表示されます。パスワードは 8 文字以上で指定する必要があります。

ヒント – 設定パネルの操作中に、インストーラは設定情報を収集します。インストーラが完了したあとで、「インストールサマリー」でこの情報を確認できます。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs

Linux の場合: /var/opt/sun/install/logs

手順 1. 共通サーバー設定を指定します。

デフォルト値をそのまま使用するか、または別のデータを使用して、これらのグローバルフィールドに関するインストーラの質問に答えます。『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「共通サーバー設定」を参照してください。

2. コンポーネントの設定を指定します。

デフォルト値を受け入れるか、またはコンポーネントのワークシートで収集した情報を使用して、各コンポーネントに関するインストーラの質問に答えます。各ページの設定値の詳細については、次を参照してください。

- 『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」には、各設定ページの設定値について詳細に説明されています。
- 『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 2 章「設定用ワークシート」には、設定データを収集するときに使用するワークシートがあります。

注 – Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated

Administrator、または Instant Messaging とともに Access Manager をインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用することが必要です。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントのどれもインストールしない場合にのみ使用できます。

- 「今すぐ設定」の場合—一次のように表示され、選択するよう求められます。インストールタイプ [レガシー]。デフォルトの「レガシー (バージョン 6.x スタイル)」を選択します。Access Manager を実行するために Web コンテナが必要とされる場合は、「コンソール配備 URI」を amconsole に設定してください。
- 「あとで設定」の場合—インストール後に、root として amconfig スクリプトを実行して、Access Manager を設定します。レガシー (6.x) インストールタイプを選択するには、設定スクリプト入力ファイル amsamplesilent に次のパラメータを設定します。

- AM_REALM=disabled
 - CONSOLE_DEPLOY_URI=/amconsole
-

3. 選択したコンポーネントおよびサブコンポーネントのリストが表示されます。このリストをよく確認してください。変更する必要がある場合は、変更が必要な質問が

表示されるまで、<を入力して **Return** キーを押します。

ここには共有コンポーネントは表示されませんが、それらはすでに確認されており、必要に応じてインストールされます。

▼ ソフトウェアをインストールするには

- 手順 1. インストールを開始するには、**Return** キーを押してデフォルトの「1」を受け入れます。

インストール処理が開始され、進捗バーにインストールの状況が表示されます。

例:

```
Java Enterprise System
|-1%-----25%-----50%--
```

注-インストールのサイズと複雑さによっては、インストールに長い時間がかかる場合があります。

インストールが正常に完了すると、「インストールが完了しました」というメッセージが表示されます。

2. インストール後のファイルを調べます。

ファイルは、Solaris OS の場合は /var/sadm/install/logs に、Linux の場合は /var/opt/sun/install/logs にあります。

- [1] インストールサマリー。インストールされた各コンポーネントおよび指定した設定をリストにして表示します。「今すぐ設定」設定オプションを選択した場合、このサマリーファイルにはすべての設定値が記録されます。
- [2] インストールログ。インストーラによるコンポーネントのログメッセージを表示します。
- 別のログファイルに、共有コンポーネントのインストールについての情報が記載されます。

Java ES ログの完全なリストについては、[222 ページ](#)の「インストールログファイルの検証」を参照してください。

3. インストーラを終了します。

これでインストーラセッションは完了です。インストールされたコンポーネントは、インストール後の作業をすべて完了したあとで開始する必要があります。[118 ページ](#)の「次の手順」に進みます。

コンポーネントの追加

インストーラを再び実行し、追加のコンポーネントをインストールできます。インストーラは、新しくインストールされたコンポーネントを検出し、他のコンポーネントとの依存関係を満たすコンポーネントを使用します。インストールされたコンポーネントは、「コンポーネントの選択」ページで無効になります。

たとえば、今回のインストールで Access Manager とそれに必要なコンポーネントをインストールしたとします。そのあとで、Portal Server をインストールすることになりました。Access Manager に対する Portal Server の依存性を満たすために、Access Manager の既存のインスタンスが使用されます。Access Manager を再インストールするように求められることはありません。

次の手順

インストーラによる Java ES のインストールが完了したなら、次の手順に進みます。

- 166 ページの「インストール後の確認」には、ここで行ったインストール作業が正常に実行されたかを確認する手順が示されています。
- 第 6 章には、インストール後の最終的な設定に関する手順が示されています。インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどのコンポーネントでは追加設定が必要です。

第 5 章

サイレントモードでのインストール

サイレントインストールは、類似した設定を共有している複数のホストに、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) を対話処理なしでインストールする方法です。この章では、サイレントモードを使用して Java ES ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 119 ページの「前提条件」
- 120 ページの「サイレントインストールの作業手順」
- 121 ページの「状態ファイルの作成」
- 124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」
- 126 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」
- 128 ページの「次の手順」

前提条件

この章で説明する手順を開始する前に、インストールの順序を作成し、非互換性についてシステムを調査し、必要な前提条件をすべて満たしておく必要があります。詳細については、33 ページの「インストール前提条件」を参照してください。

注 – Portal Server、Messaging Server、Calendar Server、Delegated Administrator、または Instant Messaging とともに Access Manager をインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、これらのコンポーネントのどれもインストールしない場合にのみ使用できます。

- グラフィカルインタフェースで [今すぐ設定] の場合: 「Access Manager: 管理 (1 / 6)」 ページで、「旧バージョン (バージョン 6.x スタイル)」を選択します。
「Access Manager: Access Manager コンソールを実行するための Web コンテナ (4 / 6)」 ページで、「コンソール配備 URI」を amconsole (デフォルト値) に設定します。
 - 「あとで設定」の場合は、次を参照してください。インストール後に、root として amconfig スクリプトを使用して、Access Manager を設定します。旧バージョン (6.x) インストールタイプを選択するには、設定スクリプト入力ファイル `amsamplesilent` に次のパラメータを設定します。
 - `AM_REALM=disabled`
 - `CONSOLE_DEPLOY_URI=/amconsole`
-

サイレントインストールの作業手順

サイレントインストールを実行するには、まずダミーのインストールセッションを実行して、実際のサイレントインストール処理がアクセスする状態ファイルを作成します。このダミーの対話セッションの間、インストーラへの応答がキャプチャされ、名前と値のペアの集合として状態ファイルに記録されます。このとき、ソフトウェアはインストールされません。(名前と値の各ペアとは、インストール処理における1つのプロンプトまたはフィールドを表す)。入力として状態ファイルを使用して、多数のホストでインストーラを実行できます。このプロセスにより、企業内の複数のホストに設定を伝達することができます。

サイレントインストールで行う主な作業は、次のとおりです。

1. ホストが33 ページの「インストール前提条件」に説明されているインストール前提条件を満たしていることを確認します。
2. インストーラを実行して、状態ファイルを作成します。
3. 状態ファイルのコピーを作成して、サイレントインストールを実行する各ホスト用にコピーを編集します。
4. ホストごとにサイレントインストールを実行します。

状態ファイルの作成

状態ファイルを作成するには、インストーラを実行する必要があります。インストーラが生成する状態ファイルを使用することで、リアルタイムの依存性チェックとエラーレポートを活用することができます。



注意 - 状態ファイルは手動で作成しないでください。この方法では、インストール時、設定時、またはサーバーの起動時に問題が発生する可能性があります。

状態ファイルの生成

状態ファイルは、ソフトウェアをインストールすることなくインストーラを実行することによって作成されます。インストーラのページを進む過程で、回答がキャプチャされ、状態ファイルが生成されます。インストールが完了すると、指定された場所にある状態ファイルが利用可能になります。状態ファイルは、グラフィカルインタフェースインストーラまたはテキストベースインタフェースインストーラのどちらかを実行することによって生成できます。ソフトウェアがインストールされないように、`-no` オプションを使用します。

グラフィカルインタフェースを使用して状態ファイルを作成するには、次のようになります。

```
./installer -no -saveState statefile_path
```

テキストベースのインタフェースを使用して状態ファイルを作成するには、次のようになります。

```
./installer -no -nodisplay -saveState statefile_path
```

`installer` コマンドのオプションの詳細については、[付録 B](#) を参照してください。生成された状態ファイルの例については、[付録 B](#) を参照してください。

状態ファイルの編集

状態ファイルを作成したら、さまざまなインストール先ホストに対してローカルパラメータが正しく設定されることを保証するために、生成された状態ファイルを編集する必要があります。これらのパラメータには、ホスト名、ドメイン名、IP アドレスなどの設定が含まれます。状態ファイルの作成元と異なるプラットフォームへのインストールを計画している場合、状態ファイルのキーの変更が必要になる場合があります。

この節で説明する内容は、次のとおりです。

- 122 ページの「状態ファイルの編集のガイドライン」
- 122 ページの「ローカルパラメータの編集」
- 124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」

状態ファイルの編集のガイドライン

状態ファイルを編集するときは、ここで示すガイドラインに従ってください。

- 値を編集する以外は、パラメータを変更しないでください。
 - 値が指定されていない場合でも、パラメータを削除しないでください。
 - パラメータを追加しないでください。
 - パラメータの順序を変更しないでください。
- 元のタイプと形式に注意し、新しい値を入力するときはそれに従ってください。
例:
 - 古い値がホスト名の場合、ドメインの完全修飾名ではなく、ホスト名を入力します。
 - 古い値の先頭にスラッシュ (/) が付いている場合、新しい値の先頭にも必ずスラッシュを付けます。
- 削除する値の代わりに、ほかの値を入力します。パラメータが必須の場合、そのパラメータが削除されているとインストールまたは設定に失敗する可能性があります。
- 元の値の大文字/小文字の区別を維持します。

ローカルパラメータの編集

次の表は、インストールするコンポーネントに応じて編集の必要があるパラメータを示しています。また、編集が必要となるパラメータは、ホストの設定によっても異なります。たとえば、状態ファイルを生成したホストが、インストール先のホストと同じドメインに含まれるか、などの条件が影響します。

表 5-1 編集する状態ファイルのパラメータ

コンポーネント	パラメータ名
共通サーバー設定	CMN_HOST_NAME
	CMN_DOMAIN_NAME
	CMN_IPADDRESS
	CMN_ADMIN_USER
	CMN_ADMIN_PASSWORD
	CMN_SYSTEM_USER
	CMN_SYSTEM_GROUP
Access Manager	IS_WS_HOST_NAME
	IS_WS_INSTANCE_DIR (Web Server が Web コンテナの場合)
	CONSOLE_HOST
	IS_SERVER_HOST
	IS_DS_HOST
	IS_DS_HOSTNAME
	COOKIE_DOMAIN_LIST
管理サーバー	ADMINSERV_DOMAIN
	ADMINSERV_CONFIG_DIR_HOST
Application Server	ASNA_ADMIN_HOST_NAME
	ASNA_ADMIN_HOST_NAME
	AS_WEB_SERVER_LOCATION
Directory Server	DS_SERVER_IDENTIFIER
	DS_ADM_DOMAIN
	CONFIG_DIR_HOST (USE_EXISTING_CONFIG_DIR が 1 に設定されている場合)
	USER_DIR_HOST (USE_EXISTING_USER_DIR が 1 に設定されている場合)
Portal Server	PS_LOAD_BALANCER_URL (format //hostname.domainname:port+deploy_uri)
	PS_DEPLOY_INSTANCE

表 5-1 編集する状態ファイルのパラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ名
Portal Server Secure Remote Access	SRA_SERVER_DOMAIN
	SRA_SERVER_HOST
	SRA_GW_HOSTNAME
	SRA_GW_DOMAIN
	SRA_GW_IPADDRESS
	SRA_NLP_HOSTNAME
	SRA_NLP_DOMAIN
	SRA_NLP_IPADDRESS
	SRA_RWP_HOSTNAME
	SRA_RWP_DOMAIN
	SRA_RWP_IPADDRESS
Web Server	WS_ADMIN_HOST
Web Proxy Server	WPS_PROXY_DOMAIN

各パラメータの説明については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 1 章「設定情報」にある表を参照してください。

プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成

状態ファイルは、状態ファイルが生成されたホストとプラットフォームの種類が同じであるホストでのみ実行できます。プラットフォームが異なる場合、状態ファイル ID を手動で編集する必要があります。各種の Java ES プラットフォーム別にタイプの異なる状態ファイル ID が存在します。

状態ファイルを作成し、作成時とは異なるプラットフォーム上で実行する方法には、次の 2 つがあります。

- インストーラを使用する
- プラットフォームに固有の配布ファイルを使用する

▼ インストーラを使用して状態ファイル ID を生成するには

この手順では、サイレントインストールを実行するプラットフォームでインストーラを実行することによって、状態ファイル ID を生成します。

注 - 次のコマンドは、コマンドを実行しているのと同じプラットフォームに対する ID を生成する場合にのみ正しく機能します。

手順 1. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。

2. インストーラが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd installer-directory
```

3. **-id** オプションを指定してインストーラを実行します。

```
./installer -id
```

このコマンドにより、暗号化された ID が生成されます。

4. ID をコピーし、**STATE_BEGIN** パラメータおよび **STATE_DONE** パラメータの値として状態ファイルに貼り付けます。

次に、状態ファイル内の状態ファイル ID の例を示します。

```
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Enterprise System \  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]  
.  
.  
[STATE_DONE Sun Java(tm) Enterprise System \  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
```

▼ プラットフォーム固有の配布ファイルを使用して状態ファイル ID を生成するには

この手順では、プラットフォームに固有の Java ES の配布ファイルを使用して状態ファイル ID を生成します。Java ES の配布用 DVD には、プラットフォーム別のすべての配布ファイルが含まれています。この手順は、1つのプラットフォーム専用のファイルをダウンロードする場合にも有効です。

注 - コマンドを実行しているプラットフォームとは異なるプラットフォームに対する ID を生成する場合にも機能します。

手順 1. `platform/.install` ディレクトリで、次のコマンドを実行します。

```
java -classpath . -D"wizard.idInfo" class
```

コマンドに使用される `platform` と `class` を次の表に示します。

プラットフォーム	<code>platform</code> 変数	<code>class</code> 変数
Solaris 8 SPARC	<code>Solaris_sparc</code>	<code>EntsysInstall_SunOS_sparc_8</code>
Solaris 9 SPARC	<code>Solaris_sparc</code>	<code>EntsysInstall_SunOS_sparc_9</code>
Solaris 10 SPARC	<code>Solaris_sparc</code>	<code>EntsysInstall_SunOS_sparc_10</code>
Solaris 9 x86	<code>Solaris_x86</code>	<code>EntsysInstall_SunOS_x86_9</code>
Solaris 10 x86	<code>Solaris_x86</code>	<code>EntsysInstall_SunOS_x86_10</code>
Linux x86	<code>Linux_x86</code>	<code>EntsysInstall_Linux_x86_generic</code>

このコマンドにより、暗号化された ID が生成されます。

2. ID をコピーし、`STATE_BEGIN` パラメータおよび `STATE_DONE` パラメータの値として状態ファイルに貼り付けます。

次に、状態ファイル内の状態ファイル ID の例を示します。

```
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Enterprise System \  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]  
.  
.  
.  
[STATE_DONE Sun Java(tm) Enterprise System \  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
```

サイレントモードでのインストーラの実行

状態ファイルを生成したホストと同じオペレーティングシステムがインストールされているホストで、インストーラを実行します。この操作を実行できない場合は、[124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」](#)を参照してください。

インストール中に問題が生じる場合は、[第 9 章](#)を参照してください。

▼ サイレントモードでインストーラを実行するには

手順 1. **Java ES** のコンポーネントをインストールするホストで端末ウィンドウを開きます。

2. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。

3. インストールプログラムが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd installer-directory
```

4. 次のオプションを指定してインストーラを起動します。

```
./installer -nodisplay -noconsole -state statefile
```

各オプションの意味は次のとおりです。

<code>-nodisplay</code>	グラフィカル表示を抑制します。
<code>-noconsole</code>	ユーザーインタフェースを抑制し、インストーラをサイレントモードで起動します。
<code>-state</code>	指定された状態ファイルをサイレントインストールの入力として使用します。
<code>statefile</code>	状態ファイルへの絶対または相対パス名を指定します。

インストールしようとしているコンポーネントの数とタイプによっては、時間がかかる場合があります。インストーラの実行中、インストールログの変化に注意することによって、進行状況を監視することができます。

▼ サイレントインストールの進行状況を監視するには

手順 1. 端末ウィンドウで、ログファイルのディレクトリに移動します。

Solaris OS の場合: `cd /var/sadm/install/logs`

Linux の場合: `cd /var/opt/sun/install/logs`

2. 現在のインストールのログファイルを探します。

最初に共有コンポーネントがインストールされ、次にコンポーネント製品がインストールされます。

`timestamp` 変数は、ログの作成時刻を表します。変数の形式は `MMddhhmm` です。各要素の意味は次のとおりです。

<i>MM</i>	月を示す
<i>dd</i>	日付を示す
<i>hh</i>	時間を示す
<i>mm</i>	分を示す

3. **tail** コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。次の形式で実行します。

```
tail -f logfile-name
```

tail プログラムを終了するには、**Ctrl+C** キーを押します。

次の手順

インストーラによる Java ES のインストールが完了したら、次の手順に進みます。

- [166 ページの「インストール後の確認」](#)には、ここで行ったインストール作業が正常に実行されたかを確認する手順が示されています。
- [第 6 章](#)には、インストール後の最終的な設定に関する手順が示されています。インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどのコンポーネントでは追加設定が必要です。

インストール後のコンポーネントの設定

Sun Java™ Enterprise System (Java ES) インストーラによるインストールが完了したあと、ほとんどのコンポーネントで追加の設定を行わないと、Java ES 環境が使える状態になりません。その作業の範囲は、選択した設定の種類(「今すぐ設定」または「あとで設定」設定オプション)や、コンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアを使用して設定するかどうかによって異なります。

インストール時に「あとで設定」設定オプションを選択した場合は、インストーラによって、コンポーネントパッケージファイルがパッケージ別のディレクトリに配置されます。パラメータの設定は行われておらず、実行時サービスを利用できないため、ほとんどのコンポーネントはそのままでは機能しません。「あとで設定」設定オプションを選択した場合のインストールを完了するために、多くのコンポーネントには設定ツールが用意されています。設定ツールを実行するとき、本書および各コンポーネントのマニュアルに記載されている手順に従ってさらに変更を加えることもできます。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 130 ページの「この章の利用方法」
- 130 ページの「MANPATH の設定」
- 132 ページの「Sun Cluster のインストール後の設定」
- 133 ページの「Access Manager のインストール後の設定」
- 137 ページの「管理サーバーのインストール後の設定」
- 138 ページの「Application Server のインストール後の設定」
- 141 ページの「Calendar Server のインストール後の設定」
- 142 ページの「Communications Express のインストール後の設定」
- 143 ページの「Directory Proxy Server のインストール後の設定」
- 145 ページの「Directory Server のインストール後の設定」
- 146 ページの「HADB のインストール後の設定」
- 147 ページの「Instant Messaging のインストール後の設定」
- 148 ページの「Message Queue のインストール後の設定」
- 148 ページの「Messaging Server のインストール後の設定」
- 150 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」
- 154 ページの「Service Registry のインストール後の設定」

- 155 ページの「Web Proxy Server のインストール後の設定」
- 156 ページの「Web Server のインストール後の設定」
- 156 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」
- 160 ページの「Java 仮想マシン (JVM) の設定」
- 161 ページの「ルート以外の ID によるコンポーネントの設定」
- 163 ページの「次の手順」

この章の利用方法

この章の説明に従って作業する前に、Java ES コンポーネントのインストールを完了しておく必要があります。コンポーネントパッケージがインストールされていることは、`pkginfo` コマンドまたは `rpm` コマンドを使用して確認できます。コンポーネントに関連付けられたパッケージの一覧については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」を参照してください。インストールの間に設定された値を記録したサマリーレポートは、次の場所から参照できます。

Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/logs`

Linux の場合: `/var/opt/sun/install/logs`

インストールの完了後、この章に含まれる手順に目を通し、インストールしたコンポーネントを見つけます。コンポーネントの追加設定が必要ないことが判明した場合には、第 7 章の手順に従ってコンポーネントを起動できます。

注 - Java ES コンポーネントのデフォルトのインストール場所は、プラットフォームごとに異なる可能性があります。そのため、この章の説明では、これらの場所を表す変数を使用します。たとえば、*ApplicationServer-base* は、プラットフォームの種類にかかわらず、Application Server のインストール先ディレクトリを表します。

MANPATH の設定

インストール後、Java ES コンポーネントのマニュアルページはデフォルトのディレクトリに配置されています。この場所を `MANPATH` 環境変数に追加する必要があります。

次の表は、Java ES コンポーネントのマニュアルページのデフォルトの場所を示します。一覧中にコンポーネントがない場合、そのコンポーネントにはマニュアルページがありません。

表 6-1 マニュアルページのデフォルトの場所

コンポーネント	マニュアルページの場所
管理サーバー	Solaris OS の場合: /opt/SUNWasmn/man Linux の場合: /opt/sun/man
Application Server	Solaris OS の場合: /opt/SUNWappserver/share/man Linux の場合: /opt/sun/appserver/share/man
Common Agent Container	Solaris OS の場合: /opt/SUNWcacao/man Linux の場合: /opt/sun/man
Directory Server	Solaris OS の場合: /opt/SUNWdsvmn/man Linux の場合: /opt/sun/man
Sun Cluster	Solaris OS の場合: /usr/cluster/man/

▼ MANPATH 変数を更新するには

次の手順例は、C Shell を使用して Application Server のマニュアルページを確実に参照できるようにする方法を示しています。

手順 1. **Java ES** コンポーネントのマニュアルページの場所を、**MANPATH** 環境変数に追加します。

- Solaris OS では、次のコマンド例は現在のセッションを対象に MANPATH 環境変数を設定します。

```
setenv MANPATH {${MANPATH}}:/usr/dt/man:/usr/man:/opt/SUNWappserver/share/man
```

ログインするたびに適用されるようにこの環境変数を設定するには、setenv コマンドの内容を、.login または .cshrc ファイルに追加します。

- Linux では、必要な MANPATH を指定して /etc/man.config ファイルを更新します。たとえば、/etc/man.config ファイルに次の行を追加します。

```
MANPATH /opt/sun/man
```

これで、新しいマニュアルページが、パスに関係なく常に参照できるようになります。

注 - Linux 環境で、各ユーザーのシェル別に MANPATH を設定する場合、Solaris OS の場合の手順を使用します。これにより、ユーザーの個人設定を、/etc/man.config ファイルの設定よりも優先させることができます。

2. マニュアルページにアクセスできることを確認します。

たとえば、次のコマンドによって、Application Server の `asadmin` のマニュアルページが表示されます。

```
man asadmin
```

Sun Cluster のインストール後の設定

Sun Cluster ソフトウェアは、データベース、アプリケーションサーバー、Web サーバーなどのアプリケーションを管理するための高可用性プラットフォームを提供します。Sun Cluster ソフトウェアをインストールまたは設定する前に、クラスタ用として選択したハードウェアとソフトウェアの組み合わせが、現在サポートされている Sun Cluster 構成の 1 つであること確認してください。

Sun Cluster ソフトウェアを使って管理できる Java ES コンポーネントは、次のとおりです。

- 管理サーバー
- Application Server
- Application Server EE (HADB)
- Calendar Server
- Directory Server
- Instant Messaging
- Messaging Server
- Message Queue (インストール後の設定は不要)
- Web Server

インストールした Java ES コンポーネントが環境に組み込まれる予定の場合、コンポーネントを設定する前に Sun Cluster フレームワークをまず設定する必要があります。次に、選択した Java ES コンポーネントを設定します。最後に、インストールしたコンポーネントによっては、Sun Cluster データサービスを設定する必要があることもあります。

フェーズ I. Sun Cluster フレームワーク

Java ES インストーラは、コア Sun Cluster パッケージの単純な `pkgadd` インストールを実行し、`/usr/cluster/bin` ディレクトリを設定します。インストール中には何の設定も行われません。したがって、インストール後の最初の作業は、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』の説明に従ってクラスタフレームワークを設定することです。

このフェーズでは、scinstall ユーティリティーによって Sun Cluster パッケージが検証されます。パッケージが見つからない場合、エラーメッセージが表示されます。このエラーが表示される場合は、正しい Sun Cluster パッケージがインストールされていることを確認する必要があります。『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」を参照してください。

フェーズ II. コンポーネントデータサービス

Sun Cluster フレームワークおよびその他の Java ES コンポーネントのインストールと設定が完了すると、Sun Cluster エージェントソフトウェアを使って Sun Cluster データサービスを設定する準備が整います。

注 - Sun Cluster データサービスを設定するには、関連する Sun Cluster エージェントをインストール中に選択しておく必要があります。Sun Cluster のインストールシーケンスの例については、61 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。

Sun Cluster データサービスの設定に関する指針については、156 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」を参照してください。

Access Manager のインストール後の設定

Java ES インストーラを使って Web Server 上の Access Manager を設定するたびに、次の手順を実行する必要があります。

1. Web Server の管理インスタンスを起動します。
2. Web Server の管理者としてログインします。
3. Access Manager および Portal Server がインストールされている Web Server インスタンスを選択します。
4. 「Manage」をクリックします。
5. 「Apply」をクリックし、「Apply Changes」をクリックします。すると、Access Manager および Portal Server による変更が確定され、Web Server インスタンスが再起動します。

注 - すべての Access Manager インストールについて、Web コンテナを再起動する必要があります。Web Server または Application Server 上で完全インストールを実行している場合、インストーラは Web コンテナインスタンスを停止するので、インスタンスの起動だけが必要です。Access Manager の再起動手順については、170 ページの「Access Manager の起動と停止」を参照してください。

Access Manager の設定については、次の各節で説明します。

- 134 ページの「「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
- 136 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定

Java ES インストーラを実行した直後に Access Manager を起動して Access Manager コンソールにログインすることはできますが、設定の最後の手順を完了するまで、基本的なユーザー管理操作を実行することはできません。これらの手順は、すでにユーザーデータがプロビジョニングされた Directory Server インスタンスを Access Manager が使用するかどうかによって異なります。

次に、次のような状況でどのような処理が必要になるかについて説明します。

- 134 ページの「Directory Server にすでにユーザーデータがプロビジョニングされている場合」
- 134 ページの「Directory Server にまだユーザーデータがプロビジョニングされていない場合」

Directory Server にすでにユーザーデータがプロビジョニングされている場合

Directory Server にすでにユーザーデータがプロビジョニングされている場合は、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 Migration Guide』の「Configuring Access Manager With an Existing Directory Server」を参照し、最後の設定手順に関する説明をお読みください。

Directory Server にまだユーザーデータがプロビジョニングされていない場合

Directory Server にまだユーザーデータがプロビジョニングされていない場合は、次の各節の手順を実行します。

- 135 ページの「Directory Server 参照整合性検査プラグインの有効化」

■ 135 ページの「Directory Server への Access Manager インデックスの追加」



注意 - ここで説明する作業を実行する前に、Directory Server が設定され、動作している必要があります。Directory Server が動作していることを確認する方法については、176 ページの「Directory Server の起動と停止」を参照してください。

Directory Server 参照整合性検査プラグインの有効化

Directory Server 参照整合性検査プラグインが有効になっている場合、削除または名前変更の操作を実行した直後に、指定された属性の整合性が更新されます。これにより、関連するエン트리間の関係がデータベース全体で維持されます。参照整合性検査プラグインがまだ有効になっていない場合には、次の手順を実行します。

▼ 参照整合性検査プラグインを有効にするには

- 手順
1. **Directory Server** コンソールで「設定」をクリックします。
 2. ナビゲーションツリーで「プラグイン」をダブルクリックし、プラグインのリストを展開します。
 3. 「プラグイン」リストで、「**Referential integrity postoperation**」をクリックします。
 4. プロパティの領域で、「プラグインを有効に」ボックスを選択します。
 5. 「保存」をクリックします。
 6. **Directory Server** を再起動してプラグインを有効にします。

Directory Server への Access Manager インデックスの追加

Directory Server インデックスを使用すると、Directory Server データ検索時のパフォーマンスが改善されます。次の表は、Access Manager 用にインデックス作成をお勧めする属性の一覧です (まだインデックスが作成されていない場合)。

表 6-2 Directory Server に対する Access Manager インデックス候補

属性	インデックスの種類
nsroledn	等価、実在、および部分文字列
memberof	等価および実在

表 6-2 Directory Server に対する Access Manager インデックス候補 (続き)

<code>iplanet-am-static-group-dn</code>	等価
<code>iplanet-am-modifiable-by</code>	等価
<code>iplanet-am-user-federation-info-key</code>	等価
<code>sunxmlkeyvalue</code>	等価および部分文字列
<code>o</code>	等価
<code>ou</code>	等価、実在、および部分文字列
<code>sunPreferredDomain</code>	等価、実在、および部分文字列
<code>associatedDomain</code>	等価、実在、および部分文字列
<code>sunOrganizationAlias</code>	等価、実在、および部分文字列

インデックスを追加するには、Directory Server コンソール、`ldapmodify` コマンド行ユーティリティーのいずれかを使用します。Access Manager `index.ldif` ファイルを読み込むには、`ldapmodify` を使用します。このファイルの格納先ディレクトリは、次のとおりです。

- Solaris OS の場合: `/etc/opt/SUNWam/config/ldif`
- Linux の場合: `/etc/opt/sun/identity/config/ldif`

コンソール、`ldapmodify` の両方の詳細については、『Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 Administration Guide』の第 10 章を参照してください。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Access Manager 設定スクリプト `AccessManager-base/bin/amconfig` を使って Access Manager を設定できるようになります。このプログラムの使用手順については、『Sun Java System Access Manager 7 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

サードパーティー製 Web コンテナ (BEA WebLogic または IBM WebSphere Application Server) 向けに Access Manager を設定する手順については、『Sun Java System Access Manager 7 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

注 – すべての Access Manager インストールについて、Web コンテナを再起動する必要があります。Web Server または Application Server 上で完全インストールを実行している場合、インストーラは Web コンテナインスタンスを停止するので、インスタンスの起動だけが必要です。Access Manager の再起動手順については、[170 ページ](#)の「[Access Manager の起動と停止](#)」を参照してください。

管理サーバーのインストール後の設定

管理サーバーの場合、「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。このコンポーネントが Sun Cluster 構成内に含まれる場合には、[132 ページ](#)の「[Sun Cluster のインストール後の設定](#)」を参照してください。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で管理サーバーの設定を開始できるようになります。追加の設定詳細については、『Sun Java System Administration Server 5 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

注 – 管理サーバーを設定する前に、Directory Server の設定を完了しておく必要があります。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に管理サーバーを設定するには

- 手順
1. 設定ユーティリティを起動します。
Solaris OS の場合の例を次に示します。

```
/usr/sbin/mpsadmserver configure
```


各画面に表示される指示に従います。
 2. `server-root /alias` の下にあるファイルへのアクセス権が、インストールされるサーバー以外のすべてのユーザーアカウントによるアクセスが禁止されるように設定されていることを確認します。
 3. 共通サーバー設定と管理サーバー設定の内容を確認します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「管理サーバーの設定情報」に含まれる表を参照してください。

注 – 管理サーバーが **Access Manager** と同じインストールセッション内でインストールされた場合には、そのインストール中に設定の大部分がすでに完了しています。

4. 必要に応じて、**Sun Cluster** ソフトウェアと組み合わせて使用できるように管理サーバーを設定します。

157 ページの「管理サーバーデータサービス」を参照してください。

Application Server のインストール後の設定

Application Server の場合、「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後にインストール後設定を行う必要はありません。ただし、ロードバランス用の Web Server プラグインを適用する場合は除きます。

注 – ロードバランス用に Application Server を設定する方法については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 4 章「ロードバランスとフェイルオーバーの設定」の「Configuring Web Servers for HTTP Load Balancing」の節を参照してください。

必要に応じて、Sun Cluster ソフトウェアと組み合わせて使用できるように Application Server を設定します。132 ページの「Sun Cluster のインストール後の設定」を参照してください。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定するには

- 手順
1. **Application Server** のアクセサリ CD を用意します。
アクセサリの内容は、Sun Download Center (<http://www.sun.com/download/index.jsp>) からダウンロードすることもできます。
 2. CD の **Addon** フォルダ内の **README** ファイルを参照し、そこに記載されている手順に従います。

3. *ApplicationServer-base/samples/common.properties* ファイルを変更します。
common.properties ファイル内の次のプロパティを修正します。不明なパスがある場合は、*ApplicationServer-base/config/asenv.conf* ファイルからコピーすることができます。

Solaris のプロパティ

```
com.sun.aas.pointbaseRoot=/opt/SUNWappserver/appserver/pointbase
```

```
com.sun.aas.webServicesLib=/opt/SUNWappserver/appserver/lib
```

```
com.sun.aas.imqHome=/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/imq
```

```
com.sun.aas.imqBinDir=/usr/bin
```

```
com.sun.aas.imqUserMgr=/usr/bin/imqusermgr
```

```
com.sun.aas.imqLib=/usr/share/lib
```

```
com.sun.aas.installRoot=/opt/SUNWappserver/appserver
```

```
com.sun.aas.javaRoot=/usr/jdk/entsys-j2se
```

```
com.sun.aas.domains.dir=/var/opt/SUNWappserver/domains
```

```
#admin.password=
```

管理パスワードはデフォルトでは保存されません。ユーザーは、パスワードを入力し、それを手動で保存することができます。

```
admin.host=jws-v210-4
```

```
appserver.instance=server
```

```
appserver.instance.port=8080
```

```
admin.user=admin
```

```
admin.port=4849
```

```
pointbase.port=9092
```

```
domain.name=domain1
```

```
server.cert.alias=slas
```

```
keystore=${com.sun.aas.domains.dir}/${domain.name}/config/keystore.jks
```

```
keystore.password=changeit
```

```
trustStore=${com.sun.aas.domains.dir}/${domain.name}/config/cacerts.jks
```

Linux のプロパティ

```
admin.password=admin123
```

Linuxのプロパティ

```
server.cert.alias=slas
keystore=${com.sun.aas.domains.dir}/${domain.name}/config/keystore.jks
domain.name=domain1
com.sun.aas.imqHome=/var/opt/sun/appserver/domains/domain1/imq
com.sun.aas.imqUserMgr=/opt/sun/mq/bin/imqusermgr
com.sun.aas.domains.dir=/var/opt/sun/appserver/domains
admin.user=admin
appserver.instance=server
com.sun.aas.imqBinDir=/opt/sun/mq/bin
trustStore=${com.sun.aas.domains.dir}/${domain.name}/config/cacerts.jks
com.sun.aas.imqLib=/opt/sun/mq/share/lib
keystore.password=changeit
com.sun.aas.pointbaseRoot=/opt/sun/appserver/pointbase
admin.port=4849
pointbase.port=9092
com.sun.aas.webServicesLib=/opt/sun/appserver/lib
admin.host=jws-linuxpc-2
com.sun.aas.javaRoot=/usr/jdk/entsys-j2se
com.sun.aas.installRoot=/opt/sun/appserver
appserver.instance.port=8080
```

4. 必要に応じて、**Sun Cluster** ソフトウェアと組み合わせて使用できるように **Application Server** を設定します。

注 - ロードバランス用に **Application Server** を設定する方法については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第4章「ロードバランスとフェイルオーバーの設定」の「Configuring Web Servers for HTTP Load Balancing」の節を参照してください。

Calendar Server のインストール後の設定

Calendar Server は、Java ES インストーラ (の「今すぐ設定」) を使って設定できません。

「あとで設定」設定オプションでのインストール完了後に、次の手順に従って Calendar Server を設定します。

注 - 別の通信コンポーネントのインストール中に、同じ Directory Server 上で Directory Preparation Tool をすでに実行済みの場合は、手順 1 を省略します。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Calendar Server を設定するには

- 手順
1. **Directory Preparation Tool (comm_dssetup.pl)** を実行することによって、通信サービス (**Calendar Server**、**Messaging Server**、および **Delegated Administrator**) 用に **Directory Server** を設定します。
 - a. **Directory Server** が稼働していることを確認します。176 ページの「**Directory Server** の起動と停止」を参照してください。
 - b. **Directory Server** がインストールされているホスト上で、**Directory Preparation Tool** を実行します。

```
perl comm_dssetup.pl
```
 - c. スクリプトによって要求されたら、以前のバージョンの **Calendar Server**、**Messaging Server**、またはカスタムアプリケーションとの互換性を保持する必要がある場合を除いて、スキーマタイプとして「**Schema 2 Native Mode**」を選択します。
適切な選択を行う方法の詳細については、『Sun Java System Communications Services 6 2005Q4 Schema Migration Guide』を参照してください。
 2. `/etc/hosts` ファイルの 2 番目の列の内容が、単純なホスト名ではなく完全修飾ドメイン名 (**FQDN**) であることを確認します。次に例を示します。

```
192.18.99.999 mycomputer.company.com mycomputer loghost
```

3. **Delegated Administrator** を使って **Calendar Server** のユーザーのプロビジョニングを行う予定である場合、**Delegated Administrator** を設定するための追加手順を実行する必要があります。

このユーティリティーを設定し、ユーザーをプロビジョニングする手順については、『Sun Java System Communications Services 6 2005Q4 Delegated Administrator Guide』を参照してください。



注意 – この手順は、インストールに Access Manager と LDAP Schema2 が含まれ、別の通信コンポーネントの設定時にこの手順を実行しなかった場合にのみ適用されます。

4. **Calendar Server** 設定プログラム
`CalendarServer-base/cal/sbin/csconfigurator.sh` を実行することで **Calendar Server** を設定します。
Calendar Server の設定方法の詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。
5. 必要に応じて、**Sun Cluster** ソフトウェアと組み合わせて使用できるように **Calendar Server** を設定します。
158 ページの「Calendar Server データサービス」を参照してください。

Communications Express のインストール後の設定

Communications Express は、インストール中に (「今すぐ設定」を使って) 設定することはできません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Communications Express を設定できるようになります。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Communications Express を設定するには

注 – 別の通信コンポーネントのインストール中に、同じ Directory Server 上で Directory Preparation Tool をすでに実行済みの場合は、手順 1 を省略します。

- 手順 1. **Directory Preparation Tool (comm_dssetup.pl)** を実行することによって、通信サービス (**Calendar Server**、**Messaging Server**、および **Delegated Administrator**) 用に **Directory Server** を設定します。
141 ページの「[Calendar Server のインストール後の設定](#)」を参照してください。

ヒント - 手順 2 に進む前に、**Communications Express** が依存するコンポーネントがインストールおよび実行されていることを確認してください。詳細については、『[Sun Java System Communications Express 6 2005Q4 Administration Guide](#)』の「[Communications Express の設定の前提条件](#)」を参照してください。

2. 設定プログラム `CommunicationsExpress-base/sbin/config-uw` を使って **Communications Express** を設定します。
手順については、『[Sun Java System Communications Express 6 2005Q4 Administration Guide](#)』の第 2 章「[Installing and Configuring Communications Express](#)」を参照してください。
3. **Communications Express** で必要となる追加のインストール後設定作業を実行します。
『[Sun Java System Communications Express 6 2005Q4 Administration Guide](#)』の第 2 章「[Installing and Configuring Communications Express](#)」を参照してください。

Directory Proxy Server のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、**Directory Proxy Server** の設定作業を実行できるようになります。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Directory Proxy Server を設定するには

- 手順 1. **quickstart.tcl** スクリプトを使用して **Directory Proxy Server** インスタンスを設定します。次に例を示します。

```
# cd /usr/sadm/mps/admin/v5.2/dps
# /usr/sadm/mps/admin/v5.2/bin/tcl8.2/tclsh quickstart.tcl

-cid cid_path -listen
port-number -password
password

-serverroot serverroot_path
-userID dn
```

quickstart.tcl スクリプトの引数は、次のとおりです。

引数	説明
-cid	完全修飾パス。次のディレクトリの存在をスクリプトが確認することを許可します。 <i>cid-path/bin/dps/install/script</i>
-serverroot	インストールおよび設定が完了している管理サーバーへの完全修飾パス。スクリプトは、次のファイルの存在を確認します。 <i>serverroot-path/admin-serv/config/adm.conf</i> <i>serverroot_path/admin-serv/config/jvm12.conf</i>
-listen	Directory Proxy Server ポート。
-userID	管理サーバー管理者の UID。
-password	管理サーバー管理者のパスワード。

2. 共通サーバー設定を確認します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「管理サーバーの設定情報」を参照してください。
3. 共通サーバー設定を **Directory Proxy Server** 用に更新します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「共通サーバー設定」を参照してください。
4. 設定を確認します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Directory Proxy Server 設定情報」を参照してください。

Directory Server のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。ただし、64 ビット Solaris SPARC プラットフォーム上で Directory Server を 32 ビットモードで設定する必要がある場合を除きます。この場合については、次の「あとで設定」手順の手順 6 を参照してください。

注 - Solaris OS にバンドルされている Directory Server は、現在の Java ES の Directory Server コンポーネントと同じバージョンではありません。Directory Server のインストール完了後に、次のコマンドを実行してデフォルトの Directory Server を 5.2 に設定することを検討してください。/usr/sbin/directorysoerver -d 5.2

これで、Java ES の Directory Server 5.2 に対してさまざまな Directory Server コマンドを使用できるようになります。Solaris OS にバンドルされているバージョン (Directory Server 5.1) を使用する予定である場合には、この作業は必要ありません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Directory Server の設定作業を実行できるようになります。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Directory Server を設定するには

- 手順 1. 設定ユーティリティを起動します。次に例を示します。

```
directoryserver -u 5.2 configure
```

各画面に表示される指示に従います。

注 - Linux 上では 2 つのコマンドが利用可能ですが、その一方だけが正しく動作します。必ず /opt/sun/sbin/directoryserver を使用するようしてください。

2. システム設定を更新し、コアファイルの生成を有効にします。

次に例を示します。

```
coreadm -e proc-setid
```

注 - Directory Server がスーパーユーザー以外のユーザーとして実行されるようにインストールした場合、Directory Server がクラッシュ時にコアファイルを生成できない可能性があります。コアファイル用の十分な容量を確保し、クラッシュ時に Directory Server がコアファイルを生成できるように設定することが重要です。

3. (省略可能) Perl で記述された多くのコマンド行スクリプトは、バインドパスワードを対話的に読み取ることができます (**-w** オプション)。この機能を有効にするために、次の手順を実行します。
 - a. **Install the Term::CPAN (<http://cpan.org>)** から個別に入手できる **Term::ReadKey Perl** モジュールをインストールします。
 - b. 各 Perl スクリプトを編集し、適切な行のコメントアウト設定を解除することで、バインドパスワードの対話的な読み取りを有効にします。
Term::ReadKey モジュールがなくても、Perl スクリプトのその他すべての機能は使用可能です。:ReadKey module.
4. 共通サーバー設定を確認し、その設定を必要に応じて更新します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「管理サーバーの設定情報」を参照してください。
5. 必要に応じて、**Sun Cluster** ソフトウェアと組み合わせて使用できるように **Directory Server** を設定します。
[158 ページの「Directory Server データサービス」](#) を参照してください。
6. 必要に応じて、**64 ビット Solaris SPARC** プラットフォーム上で **Directory Server** を **32 ビットモード** で設定します。それには次のようにします。
 - a. **pkgrm** コマンドを使って次の **64 ビット Directory Server** パッケージを削除します。
`SUNWdsvhx SUNWdsvx`
 - b. `/var/sadm/install/productregistry` ファイルを編集し、**SUNWdsvhx** パッケージと **SUNWdsvx** パッケージへの参照を削除します。
 - c. **Directory Server** を設定します。

HADB のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、HADB の設定作業を実行できるようになります。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の HADB の設定

HADB のインストール後設定手順と追加情報については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 高可用性 (HA) 管理ガイド』を参照してください。

必要に応じて、Sun Cluster ソフトウェアと組み合わせて使用できるように HADB を設定します。158 ページの「Application Server EE (HADB) データサービス」を参照してください。

Instant Messaging のインストール後の設定

Instant Messaging は、インストール中に (「今すぐ設定」を使って) 設定することはできません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Instant Messaging の設定作業を実行できるようになります。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Instant Messaging の設定

サーバーをインストールすると、マルチプレクサもインストールおよび有効化されます。ホスト上で 1 つのマルチプレクサのみをサポートしたい場合、そのホスト上にインストールされたサーバーを無効にする必要があります。手順については、『Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

Instant Messaging の設定ユーティリティー *InstantMessaging-base/configure* の使用手順については、『Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q1 Administration Guide』の第 1 章「インストール後の Instant Messaging の設定」を参照してください。

必要に応じて、Sun Cluster ソフトウェアと組み合わせて使用できるように Instant Messaging を設定します。159 ページの「Instant Messaging データサービス」を参照してください。

Message Queue のインストール後の設定

Message Queue の場合、インストール後に追加設定を行う必要はありません。

このコンポーネントが Sun Cluster 構成内に含まれる場合には、132 ページの「[Sun Cluster のインストール後の設定](#)」を参照してください。

よく行われる「省略可能な」作業は、Message Queue が自動的に起動されるように設定することです。それには、スーパーユーザーになり、`imqbrokerd.conf` 設定ファイル (Solaris OS の場合は `/etc/imq` 内、Linux の場合は `/etc/opt/sun/mq` 内) で、次のプロパティを編集します。

- **AUTOSTART:** 起動時にブローカを自動起動するかどうか (YES または NO) を指定します。デフォルト値は NO です。
- **ARGS:** ブローカ起動コマンドに渡すコマンド行オプションと引数を指定します。`imqbrokerd` のコマンド行オプションの一覧と説明については、『Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 管理ガイド』を参照してください。(例: `-name instancename`)
- **RESTART:** 起動されたブローカに異常がある場合に自動再起動するかどうか (YES または NO) を指定します。デフォルト値は YES です。

Message Queue の追加設定については、『Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 管理ガイド』を参照してください。たとえば、デフォルトの管理パスワードを変更することができます。

Messaging Server のインストール後の設定

Messaging Server は、インストール中に (「今すぐ設定」を使って) 設定することはできません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で Messaging Server を設定できるようになります。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Messaging Server を設定するには

注 - 別の通信コンポーネントのインストール中に、同じ Directory Server 上で Directory Preparation Tool をすでに実行済みの場合は、手順 1 を省略します。

- 手順
1. **Directory Preparation Tool (comm_dssetup.pl)** を実行することによって、通信サービス (**Calendar Server**、**Messaging Server**、および **Delegated Administrator**) 用に **Directory Server** を設定します。
141 ページの「**Calendar Server のインストール後の設定**」を参照してください。
 2. `/etc/hosts` ファイルの 2 番目の列の内容が、単純なホスト名ではなく完全修飾ドメイン名 (**FQDN**) であることを確認します。次に例を示します。
`192.18.99.999 mycomputer.company.com mycomputer loghost`
 3. **Messaging Server** の初期実行時設定プログラム `MessagingServer-base/sbin/configure` を実行することで、**Messaging Server** を設定します。
Messaging Server の設定方法については、『Sun Java System Messaging Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。
 4. **Delegated Administrator** を使って **Messaging Server** のユーザーのプロビジョニングを行う予定である場合、それを設定するための追加手順を実行する必要があります。
Delegated Administrator を設定し、ユーザーをプロビジョニングする手順については、『Sun Java System Communications Services 6 2005Q4 Delegated Administrator Guide』を参照してください。



注意 - この手順は、インストールに **Access Manager** と **LDAP Schema2** が含まれ、別の通信コンポーネントの設定時にこの手順を実行しなかった場合にのみ適用されます。

5. 必要に応じて、**Sun Cluster** ソフトウェアで使用するよう設定します。159 ページの「**Messaging Server データサービス**」を参照してください。

Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定

「今すぐ設定」または「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で Portal Server の設定作業を実行できるようになります。

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の設定

Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の最後の設定手順は、それらが Sun の Web コンテナにインストールされるのか、それともサードパーティー製の Web コンテナにインストールされるのかによって異なります。以降の各節で、詳細を説明します。

- 150 ページの「Sun の Web コンテナ上での「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後のポータル設定」
- 150 ページの「サードパーティー製 Web コンテナ上での「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後のポータル設定」

Sun の Web コンテナ上での「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後のポータル設定

Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の Web コンテナとして Application Server または Web Server を使用している場合、インスタンスに変更を適用する必要があります。『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 管理ガイド』および『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 Release Notes』の手順に従ってください。

サードパーティー製 Web コンテナ上での「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後のポータル設定

Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の Web コンテナとして BEA WebLogic Server または IBM WebSphere Application Server を使用している場合は、次の手順を実行します。

▼ サードパーティー製 Web コンテナ上のポータルを設定するには

注 - サードパーティー製 Web コンテナへの Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の配備は、Solaris OS 上でのみサポートされています。

- 手順
1. 管理インスタンスも含め、すべての **Web** コンテナインスタンスを停止し、**BEA WebLogic Server** では管理対象のサーバーインスタンスも停止します。
 2. **Web** コンテナの管理サーバーインスタンスを起動します。**BEA WebLogic Server** の管理対象インスタンスにインストールした場合は、管理対象インスタンスも起動します。
 3. 配備コマンドを実行して **Portal Server** および **Portal Server Secure Remote Access** を配備します。

```
cd PortalServer-base /bin ./deploy
```

プロンプトが表示されたら、配備 URI のデフォルト値とサーバーインスタンス名を選択し、Web コンテナの管理パスワードを入力します。
 4. サンプルポートレット (**portletsamples.war** ファイル) を配備します。

```
setenv DEPLOY_ADMIN_PASSWORD webcontainer-admin-password
```

```
setenv IDSAME_ADMIN_PASSWORD AccessManager-admin-password
```

```
cd PortalServer-base/lib
```

```
./postinstall_PortletSamples
```

プロンプトが表示されたら、Web コンテナの管理パスワードと Access Manager の管理パスワードを入力します。
 5. **Portal Server** および **Portal Server Secure Remote Access** を配備した **Web** コンテナインスタンスを再起動します。

Web コンテナインスタンスの起動方法については、Web コンテナのドキュメントを参照してください。追加情報については、『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 管理ガイド』および『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 Release Notes』を参照してください。

注 - BEA WebLogic Server の管理対象サーバーへのインストールでは、WAR ファイルは配備されません。BEA WebLogic Server の管理コンソールから WAR ファイルを配備してください。

「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の設定

Portal Server の最後の設定手順は、それらが Sun の Web コンテナにインストールされるのか、それともサードパーティー製の Web コンテナにインストールされるのかによって異なります。以降の各節で、詳細を説明します。

- 152 ページの「Sun の Web コンテナ上での「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」
- 152 ページの「サードパーティー製 Web コンテナ上での「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定」

注 – Portal Server Secure Remote Access の設定方法については、『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 Secure Remote Access 管理ガイド』を参照してください。

Sun の Web コンテナ上での「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定

Portal Server に付属する共通の設定プログラムを使用すれば、Portal Server のすべてのサブコンポーネントおよび Portal Server Secure Remote Access を設定できます。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server または Web Server 上の Portal Server を設定するには

- 手順
1. **Portal Server** 設定プログラム `PortalServer-base/lib/psconfig` を実行することによって、**Portal Server** の実行時設定を作成します。
設定プログラムの実行手順や設定プログラムが使用する設定の説明については、『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 管理ガイド』を参照してください。
 2. インスタンスに変更を適用します。
『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 管理ガイド』の「インストール後の設定」の章の「インストール後の作業」の節に含まれる手順に従ってください。

サードパーティー製 Web コンテナ上での「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Portal Server の設定

Portal Server に付属する共通の設定プログラムを使用すれば、Portal Server のすべてのサブコンポーネントおよび Portal Server Secure Remote Access を設定できます。

注 - サードパーティ製 Web コンテナへの Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の配備は、Solaris OS 上でのみサポートされています。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に BEA WebLogic Server または Web Sphere Application Server 上の Portal Server を設定するには

- 手順
1. **Portal Server** 設定プログラム *PortalServer-base/lib/psconfig* を実行することによって、**Portal Server** の実行時設定を作成します。
設定プログラムの実行手順や設定プログラムが使用する設定の説明については、『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 管理ガイド』の「インストール後の設定」の章を参照してください。
 2. 管理インスタンスも含め、すべての **Web** コンテナインスタンスを停止し、**BEA WebLogic Server** では管理対象のサーバーインスタンスも停止します。
 3. **Web** コンテナの管理サーバーインスタンスを起動します。**BEA WebLogic Server** の管理対象インスタンスにインストールした場合は、管理対象インスタンスも起動します。
 4. 配備コマンドを実行して **Portal Server** を配備します。

```
cd PortalServer-base/bin ./deploy
```

プロンプトが表示されたら、配備 URI のデフォルト値とサーバーインスタンス名を選択し、Web コンテナの管理パスワードを入力します。
 5. サンプルポートレット (**portletsamples.war** ファイル) を配備します。

```
setenv DEPLOY_ADMIN_PASSWORD web-container-admin-password
```

```
setenv IDSAME_ADMIN_PASSWORD AccessManager-admin-password
```

```
cd PortalServer-base/lib ./postinstall_PortletSamples
```

プロンプトが表示されたら、Web コンテナの管理パスワードと Access Manager の管理パスワードを入力します。
 6. **Portal Server** を配備した **Web** コンテナインスタンスを再起動します。**Web** コンテナインスタンスの起動方法については、**Web** コンテナのドキュメントを参照してください。

注 - BEA WebLogic Server の管理対象サーバーへのインストールでは、WAR ファイルは配備されません。BEA WebLogic Server の管理コンソールから WAR ファイルを配備してください。

Service Registry のインストール後の設定

Service Registry は、インストール中に (「今すぐ設定」を使って) 設定することはできません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で Service Registry の設定作業を実行できるようになります。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後にデフォルトのプロパティを使って Service Registry を設定するには

手順 1. `ServiceRegistry-base/install` ディレクトリに移動します。次に例を示します。

Solaris OS の場合:

```
cd /opt/SUNWsoar/install
```

Linux の場合:

```
cd /opt/sun/SUNWsoar/install
```

2. `JAVA_HOME` 環境変数が設定されていることを確認します。

通常の場合は `/usr/jdk/entsys-j2se` です。

3. 次のコマンドを実行して設定します。

- Solaris OS の場合: `/usr/sfw/bin/ant -f ./build-install.xml install`
- Linux の場合: `/opt/sun/bin/ant --noconfig -f ./build-install.xml install`

注 - カスタムプロパティ設定を使って設定を実行するには、install ターゲットを実行する前に build-install.xml ファイルを編集します。手順については、『Service Registry 3 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

Web Proxy Server のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で Web Proxy Server を設定できるようになります。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Web Proxy Server を設定するには

- 手順 1. 設定を含むプロパティファイルを作成します。

次に wps.properties の例を示します。

```
WPS_JDK_HOME=/usr/jdk/entsys-j2se/jre WPS_SERVER_ROOT=
/opt/SUNWproxy WPS_ADMIN_NAME=admin WPS_ADMIN_PWD=admin123
WPS_ADMIN_PORT=8889 WPS_START_ON_BOOT=N WPS_ADMIN_SERVER_
USER=root WPS_SERVER_NAME=jws-v60x-4.red.ipplanet.com WPS_SERVER_
PORT=8081 WPS_SERVER_ID=proxy-server1 WPS_ADMIN_SERVER_
ID=proxy-admserv WPS_SERVER_USER=root
```

2. ファイルを作成し終わったら、次のコマンドを実行します。

```
WebProxyServer-base//bin/proxy/bin/configureServer -l logfile -f \  
path /wps.properties
```

Web Server のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で Web Server を設定できるようになります。

このコンポーネントが Sun Cluster 構成内に含まれる場合には、132 ページの「Sun Cluster のインストール後の設定」を参照してください。

▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Web Server を設定するには

- 手順
1. **Web Server** 設定プログラム `WebServer-base/setup/configure` を実行することによって、**Web Server** の実行時設定を作成します。
 2. 共通サーバー設定を確認し、その設定を必要に応じて更新します。
『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「Web Server の設定情報」の表内で説明されている『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の「管理サーバーの設定情報」を参照してください。
 3. 必要に応じて、**Sun Cluster** ソフトウェアと組み合わせて使用できるように設定します。
159 ページの「Web Server データサービス」を参照してください。

Sun Cluster データサービスの設定

クラスタの確立およびコンポーネントの設定が完了すると、各種の Java ES コンポーネント用に Sun Cluster データサービスを設定できるようになります。インストールされる Sun Cluster エージェントは、アプリケーションがクラスタを利用できるようにするソフトウェアプログラムです。エージェントソフトウェアおよび追加の設定ファイルは、(Web Server や Oracle データベースなどの) アプリケーションを、単一のサーバー上ではなくクラスタ上で実行できるようにするデータサービスを構成します。データサービスは、Sun Cluster フレームワークソフトウェアおよびマルチホストディスクと組み合わせることによって、アプリケーションの高可用性とスケラビリティを実現します。

注 - Access Manager および Portal Server は、高可用性の Web コンテナ内に配備できません。ただし、Web コンテナに配備されるその他の Web アプリケーションと同様に、それらに障害が発生する可能性があります。その場合、Web コンテナのフェイルオーバーは行われません。

データサービスの詳細については、『Sun Cluster Overview for Solaris OS』を参照してください。

以降の各節では、エージェントがインストーラの Sun Cluster エージェントコンポーネントで提供される Java ES コンポーネントについて説明します。それぞれのコンポーネントについて、必要なドキュメントを含め、高可用性サービスおよびインストールプロセスの概要を示します。ドキュメントで参照されているすべてのデータサービスインストール手順を、Java ES Sun Cluster Agents 3.1 8.05 アクセサリ CD-ROM の内容で置き換えてください。

注 - データサービスおよびサポートされるすべての層 (ボリュームマネージャー、クラスタファイルシステム、リソースグループ情報) が完全に設定されるまでは、Java ES への Sun Cluster のインストールは完了しません。

管理サーバーデータサービス

フェイルオーバー用に管理サーバーを設定することができます。管理サーバーデータサービスをインストールおよび設定する方法については、『Sun Cluster Data Services Planning and Administration Guide for Solaris OS』を参照してください。

必要なパッケージをインストールするには、各ノード上で Java ES インストーラを実行し、管理サーバーと、Sun Java System 用 Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA Sun Java System Directory Server サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。

設定時は、クラスタファイルシステム上の場所をサーバールートとして使用します。

Application Server データサービス

フェイルオーバー用に Application Server を設定することができます。インストールと設定については、『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Application Server EE (HADB) Guide for Solaris OS』の第 1 章「Sun Cluster HA for Sun Java System Application Server EE (Supporting HADB Versions as of 4.4)」を参照してください。

必要なパッケージをインストールするには、各ノード上で Java ES インストーラを実行し、Application Server と、Sun Java System 用 Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA Sun Java System Application Server(PE/SE) サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。

インストールディレクトリを指定するときは、Application Server に対しては、そのノードのローカルファイルシステム上の場所を使用し、AS の設定および製品の場所に対しては、クラスタファイルシステム上の場所を使用します。

Application Server EE (HADB) データサービス

Application Server HADB は、複数ノード用に設定できます。インストールと設定については、『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Application Server EE (HADB) Guide for Solaris OS』を参照してください。

必要なパッケージをインストールするには、各ノード上で Java ES インストーラを実行し、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA Sun Java System HADB サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。データベース作成時に、設定ファイルとデータファイルがデフォルトで各クラスタノードのローカルファイルシステム上に作成されます。静的なファイルやデータは、各クラスタノードのローカルファイルシステム上に格納してください。

Calendar Server データサービス

フェールオーバー用に Calendar Server を設定することができます。インストールと設定については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4 Administration Guide』の第7章「Configuring for High Availability (Failover Service)」を参照してください。

必要なパッケージをインストールする方法は、次のとおりです。

- プライマリノード上で Java ES インストーラを実行し、Calendar Server と、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA Sun Java System Calendar Server サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。インストールディレクトリを指定するときは、Calendar Server のクラスタファイルシステム上の場所(サーバールート)を使用します。
- セカンダリノード上で Java ES インストーラを実行し、「あとで設定」オプションを選択して HA Sun Java System Calendar Server をインストールします。

Directory Server データサービス

フェールオーバー用に Directory Server を設定することができます。必要なパッケージをインストールするには、各ノード上で Java ES インストーラを実行し、Directory Server と、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA Sun Java System Directory Server サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。

インストールディレクトリを指定するときは、Directory Server のクラスタファイルシステム上の場所(サーバールート)を使用します。

Instant Messaging データサービス

フェールオーバー用に Instant Messaging を設定することができます。Instant Messaging の高可用性の設定手順については、『Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

Message Queue データサービス

フェールオーバー用に Message Queue を設定することができます。インストールと設定については、『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Message Queue Guide for Solaris OS』を参照してください。

必要なパッケージをインストールするには、各ノード上で Java ES インストーラを実行し、Message Queue と、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA Sun Java System Message Queue サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。

設定時に、スタティックファイルとデータの場所として各ノードのローカルファイルシステム上の場所を使用し、ダイナミックデータの場所としてクラスタファイルシステム上の場所を使用します。

Messaging Server データサービス

フェールオーバー用に Messaging Server を設定することができます。インストールと設定については、『Sun Java System Messaging Server 6 2005Q4 Administration Guide』の第3章「Configuring High Availability」を参照してください。

必要なパッケージをインストールするには、各ノード上で Java ES インストーラを実行し、Messaging Server と、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA Sun Java System Messaging Server サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。

インストールディレクトリを指定するときは、Messaging Server のクラスタファイルシステム上の場所 (サーバールート) を使用します。設定時に、設定とデータをクラスタファイルシステムに配置します。

Web Server データサービス

フェールオーバーまたはスケーラビリティのために Web Server を設定することができます。以降の各節では、各オプションに関連する情報を示します。

フェールオーバーのための Web Server データサービス

インストールと設定については、『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Web Server Guide for Solaris OS』を参照してください。

必要なパッケージをインストールする方法は、次のとおりです。

- プライマリノード上で Java ES インストーラを実行し、Web Server と、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA/Scalable Sun Java System Web Server サブコンポーネントをインストールします。
- 各セカンダリノード上で Java ES インストーラを実行し、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA/Scalable Sun Java System Web Server サブコンポーネントをインストールします。

スケラビリティのための Web Server データサービス

インストールと設定については、『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Web Server Guide for Solaris OS』を参照してください。

必要なパッケージをインストールするには、各ノード上で Java ES インストーラを実行し、Web Server と、Sun Cluster エージェントコンポーネントの HA/Scalable Sun Java System Web Server サブコンポーネントをインストールします。「あとで設定」オプションを選択します。

その他の製品用のデータサービス

インストール計画において、その他の製品の高可用性を必要とする場合は、その製品をサポートするエージェントを入手し、適切な Sun Cluster データサービスのマニュアルの説明に従ってインストールおよび設定を行います。その他の製品用のエージェントは、Java ES アクセサリ CD から入手できます。

- Solaris SPARC プラットフォーム用のデータサービスのマニュアルは、次の場所から入手できます。<http://docs.sun.com/coll/1124.4>
- Solaris x86 プラットフォーム用のデータサービスのマニュアルは、次の場所から入手できます。<http://docs.sun.com/coll/1125.4>

Java 仮想マシン (JVM) の設定

使用する Java ES コンポーネントに必要なインストール後設定が完了したあとで、コンポーネントによっては、Java 仮想マシン (JVM) の調整が必要になる場合があります。JVM はいくつかのエンティティから構成されていますが、その中でもっとも重要なのは、コンパイラです。コンパイラは Java バイトコードをマシン命令に変換します。この Java ES リリースに付属するバージョンの JDK (Java Developer's Kit) には、JVM に対して適用可能なオプションがいくつか用意されています。重要なオプションとして `-server` オプションがあります。(オプションの一覧を取得するには `java -? コマンド` を使用する。) `-server` オプションは、JVM をサーバーモードで実行するための便利な調整オプションです。

ガベージコレクションについては、初期段階ではデフォルトのアルゴリズムで問題ありません。

Java ヒープメモリーも、設定しなければならない可能性のある重要な調整オプションの 1 つです。次に例を示します。

- 次のコマンドは、Java ヒープサイズの初期値を設定します: `-Xms size`
- 次のコマンドは、Java ヒープサイズの最大値を設定します: `-Xmx size`

高負荷システムの場合、まずはヒープサイズの最大値を 1.2G バイトに設定してみることをお勧めします。

ルート以外の ID によるコンポーネントの設定

インストール後に設定を行うとき、一部のコンポーネント製品にはルート以外の実行時ユーザーまたはグループを割り当てることができます。たとえば、ルートの所有でない Web Server インスタンス内に Access Manager を配備する可能性もあります。

インストール目的から管理目的に至るまで、ルート以外の ID でコンポーネントを設定する理由はさまざまです。ルート以外の ID の使用例については、86 ページの「非ルートの例」を参照してください。

以降の各節では、ルート以外の ID を使用できるコンポーネントを設定する方法を示します。

注 - Java ES インストーラを実行するには、ルートである必要があります。この理由により、インストーラによってマシンに配置されるすべてのファイルはルートの所有となります。

ルート以外の ID による管理サーバーの設定

ルート以外の ID を使用して管理サーバーを設定するには、`mpsadmserver configure` コマンドを使用します。詳細については、『Sun Java System Administration Server 5 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

- ルート以外のユーザーとして管理サーバーを実行している場合は、管理サーバーとそれに依存する製品の両方に対して、同じユーザー ID およびグループ ID を使用することを検討してください。
- Directory Server がすでにインストールされている場合、管理サーバーは自動的に、Directory Server に適用されているのと同じユーザー ID とグループ ID によって所有されます。

ルート以外の ID による Application Server の設定

ルート以外の ID を使って Application Server を設定するには、特定のルート以外のユーザーによって管理ドメイン全体が所有および運用されるようにします。

1. ルート以外のユーザー ID を使ってホストにログインします。
2. `--domainidir` オプションを指定して `asadmin create-domain` コマンドを実行します。このオプションには書き込み権限のあるディレクトリを指定します。次に例を示します。

```
/opt/SUNWappserver/appserver/bin ./asadmin create-domain
--domainidir /export/domains --adminport 5050 --adminuser admin
--passwordfile /tmp/passwordfile --instanceport 9090 domain2
```

この例では、`domain2` のディレクトリは `/export/domains` の下に作成されます。

3. `--domainidir` オプションを再度指定してこのドメインを起動します。次に例を示します。

```
/opt/SUNWappserver/appserver/bin ./asadmin start-domain
--domainidir /export/domains --user admin --passwordfile
/tmp/passwordfile domain2
```

詳細については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Administration Guide』を参照してください。

ルート以外の ID による Calendar Server の設定

ルート以外の ID を使って Calendar Server を設定するには、Calendar Server 設定プログラムを使用します。詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

ルート以外の ID による Directory Proxy Server の設定

ルート以外の ID を使用して Directory Proxy Server を設定するには、スーパーユーザーになって `quickstart.tcl` スクリプトを実行します。このスクリプトは管理サーバーに対して指定されたユーザー ID を採用します。したがって、管理サーバーがルート以外のユーザー ID を使用していれば、Directory Proxy Server もその ID を使用します。

ルート以外の ID による Directory Server の設定

ルート以外の ID を使って Directory Server を設定するには、Directory Server 設定プログラムを使用します。「あとで設定」オプションを使って Directory Server パッケージをインストールします。インストーラの実行後、デフォルトの Directory Server バージョンを 5.2 に設定します。Directory Server 設定プログラムを実行し、ルート以外のユーザー ID を指定します。1024 よりも大きいポート番号を選択します。

ルート以外の ID による Messaging Server の設定

ルート以外の ID を使って Messaging Server を設定するには、Messaging Server 設定プログラムを使用します。詳細については、『Sun Java System Messaging Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

ルート以外の ID による Portal Server の設定

ルート以外の ID を使って Portal Server を設定するには、Portal Server 設定プログラムを使用します。設定プログラムの実行手順や使用する設定の説明については、『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 管理ガイド』の「インストール後の設定」の章を参照してください。

ルート以外の ID による Web Server の設定

ルート以外の ID を使って Web Server を設定するには、Web Server 設定プログラムを使用します。156 ページの「Web Server のインストール後の設定」を参照してください。

次の手順

この章で説明した設定作業が完了したら、インストール後設定を確認するために、168 ページの「インストール後設定後の確認」の説明に従ってコンポーネントを起動します。

第 7 章

インストール済みコンポーネントの確認

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) コンポーネントが正常にインストールおよび設定されたことを確認するための手順について説明します。ここで説明する手順は、シングルサインオンなどの機能の設定後に発生する可能性のある、コンポーネント間のより複雑な対話には対応していません。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 166 ページの「インストール後の確認」
- 168 ページの「インストール後設定後の確認」
- 170 ページの「Access Manager の起動と停止」
- 170 ページの「管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止」
- 172 ページの「Application Server の起動と停止」
- 174 ページの「Calendar Server の起動と停止」
- 175 ページの「Communications Express の起動と停止」
- 175 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
- 176 ページの「Directory Server の起動と停止」
- 177 ページの「Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動と停止」
- 179 ページの「Message Queue の起動」
- 179 ページの「Messaging Server の起動と停止」
- 181 ページの「Web コンテナの起動と Portal Server デスクトップへのアクセス」
- 182 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
- 183 ページの「Service Registry の起動と停止」
- 185 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動」
- 185 ページの「Web Server の起動と停止」
- 186 ページの「Web Proxy Server の起動と停止」
- 187 ページの「次の手順」

Java ES コンポーネントがデフォルトでインストールされる場所は、Solaris OS と Linux オペレーティングシステムでは異なります。そのため、この章で説明する手順では、便宜上ブレースホルダでインストール場所を表すことにします。たとえば、*AccessManager-base* という表記で、Access Manager のベースインストールディレクトリを表します。

ヒント - この章で示す例のほとんどは、デフォルトの情報に基づいています。設定時に指定したインストール値や設定値がわからない場合は、例に示されている値を試してください。

インストール後の確認

ここでは、Java ES コンポーネントパッケージのインストールが成功したことを確認するための手順について説明します。「今すぐ設定」インストールを実行した場合、一部のコンポーネントは設定済みであり、すぐに実行できる状態になっています。ただし、ここで示す指針の目的は、パッケージが正しくインストールされており、部分的にインストールされたパッケージや不足するコンポーネントが存在しないことを単純に確認することです。

パッケージが正常にインストールされたことを確認する簡単な方法の1つは、製品レジストリを調べることです。インストールが完了すると、Java ES インストーラは製品レジストリを更新し、インストールされたコンポーネントの情報を格納します。アンインストール時には、Java ES アンインストーラがこの同じファイルを読み取り、現在存在していてアンインストールが可能なコンポーネントを特定します。

インストールログを確認したり、いくつかのコンポーネントについて正しいバージョンが適切なディレクトリ内に含まれているか確認してみるのもよい方法です。

または、Web Server や Directory Server など、「今すぐ設定」インストールに含まれていたコンポーネントを起動できるか試すこともできます。

次に示す手順の一部または全部を使ってインストールを確認してください。

▼ インストールが成功したかどうかの確認

- 手順 1. 部分的にインストールされたパッケージが存在しないことを確認します。Solaris OS の場合:

```
pkginfo -p
```

2. あるコンポーネントの正しいバージョンが存在していることを確認します。このリリースの正しいバージョンを確認するには、[付録 A](#) を参照してください。たとえば、Solaris 版の J2SE のバージョンは、1.5.0_03 になっているはずですが。

```
cd /usr/jdk  
ls -l
```

3. インストール済みコンポーネントが製品レジストリに反映されていることを確認します。

- a. **Solaris** の場合、**prodreg** ツールを使ってインストール済みパッケージを表示します。

```
prodreg &
```

- b. **Java Enterprise System** のノードを展開し、**Java ES** インストーラによってインストールされたパッケージを表示します。
- c. また、次のコマンドを使って **productregistry** ファイルを直接表示することもできます。

```
view /var/sadm/install/productregistry
```

終了するには、Esc キーを押したあと、q キーを押します。

4. サマリーログを開き、インストール中に指定した設定データを確認します。

```
cd /var/sadm/install/logs  
view Java_Enterprise_System_Summary_Report_install.*
```

5. 「今すぐ設定」インストールの場合、**Portal Server** と関連サービスを起動します。

- a. **Directory Server** を起動します。

```
/var/opt/mps/serverroot/slaped-hostname/start-slaped
```

- b. **Web Server** を起動します。

```
/opt/SUNWwbsvr/https-hostname.domainname/start
```

Web Server を起動すると、Portal Server と Access Manager も自動的に起動されます。

- c. **Web Server** の **URL** にアクセスします。

```
http://hostname
```

- d. **Web Server** の管理 **URL** にアクセスします。

```
http://hostname:8888
```

6. 「今すぐ設定」インストールの場合、**Portal Server** と関連サービスを停止します。

- a. **Web Server** の管理サーバーを停止します。

```
/opt/SUNWwbsvr/https-admserv/stop
```

- b. **Web Server** を停止します。

```
/opt/SUNWwbsvr/https-hostname.domainname/stop
```

- c. **Directory Server** を停止します。

```
/var/opt/mps/serverroot/slaped-hostname/stop-slaped
```

7. 「今すぐ設定」インストールの場合、**Portal Server** と **Access Manager** のサービスを起動します。

```
/var/opt/mps/serverroot/slapd-hostname/start-slapd  
/opt/SUNWwbsvr/https-hostname/domainname/start
```

8. 「今すぐ設定」インストールの場合、**Access Manager** コンソールにアクセスします。

ログイン時のユーザー ID は「amadmin」、パスワードは「password」です。

```
http://hostname/amconsole
```

9. 「今すぐ設定」インストールの場合、**Portal Server** にアクセスします。

ログイン時のユーザー ID は「amadmin」、パスワードは「password」です。

```
http://hostname/portal
```

10. エラーが発生した場合には、**Web Server** を再起動し、手順を繰り返します。

インストール後設定後の確認

ここでは、Java ES コンポーネントのインストール後設定の完了後に、それらのコンポーネントが正しく動作していることを確認するための指針を示します。

Java ES を起動するには、特定の順序でコンポーネントを1つずつ起動します。最初に起動するのは、Directory Server と Web コンテナ (Web Server またはアプリケーションサーバー) によって提供される基本的なサービスです。Java ES は、インストール中にこれらのサービスの実行可能インスタンスを作成します。Portal Server と Access Manager は Web コンテナ内で実行されるため、Web コンテナを起動するとそれらも起動されます。

Java ES コンポーネントセット全体を起動するための一般的なシーケンスは、次の表に示すとおりです。左側の列は起動手順の実行順序、中央の列は作業の内容、右側の列は作業の実行手順が解説されている場所をそれぞれ示しています。

表 7-1 Java ES の推奨起動シーケンス

順序	実行するタスク	説明の場所
1	Directory Server を起動します。	
	A. Directory Server を起動します。	176 ページの「Directory Server の起動と停止」
	B. 管理サーバーを起動します。	170 ページの「管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止」
	C. サーバーコンソールを起動します。	170 ページの「管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止」
2	Directory Proxy Server を起動します。	175 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
3	使用する Web コンテナを起動します。Access Manager と Portal Server がインストールされている場合は、それらが起動されます。Communications Express がインストールおよび設定されている場合には、これも起動されます。	
	Application Server を起動します (Message Queue も起動)。	172 ページの「Application Server の起動と停止」
	Web Server を起動します。	185 ページの「Web Server の起動と停止」
	IBM WebSphere Server を起動します。	このサーバーに関しては、サードパーティーの資料を参照してください。
	BEA WebLogic Server を起動します。	このサーバーに関しては、サードパーティーの資料を参照してください。
4	Access Manager を起動します。	170 ページの「Access Manager の起動と停止」
5	Portal Server Secure Remote Access を起動します。	182 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
6	Service Registry を起動します	183 ページの「Service Registry の起動と停止」
7	Instant Messaging を起動します。	177 ページの「Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動と停止」
8	Messaging Server を起動します。	179 ページの「Messaging Server の起動と停止」
9	Calendar Server を起動します。	174 ページの「Calendar Server の起動と停止」

Java ES コンポーネントセット全体を停止するときは、このシーケンスと逆の順序で行います。

Access Manager の起動と停止

Access Manager を起動および停止するには、その実行元となる Web コンテナを起動および停止します。

▼ Access Manager のログインページへのアクセス

ログインページへのアクセス方法は、Access Manager に対して行ったインストールのタイプに応じて異なります。

- レガシータイプ (6.x):

`http://webcontainer-host/:port/amconsole`

または

`http://webcontainer-host/:port/amserver`

- レルムタイプ (7.x):

`http://webcontainer-host/:port/amserver`

- 手順 1. 次の URL 形式を指定して、デフォルトページにアクセスします。

`http://web_container-host:port/amconsole`

Access Manager のログインページが表示されます。

2. ログインします。

Access Manager へのログインが成功することにより、このソフトウェアが正常に配備されていることを確認できます。デフォルトの管理者アカウントは、`amadmin` です。

管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止

ここでは、管理サーバーとサーバーコンソールの起動と停止の手順について説明します。詳細については、『Sun Java System Administration Server 5 2005Q1 Administration Guide』の「Starting and Stopping Administration Server」を参照してください。管理サーバーは Directory Server に依存しています。

▼ 管理サーバーの起動

手順 1. 次のコマンドを入力します。

Solaris OS の場合: `/var/opt/mps/serverroot/start-admin`

Solaris OS 以外の場合: サーバーのルートディレクトリに移動し、`./start-admin` と入力します。

2. 管理サーバープロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep admin-serv/config
./uxwdog -e -d /var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
ns-httpd -d /var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config ns-httpd -d
/var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config ns-httpd -d
/var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config ns-httpd -d
/var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
```

▼ サーバーコンソールの起動

手順 1. 必要に応じて `$DISPLAY` 変数を設定し、ホストでサーバーコンソールを表示します。

2. 管理サーバープロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep admin-serv/config
./uxwdog -e -d /var/opt/mps/serverroot/admin-serv
/config ns-httpd -d /var/opt/mps/serverroot/admin-serv
/config ns-httpd -d /var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
ns-httpd -d /var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
ns-httpd -d /var/opt/mps/serverroot/admin-serv/config
```

3. 次のコマンドを入力します。

Solaris OS の場合: `/usr/sbin/mpsadmserver startconsole`

Solaris OS 以外の場合: サーバーのルートディレクトリに移動し、`startconsole` と入力します。

4. サーバーコンソールプロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep console
orion 4871 4812 0 17:46:03 pts/2 0:00 /bin/sh/usr/sbin/mpsconsole
orion 4990 4871 0 17:46:04 pts/2 0:00 /var/opt/mps/serverroot/startconsole
orion 4812 4418 0 17:46:02 pts/2 0:00 /bin/sh/usr/sbin/mpsadmserver startconsole
```

▼ サーバーコンソールの停止

- 手順
1. サーバーコンソールを停止するには、グラフィカルインタフェースを終了します。
 2. サーバーコンソールが実行中でないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep console
```

▼ 管理サーバーの停止

- 手順
1. 次のコマンドを入力します。
Solaris OS の場合: `var/opt/mps/serverroot/stop-admin` Solaris OS 以外の
場合: サーバーのルートディレクトリに移動し、`./stop-admin` と入力します。

2. 管理サーバーが稼働していないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep admin-serv/config
```

Application Server の起動と停止

Application Server は「ドメイン」として設定されます。インストーラは、デフォルトのポート番号 4849 を使ってデフォルトの管理ドメインを作成します。管理サーバーのインスタンス名は、「server」です。Application Server を使用するには、ドメインを起動し、グラフィカルな管理コンソールにアクセスします。詳細については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Administration Guide』の第 1 章「Getting Started」を参照してください。

注 - Application Server を起動すると Message Queue も起動されます。

▼ Application Server のドメインの起動

- 手順
1. コマンド行で、`ApplicationServer-base/bin` ディレクトリに移動し、次のコマンドを入力します。

```
% asadmin start-domain --user admin-id --passwordfile \  
path_to_admin-password_file domainname
```

オプション部分には、インストール時に指定した値を入力してください。サーバーが起動中であることを通知するメッセージが表示されます。

```
Starting Domain domain1, please wait. Log redirected to install_dir...
```

起動プロセスが完了すると、さらに次のメッセージが表示されます。

```
Domain domain1 started
```

2. **Application Server** プロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep appserv
```

```
/opt/SUNWappserver/appserver/lib/appservDAS domain1
```

▼ 管理コンソールへのアクセス

- 手順 ● 管理コンソールにアクセスするには、ブラウザで次の **URL** 形式を使用します。

```
https://localhost:port
```

Application Server をインストールしたホストでブラウザを実行している場合は、ホスト名に *localhost* を指定します。ブラウザが別のシステム上にある場合は、*localhost* の代わりに **Application Server** ソフトウェアを実行しているシステムの名前を指定します。*port* 変数には、インストール時に割り当てられた管理ポート番号を指定します。インストール時に割り当てられるデフォルトのポート番号は 4849 です。

```
https://mycomputer.example.com:4849
```

管理コンソールのログイン画面が表示されるはずです。

注 - **Application Server** のインストール方法、ドメイン管理サーバー、およびさまざまなポート番号と概念の詳細については、『*Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Installation Guide*』を参照してください。

▼ Application Server の停止

- 手順
1. コマンド行で、*ApplicationServer-base/bin* ディレクトリに移動します。
 2. 次のコマンドを入力して **Application Server** インスタンスを停止します。

```
./asadmin stop-domain --domain domain1
```
 3. **Application Server** が稼働していないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep appservd
```

Calendar Server の起動と停止

Calendar Server は Directory Server に依存しています。

▼ Calendar Server の起動

- 手順
1. **sbin** ディレクトリに移動します。
Solaris OS の場合: `/opt/SUNWics5/cal/sbin`
Linux の場合: `/opt/sun/calendar/cal/sbin`
 2. 次のコマンドを入力して **Calendar Server** を起動します。
`./start-cal`
 3. **Calendar Server** プロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。
`/usr/bin/ps -ef | grep cal`
`/opt/SUNWics5/cal/lib/cshttpd -d 3`
`/opt/SUNWics5/cal/lib/enpd -p 57997 -c config/ics.conf`
`/opt/SUNWics5/cal/lib/csadmin`
`/opt/SUNWics5/cal/lib/csnotifyd`

▼ Calendar Server のグラフィカルインタフェースへのアクセス

- 手順
- **Calendar Server** で指定している **LDAP** ディレクトリにすでにデータがプロビジョニングされている場合は、**Calendar Server** にログインできます。ブラウザで、`http://hostname.domainname[:port]` という形式で **Calendar Server** にアクセスします。次に例を示します。

`http://mycomputer.example.com:89`

初回ログイン時に、**Calendar Server** はデフォルトカレンダーを作成します。**Calendar Server** にログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

▼ Calendar Server の停止

- 手順
1. **sbin** ディレクトリに移動します。
Solaris OS の場合: `/opt/SUNWics5/cal/sbin`
Linux の場合: `/opt/sun/calendar/cal/sbin`
 2. 次のコマンドを入力して **Calendar Server** を停止します。
`./stop-cal`
 3. **Calendar Server** が稼働していないことを確認します。次に例を示します。
`/usr/bin/ps -ef | grep cal`

Communications Express の起動と停止

Communications Express は Web ベースの通信クライアントで、アドレス帳、メールクライアント、およびカレンダーからなっています。Web ブラウザのアドレスフィールドに次の URL を入力すると、Communications Express にアクセスします。

```
http://webcontainer-host:  
webcontainer-port/URI path
```

各オプションの意味は次のとおりです。

- `webcontainer-host` は、Communications Express アプリケーションが設定されている Web コンテナインスタンスのホスト名です。
- `webcontainer-port` は、Communications Express が設定されている Web コンテナインスタンスのポート番号です。
- `URI path` は Communications Express が配備されている URI です。

Directory Proxy Server の起動と停止

UNIX タイプのすべてのシステムで、サーバーが 1024 未満の番号のポートで稼働している場合は、ルートとしてログインします。1024 以上の番号のポートで稼働している場合は、ルートまたはサーバーの管理者アカウントとしてログインします。

Directory Proxy Server は管理サーバーに依存しています。

▼ Directory Proxy Server の起動

- 手順 1. *DirectoryProxyServer-base/dps-instancename* に移動します。ここで、*instancename* は通常はホスト名です。たとえば、デフォルトのディレクトリは次のとおりです。

```
cd /var/opt/mps/serverroot/dps-host1
```

2. 次のコマンドを入力して **Directory Proxy Server** プロセスを起動します。

```
./start-dps
```

3. **Directory Proxy Server** プロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep dps
```

```
./ldapfwd -t /var/opt/mps/serverroot/dps-or03/etc/tailor.txt
```

▼ Directory Proxy Server の停止

- 手順 1. *DirectoryProxyServer-base/dps-instancename* に移動します。ここで、*instancename* は通常はホスト名です。たとえば、デフォルトのディレクトリは次のとおりです。

```
cd /var/opt/mps/serverroot/dps-host1
```

2. 次のコマンドを入力して **Directory Proxy Server** プロセスを停止します。

```
./stop-dps
```

3. **Directory Proxy Server** が稼働していないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep dps
```

Directory Server の起動と停止

Directory Server がクラスタの一部である場合は、論理ホストのアクティブノードで作業していることを確認してください。Directory Server には依存関係がありません。

▼ Directory Server の起動

- 手順 1. **Directory Server** を起動するには、次のいずれかのコマンドを使用します。

- Directory Server 5.2 がデフォルトバージョンである場合:

Solaris OS の場合: /usr/sbin/directoryserver start

Linux の場合: /opt/sun/sbin/directoryserver start

- Directory Server 5.2 がデフォルトバージョンで「ない」場合:

Solaris OS の場合: /usr/sbin/directoryserver -useversion 5.2 start

Linux の場合: /opt/sun/sbin/directoryserver -useversion 5.2 start

2. **Directory Server** プロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep slapd
```

```
./ns-slapd -D /var/opt/mps/serverroot/slapd-host1 -i /var/opt/mps/ \
serverroot/slapd-host1
```

▼ Directory Server の停止

- 手順 1. **Directory Server** を停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します。

- Directory Server 5.2 がデフォルトバージョンである場合:

Solaris OS の場合: /usr/sbin/directoryserver stop

Linux の場合: /opt/sun/sbin/directoryserver stop

- Directory Server 5.2 がデフォルトバージョンで「ない」場合:

Solaris OS の場合: /usr/sbin/directoryserver -useversion 5.2 stop

Linux の場合: /opt/sun/sbin/directoryserver -useversion 5.2 stop

2. **Directory Server** が稼働していないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep slapd
```

Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動と停止

Instant Messaging サーバーが起動すると、Sun Java System Instant Messenger クライアントはこのサーバーに接続します。Instant Messaging サーバーを停止すると、すべての接続が閉じ、クライアントはすべて切断されます。インスタンスごとの設定で、有効にする対象をマルチプレクサのみ、サーバーのみ、または両方のコンポーネントのいずれかに指定できます。Instant Messaging は Directory Server と Web Server に依存しています。

注 – Instant Messaging クライアント (および Windows オペレーティングシステム上のサーバー) の起動方法の詳細については、『Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

▼ Instant Messaging サーバーとマルチプレクサの起動

- 手順
1. *InstantMessaging-base/sbin/* ディレクトリに移動します。次に例を示します。
Solaris OS の場合: `cd /opt/SUNWiim/sbin`

Linux の場合: `cd /opt/sun/im/sbin`
 2. 次のコマンドを入力して、**Instant Messaging** サーバーとマルチプレクサプロセスを起動します。
`./imadmin start`
 3. **Instant Messaging** プロセスが実行中であることを確認します。
`./imadmin status`

Server	[UP]
Multiplexor	[UP]
Agent:calendar	[DOWN]
Watchdog	[UP]

▼ Instant Messaging の停止

- 手順
1. *InstantMessaging-base/sbin/* ディレクトリに移動します。次に例を示します。
Solaris OS の場合: `cd /opt/SUNWiim/sbin`

Linux の場合: `cd /opt/sun/im/sbin`
 2. 次のコマンドを入力して、**Instant Messaging** サーバーとマルチプレクサプロセスを起動します。
`./imadmin stop`
 3. **Instant Messaging** プロセスが実行していないことを確認します。
`./imadmin check`

Message Queue の起動

Message Queue サービスの中心となるのは Message Server です。Message Server は、1 つまたは複数のブローカを使ってメッセージルーティングとメッセージ配信のサービスを実行します。imqbrokerd コマンドを実行すると、ブローカが起動します。

▼ Message Queue Message Server ブローカの起動

- 手順
1. `MessageQueue-base/bin` ディレクトリに移動します。
 2. 次のコマンドを入力して **Message Queue Message Server** ブローカを起動します。

```
./imqbrokerd
```

3. ブローカプロセスが実行中であることを確認します。次に例を示します。

Solaris OS の場合: `/usr/bin/ps -ef | grep imqbrokerd`

```
/bin/sh /usr/bin/imqbrokerd
```

Linux の場合: `/bin/ps -ef | grep imqbrokerd`

```
/bin/sh ./imqbrokerd
```

Messaging Server の起動と停止

Messaging Server の `start-msg` ユーティリティーは、Messaging Server のすべてのプロセス、または任意に指定した1つのサービスを起動します。どのサービスを起動するかは、その設定パラメータを有効または無効にすることで制御できます。Messaging Server は Directory Server と管理サーバーに依存しています。

▼ Messaging Server の起動

- 手順
1. `MessagingServer-base/sbin` ディレクトリに移動します。
 2. 次のコマンドを入力して **Messaging Server** を起動します。

```
./start-msg
```

3. **Messaging Server** プロセスが実行中であることを確認します。

表示されるプロセスは、使用するように設定されている Messaging Server 機能によって異なります。

```
/usr/bin/ps -ef | grep SUNWmsgsr  
  
/opt/SUNWmsgsr/lib/enpd  
/opt/SUNWmsgsr/lib/stored -d  
/opt/SUNWmsgsr/lib/popd -d 5  
/opt/SUNWmsgsr/lib/imapd -d 5 -D 6  
/opt/SUNWmsgsr/lib/mshttpd -d 5 -D 6  
/opt/SUNWmsgsr/lib/dispatcher  
/opt/SUNWmsgsr/lib/job_controller  
/opt/SUNWmsgsr/lib/tcp_lmtp_server  
/opt/SUNWmsgsr/lib/tcp_smtp_server  
/opt/SUNWmsgsr/lib/tcp_smtp_server  
/opt/SUNWmsgsr/lib/imsched  
/opt/SUNWmsgsr/lib/watcher
```

▼ Messaging Server の停止

手順 1. *MessagingServer-base/sbin* ディレクトリに移動します。

2. 次のコマンドを入力して **Messaging Server** を停止します。

```
./stop-msg
```

3. **Messaging Server** プロセスが実行されていないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep SUNWmsgsr
```

実行中トランザクションが完了するまで待機するため、一部の Messaging Server プロセスは停止まで数分かかることがあります。

▼ Messenger Express へのアクセス

Messenger Express は Web ベースの電子メールプログラムで、このプログラムを使用すると、エンドユーザーはブラウザから自分のメールボックスにアクセスできます。

手順 1. **Messaging Server** で指定している LDAP ディレクトリにすでにデータがプロビジョニングされている場合は、ブラウザからログインできます。**http://hostname.domainname[:port]** という形式で **Messenger Express** にアクセスします。次に例を示します。

```
http://mycomputer.example.com:80
```

2. LDAP ディレクトリにまだプロビジョニングされていない場合は、**admin** として、設定時に入力したパスワードを指定してログインできます。

Web コンテナの起動と Portal Server デスクトップへのアクセス

Portal Server の起動と停止のメカニズムは、実行先の Web コンテナ (Sun Java Systems またはサードパーティー製) の起動と停止のメカニズムの一部です。また、Directory Server、Access Manager、および Access Manager SDK にも依存します。インストールと設定のあとで Sun の Web コンテナ、Access Manager、および Portal Server を起動する方法については、次の各節を参照してください。

- 172 ページの「Application Server の起動と停止」
- 185 ページの「Web Server の起動と停止」

Portal Server は、Access Manager の管理コンソールを使って管理されます。Access Manager の管理コンソールを開く方法については、170 ページの「Access Manager の起動と停止」を参照してください。

エンドユーザー Portal Server Desktop にアクセスする手順は、以下のとおりです。

▼ Sun Web コンテナから Portal Server デスクトップへのアクセス

手順 1. ブラウザに次の URL を指定して、サンプルデスクトップを表示します。

`http://servername:port/portal`

サンプルデスクトップを表示することで、Portal Server が正常に配備されていることを確認できます。

2. モバイル装置の場合は、次の URL を使用します。

`http://servername:port/portal/dt`

▼ BEA WebLogic から Portal Server デスクトップへのアクセス

手順 ● 新しいブラウザに次の URL を指定して、サンプルデスクトップを表示します。

`http://beaweblogic-host:port/portal`

サンプルデスクトップを表示することで、Portal Server が正常に BEA WebLogic に配備されていることを確認できます。

▼ IBM WebSphere から Portal Server デスクトップへのアクセス

手順 ● 新しいブラウザに次の URL を指定して、サンプルデスクトップを表示します。

```
http://ibmwebsphere-hostname:port/portal
```

サンプルデスクトップを表示することで、Portal Server が正常に IBM WebSphere に配備されていることを確認できます。

Portal Server Secure Remote Access の起動と停止

Portal Server の Secure Remote Access コンポーネントにはブラウザ用にセキュリティ保護されたリモートアクセスが備わっているため、リモートデバイスの Java テクノロジ対応ブラウザから、ポータルコンテンツやサービスにアクセスすることができます。ゲートウェイコンポーネントは、リモートユーザーごとにインタフェースを確立して、内部の Web サーバーとアプリケーションサーバーからのコンテンツを安全に配信します。Portal Server Secure Remote Access は、Portal Server と、Access Manager または Access Manager SDK に依存しています。

▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの起動

手順 1. ゲートウェイコンポーネントをインストールし必要なプロファイルを作成したあとに、次のコマンドを実行してゲートウェイを起動します。

```
/gateway-install-root/SUNWps/bin/gateway -n default start
```

default は、インストール時に作成されたデフォルトのゲートウェイプロファイルです。あとで独自に新しいプロファイルを作成し、そのプロファイルを指定してゲートウェイを再起動することもできます。

2. 次のコマンドを実行して、指定したポートでゲートウェイが動作しているかどうかをチェックします。

```
netstat -a | grep port-number
```

デフォルトのゲートウェイポートは 443 です。

▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの停止

手順 1. 次のコマンドを入力してゲートウェイを停止します。

```
/gateway-install-root/SUNWps/bin/gateway stop
```

このコマンドを実行すると、指定したホスト上で動作中のすべてのゲートウェイインスタンスが停止します。

2. 次のコマンドを実行して、指定したポートでゲートウェイが動作していないかチェックします。

```
/usr/bin/ps -ef | entsys
```

Service Registry の起動と停止

Service Registry をインストールすると、Application Server ドメインが次の場所に作成されます。

- Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWsoar/domains/registry
- Linux の場合: /var/opt/sun/SUNWsoar/domains/registry

管理ドメインのポート番号は 6489 です。Service Registry は自動的に、registry ドメイン内の Web アプリケーションとして配備されます。

▼ Service Registry の起動

手順 1. **Service Registry** のインストールディレクトリに移動します。

Solaris OS の場合: `cd /opt/SUNWsoar/install`

Linux の場合: `cd /opt/sun/SUNWsoar/install`

2. 次のコマンドを実行します。

Solaris OS の場合: `/usr/sfw/bin/ant -f ./build-install.xml appserver.domain.start`

Linux の場合: `/opt/sun/bin/ant --noconfig -f ./build-install.xml appserver.domain.start`

次の手順 サーバーが起動中であることを通知するメッセージが表示されます。起動プロセスが完了すると、追加メッセージが表示されます。

▼ 管理コンソールへのアクセス

- 手順 1. **Service Registry** ドメイン用の管理コンソールにアクセスするには、ブラウザで次の **URL** 形式を使用します。

`https://hostname:port`

2. **Application Server** と **Service Registry** がインストールされているシステム上で **Web** ブラウザを実行している場合には、ローカルホストを *hostname* として指定します。

それ以外の場合は、ローカルホストを *hostname* として指定する代わりに、**Application Server** ソフトウェアが稼働しているシステムの名前を指定します。

インストール時に割り当てられるデフォルトのポート番号は **6489** です。次に例を示します。

`https://mycomputer.example.com:6489`

- 次の手順 管理コンソールのログイン画面が表示されるはずですが、デフォルトのログイン名とパスワードは、次のとおりです。ログイン名: **admin** パスワード: **12345678**

▼ Service Registry の停止

- 手順 1. **Service Registry** のインストールディレクトリに移動します。

Solaris OS の場合: `cd /opt/SUNWsoar/install`

Linux の場合: `cd /opt/sun/SUNWsoar/install`

2. 次のコマンドを実行します。

Solaris OS の場合: `/usr/sfw/bin/ant -f ./build-install.xml
appserver.domain.stop`

Linux の場合: `/opt/sun/bin/ant --noconfig -f ./build-install.xml
appserver.domain.stop`

3. ドメインを停止したあとすぐに再起動したい場合には、**Ant** ターゲット **appserver.domain.bounce** を使用します。

Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動

Sun Cluster ソフトウェアは他のコンポーネントのように起動または停止されることはありませんが、再起動時に非クラスタモードに変更することでソフトウェアを停止することは可能です。手順については、『Sun Cluster System Administration Guide for Solaris OS』を参照してください。

Web Server の起動と停止

Web Server のインストール時には、デフォルトで2つのサーバーインスタンスがインストールされます。管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスです。Web Server には依存関係がありません。

▼ Web Server Administration Server とインスタンスの起動

- 手順
1. コマンド行で、`WebServer-base/https-admserv` ディレクトリに移動します。
 2. 次のコマンドを入力して **Web Server** 管理プロセスを起動します。

```
./start
```

3. `WebServer-base/https-hostname.domainname` に移動します。

4. 次のコマンドを入力して **Web Server** インスタンスを起動します。

```
./start
```

次のメッセージが表示されるはずです。startup: Server started successfully.

5. 2つの **Web Server** プロセスが実行中であることを確認します。たとえば、**Solaris OS** の場合は次のようにします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep SUNWwbsvr
```

```
./webservd-wdog -r /opt/SUNWwbsvr -d /opt/SUNWwbsvr/https-admserv/config -n http
```

```
./webservd-wdog -r /opt/SUNWwbsvr -d /opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com
```

```
webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d /opt/SUNWwbsvr/https-admserv/config -n https-admserv
```

```
webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d /opt/SUNWwbsvr/https-admserv/config -n https-admserv
webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d /opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com/config
webservd -r /opt/SUNWwbsvr -d /opt/SUNWwbsvr/https-host1.example.com/config
```

6. 管理サーバーのグラフィカルインタフェースにアクセスします。
ブラウザで、`http://hostname.domainname:adminport` という形式で入力します。次に例を示します。

```
http://host1.example.com:8888
```

ログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

▼ Web Server Administration Server とインスタンスの停止

手順 1. コマンド行で、`WebServer-base/https-admserv` ディレクトリに移動します。

2. 次のコマンドを入力して **Web Server** 管理プロセスを停止します。

```
./stop
```

3. `WebServer-base/https-hostname.domainname` に移動します。

4. 次のコマンドを入力して **Web Server** インスタンスを停止します。

```
./stop
```

5. **Web Server** プロセスが実行していないことを確認します。次に例を示します。

```
ps -ef | grep SUNWwbsvr
```

Web Proxy Server の起動と停止

ここでは、Web Proxy Server を起動および停止するための手順を説明します。

▼ Web Proxy Server の管理サーバーとインスタンスの起動

Web Server 管理サーバーインスタンスおよび Web Proxy Server インスタンスをインストールする場合。

手順 1. コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-admserv` に移動し、管理サーバーを起動します。

- Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-admin start`
 - Linux の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-admin start`
2. コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-hostname.domainname` に移動し、**Web Proxy Server** インスタンスを起動します。
- Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-server1 start`
 - Linux の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-server1 start`

▼ 管理サーバーのグラフィカルインタフェースへのアクセス

- 手順 ● **http://hostname.domainname:adminport** という形式で管理サーバーのグラフィカルインタフェースにアクセスします。次に例を示します。
- `http://host1/example.com:8888`
- ログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

▼ Web Proxy Server の停止

- 手順 1. コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-admserv` に移動し、管理サーバーを停止します。
- Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-admin stop`
 - Linux の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-admin stop`
2. コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-hostname.domain` に移動し、**Web Proxy Server** インスタンスを停止します。
- Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-server1 stop`
 - Linux の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-server1 stop`

次の手順

この章を終えると、インストールと設定を終えた Java ES コンポーネントが正常に機能することの確認が完了します。これでコンポーネントの管理に進むことができます。以下のマニュアルは、その作業を始めるうえで役立ちます。

- Java ES コンポーネントのマニュアル:
<http://docs.sun.com/prod/entsys.05Q4>

- 『Sun Cluster System Administration Guide for Solaris OS』
- 『Sun Cluster Data Services Planning and Administration Guide for Solaris OS』

第 8 章

コンポーネントのアンインストール

この章では、Java ES インストーラを使用してインストールした Sun Java™ Enterprise System (Java ES) コンポーネントをアンインストールする方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 189 ページの「アンインストーラのしくみ」
- 192 ページの「アンインストールの前提条件」
- 193 ページの「アンインストールの計画」
- 210 ページの「アンインストーラの実行」
- 218 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール」
- 218 ページの「アンインストール後の作業」

アンインストーラのしくみ

Java ES には、Java ES インストーラを使用してシステムにインストールしたコンポーネントを削除するためのアンインストールプログラムが用意されています。Java ES インストーラと同じく、アンインストーラは、グラフィカル、テキストベース、またはサイレントの各モードで実行できます。

Java ES インストーラはインストール中に、Java ES アンインストーラを次の場所に配置します。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys4`
- Linux の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys4`

注 - オプションの `-no` パラメータを使用して、ソフトウェアをアンインストールしない設定でアンインストーラを実行することができます。このオプションは、アンインストーラの動作に慣れるのに役立つだけでなく、状態ファイルを作成してサイレントアンインストールにそれを使用する場合にも便利です。

アンインストーラの制限

Java ES インストーラと同じく、アンインストーラは、グラフィカル、テキストベース、またはサイレントの各モードで実行できます。

- アンインストーラによって削除されるのは、Java ES インストーラによってインストールされたコンポーネント製品だけです。Java ES インストーラを使用せずにインストールしたコンポーネントの削除については、各コンポーネントのドキュメントに記載されている操作手順を参照してください。
- アンインストーラの実行は、Java ES コンポーネントがインストールされている個々のホストごとに行う必要があります。リモートアンインストールはサポートされていません。削除するコンポーネントを、ホストごとに1つまたは複数選択することができます。
- アンインストーラは Java ES 共有コンポーネントを削除しません。
- アンインストーラによって、設定ファイルとユーザーデータファイルが削除される場合があります。これらのファイルはコンポーネントによって異なります。
アンインストールプロセスが完了したあとで、一部のファイルとディレクトリの削除が必要になる場合もあります。製品別の情報については、[194 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」](#)を参照してください。
- アンインストーラは、コンポーネントの依存関係をチェックし、依存が検出された場合は警告メッセージを出力します。ただし、そのチェック対象はアンインストーラが実行されているシステムだけです。
- アンインストーラがサードパーティー製の Web コンテナのインストール設定を解除することはありません。
- アンインストーラが Web コンテナでの Access Manager SDK のインストール設定を解除することはありません。Web コンテナの再設定は、元の classpath に戻すなどして手動で行う必要があります。



注意 - Sun Cluster ソフトウェアがインストールされているが、クラスタノードの設定に一度も使用されていない場合を除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除にはアンインストーラを使用しないでください。詳細については、[218 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール」](#)を参照してください。

相互依存関係の処理

アンインストーラの動作は、インストールしたコンポーネント、および各コンポーネントの相互関係によって異なります。

- アンインストーラは、同一ホストにインストールされている製品間の依存関係を認識します。同一ホスト上で依存関係を持つコンポーネントをアンインストールしようとする、アンインストーラは警告を出力します。

たとえば、Portal Server がインストールされているホストから Access Manager をアンインストールしようとする、Portal Server は Access Manager がないと機能できないことを、アンインストーラが警告します。

- 通常は、他のコンポーネントが依存していないコンポーネントはアンインストールできます。

たとえば、Portal Server は Access Manager に依存していますが、Access Manager は Portal Server に依存していません。Portal Server をアンインストールしようとした場合、Access Manager は Portal Server がなくても機能できるため、アンインストーラは警告を発行しません。



注意 - コンポーネント製品をアンインストールするときは、どの製品がそのコンポーネントをサポートするように設定されているかを調べ、必要であれば追加の設定を行います。必要な追加設定を行わない場合、存在しなくなった製品をサポートするように設定されたコンポーネントがシステムに残されることになります。

アンインストーラは、次の相互依存関係を認識しません。

- リモートホストからの依存関係
- 設定による依存関係

リモートホストからのコンポーネント依存関係

コンポーネントの依存関係のなかには、リモートホストに配備されたコンポーネントによって解決できるものもあります。アンインストーラはこのような依存関係を認識しません。

たとえば、Directory Server をアンインストールする場合、アンインストーラは、Access Manager が Directory Server に依存することを、両製品が同じホスト上に配備されている場合でも警告しません。これは、別のホスト上の別の Directory Server インスタンスが Access Manager をサポートする「可能性がある」からです。

設定によるコンポーネントの依存関係

アンインストーラは、インストール後の設定によって生じるコンポーネント間の依存関係を認識しません。

たとえば、同じホストに Portal Server と Calendar Server をインストールし、Portal Server のカレンダーチャンネルとして Calendar Server を使用するよう Portal Server を設定したとします。この設定により、Portal Server は Calendar Server に依存します。ただし、そのあとで Calendar Server をアンインストールしようとしても、アンインストーラはインストール後の設定を認識していないため、Portal Server が Calendar Server に依存することを警告しません。

アンインストールの前提条件

次の表は、アンインストールの前に必要なタスクを示しています。タスクによっては、ご使用の環境に適用されない場合もあります。

左の列には作業の実行順序が、右の列にはその他の有用情報や手順の参照先が、それぞれ記載されています。

表 8-1 アンインストール前のチェックリスト

作業の説明	便利な情報または参照先
1. アンインストールする各コンポーネントの要求や動作を確認します。	194 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」
2. 設定によって生じるコンポーネント間の依存関係を調べ、データのバックアップ、依存コンポーネントの設定変更による依存関係の解消、適切な順序でのコンポーネントのアンインストールなど、適切な対応をとる必要があります。	191 ページの「相互依存関係の処理」
3. 製品レジストリファイルのコピーを作成します。このバックアップコピーは、アンインストールが失敗した場合にシステムを復旧するのに役立ちます。	Solaris OS の場合: /var/sadm/install/productregistry Linux の場合: /var/opt/sun/install/productregistry
4. 以後のインストールでデータの再利用を考えている場合は、アンインストールするコンポーネントの設定データまたはユーザーデータをバックアップまたはアーカイブします。	194 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」
5. 設定ディレクトリをホストする Directory Server インスタンスが稼働していることを確認します。注: ほとんどの場合、Web コンテナと Directory Server は稼働させておきますが、その他のサーバーはアンインストール前にシャットダウンします。	アンインストールするコンポーネントの設定をアンインストーラが正しく解除するには、この Directory Server インスタンスが稼働している必要があります。
6. 必要に応じて、管理サーバー、Directory Server、Access Manager の管理者アクセス情報を収集します。	208 ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」

表 8-1 アンインストール前のチェックリスト (続き)

作業の説明	便利な情報または参照先
7. Access Manager をアンインストールする場合、アンインストール前にスキーマを削除します。	次の LDIF ファイルを使ってスキーマを削除します。 /etc/opt/SUNWam/config/ds_remote_schema_uninstall
8. 独自のシステムにインストールされている Messaging Server をアンインストールする前に、管理サーバーの設定を解除します。	管理サーバーの設定解除方法: cd /usr/sbin/mpsadmserver unconfigure

アンインストールの計画

アンインストーラを使用する場合は、データが紛失したり相互依存関係が消失したりしないように、事前にインストール状況を調査して、作業手順の計画を立てる必要があります。各種 Java ES コンポーネントをアンインストールしたときに、残るコンポーネントがどのように動作するかを理解しておくことは重要です。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 193 ページの「インストール済み Java ES ソフトウェアの調査」
- 194 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」
- 208 ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」

インストール済み Java ES ソフトウェアの調査

各ホストにすでにインストールされている Java ES コンポーネントソフトウェアを確認するには、次のいずれかの手順を実行します。

▼ アンインストーラによるインストール済みソフトウェアの表示

- 手順
1. **root** として、アンインストーラが格納されているディレクトリに移動します。
 - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys4
 - Linux の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys4
 2. ローカルシステムを調査するために、ソフトウェアをアンインストールしない設定でアンインストーラを実行します。
グラフィカルモードの場合:

./uninstall -no

テキストベースモードの場合:

```
./uninstall -no -nodisplay
```

uninstall コマンドの完全な構文については、253 ページの「アンインストールコマンド」を参照してください。

3. インストールされている製品のリストが表示されるまでアンインストーラのページを切り替えます。
4. インストールされているコンポーネントのリストを確認したら、アンインストーラを終了します。
ソフトウェアのアンインストールは行われません。

▼ Solaris の prodreg ユーティリティによるインストール済みソフトウェアの表示

- 手順 ● **prodreg** ユーティリティを使用して、**Java ES** コンポーネントを含む、システムにインストールされているすべてのパッケージに関する情報を表示することができます。

この情報は、コンポーネントの依存関係を調べる場合に便利です。また、prodreg ユーティリティは、インストールが不完全で、特別な処理が必要なパッケージも示します。Solaris 10 および Solaris 9 オペレーティングシステム、および一部のバージョンの Solaris 8 オペレーティングシステムでは、次を実行してこのユーティリティを起動します。

```
prodreg
```

詳細については、prodreg のマニュアルページを参照してください。

Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認

以下の中から関係のある表を調べて、アンインストーラが各 Java ES コンポーネントに対して行う内容を確認してください。さらに、作業手順の計画を立てて、データが紛失したり相互依存関係が消失したりすることがないようにします。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 195 ページの「Access Manager のアンインストール動作」
- 196 ページの「管理サーバーのアンインストール動作」
- 197 ページの「Application Server のアンインストール動作」
- 198 ページの「Calendar Server のアンインストール動作」
- 199 ページの「Communications Express のアンインストール動作」
- 200 ページの「Delegated Administrator のアンインストール動作」

- 201 ページの「Directory Server のアンインストール動作」
- 202 ページの「Directory Proxy Server のアンインストール動作」
- 202 ページの「Instant Messaging のアンインストール動作」
- 203 ページの「Messaging Server のアンインストール動作」
- 203 ページの「Message Queue のアンインストール動作」
- 204 ページの「Portal Server のアンインストール動作」
- 205 ページの「Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作」
- 206 ページの「Service Registry のアンインストール動作」
- 207 ページの「Sun Cluster のアンインストール動作」
- 207 ページの「Web Server のアンインストール動作」
- 208 ページの「Web Proxy Server のアンインストール動作」

Access Manager のアンインストール動作

表 8-2 Access Manager のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データ	Directory Server のエントリは、Access Manager 固有のデータを含め、何も削除されません。
依存	Directory Server Web コンテナ
このインストールを必要とする製品	<ul style="list-style-type: none"> ■ Portal Server (Access Manager SDK と同じホスト上に存在する必要がある) ■ Calendar Server (シングルサインオン (SSO) を使用するように設定されている場合) ■ Instant Messaging (Portal Server、SSO を使用するように設定されている場合) ■ Messaging Server (SSO を使用するように設定されている場合) ■ Communications Express (SSO を使用するように設定されている場合、および Schema 2 を使用している場合)
アンインストール前の作業	/etc/opt/SUNWam/config/ds_remote_schema_uninstall.ldif を使ってスキーマを削除します。

表 8-2 Access Manager のアンインストールの詳細 (続き)

項目	詳細
アンインストール後の作業	<p>アンインストールによって、Web Server または Application Server 上でのみ、Access Manager のインストール設定すべてが Web コンテナから解除されます。サードパーティー製の Web コンテナから Access Manager の設定が解除されることはありません。また、Web Server、Application Server、BEA WebLogic、IBM WebSphere といった Web コンテナの SDK インストールの設定も解除されません。</p> <p>さらに、次のファイルが /var/sadm/install ディレクトリに格納されている場合は、それを削除します。</p> <p>.lockfile.pkg.lock</p>

管理サーバーのアンインストール動作

表 8-3 管理サーバーのアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データ	<ul style="list-style-type: none"> ■ アンインストール時に他のサーバーを管理するためのプロキシ情報が失われます。 ■ 他のサーバーを管理するために管理サーバーが使用する設定データは、設定 Directory Server に残されます。この情報は、その後の管理サーバーのインストール時に再利用することができます。
依存	Directory Server
このインストールを必要とする製品	<p>Directory Proxy Server と Messaging Server には、管理サーバーが必要です。設定によっては、Directory Server にも管理サーバーが必要です。</p> <p>注: 管理サーバーを削除し、Directory Server を削除しなかった場合、Directory Server に付属するその他のユーティリティを使用して Directory Server を管理する必要があります。詳細については、Directory Server のマニュアル (http://docs.sun.com/coll/DirectoryServer_05q4_ja) を参照してください。</p>
アンインストール前の作業	設定 Directory Server が稼働していることを確認し、管理者ユーザー ID とパスワードを指定できるように準備します。
アンインストール後の作業	なし

Application Server のアンインストール動作

表 8-4 Application Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	<ul style="list-style-type: none">■ インストール時に作成されたデフォルトのドメインは、アンインストール時に削除されます。■ アンインストール時には、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスを含め、設定されている管理ドメインは削除されません。■ アンインストールが完了するまでに、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスは停止されます。
依存	同一システム上に Message Queue が必要です。
このインストールを必要とする製品	<ul style="list-style-type: none">■ Access Manager (Application Server を使用するように設定されている場合)■ Portal Server (Application Server を使用するように設定されている場合)■ Communications Express (Application Server を使用するように設定されている場合)
アンインストール前の作業	設定データを保存するために、管理ドメインディレクトリのコピーを作成します。
アンインストール後の作業	<p>システムから Application Server を完全に削除するために、残っている Application Server のログファイルとディレクトリを削除します。Application Server ディレクトリのデフォルトの場所は次のとおりです。</p> <p>Solaris OS の場合:</p> <pre>/var/opt/SUNWappserver /opt/SUNWappserver</pre> <p>Linux の場合:</p> <pre>/var/opt/sun/appserver /opt/sun/appserver</pre> <p>Message Queue のアンインストール後の作業については、203 ページの「Message Queue のアンインストール動作」を参照してください。</p>

Calendar Server のアンインストール動作

表 8-5 Calendar Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	設定データとユーザーデータはアンインストール時には削除されず、以後のインストール時に上書きされます。 Calendar Server のカスタマイズ情報はアンインストール時に削除されます。
依存	<ul style="list-style-type: none">■ Directory Server■ Access Manager (シングルサインオン (SSO) 用に設定されている場合、または Schema 2 を使用する場合)■ Messaging Server (またはその他のメールサーバー、Calendar Server の電子メール通知サービスを使用する場合)
このインストールを必要とする製品	<ul style="list-style-type: none">■ Portal Server (Portal Server のカレンダーチャンネルに Calendar Server を使用するように設定されている場合)■ Communications Express
アンインストール前の作業	設定データやユーザーデータの再利用を予定している場合は、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4 Administration Guide』に記載されている移行手順に従ってください。
アンインストール後の作業	不要なログファイルと Calendar Server ディレクトリを削除します。

Communications Express のアンインストール動作

表 8-6 Communications Express のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	<p>すべての設定データ、ユーザーデータ、UI カスタマイゼーションは、アンインストール後も維持されます。</p> <p>Communications Express ファイルは、次の 2 つの場所に保持されます。</p> <p>デフォルトのパッケージインストール:</p> <p>Solaris OS の場合: /opt/SUNWuwc</p> <p>Linux の場合: /opt/sun/uwc</p> <p>設定時にデフォルトで作成されるアプリケーション配備:</p> <p>Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWuwc</p> <p>Linux の場合: /var/opt/sun/uwc</p> <p>Communications Express をアンインストールすると、アンインストールはパッケージインストールの場所だけからデータを削除します。アプリケーション配備の場所にあるデータは、そのまま残されます。アプリケーション配備の場所からアプリケーションにアクセスすることができます。</p> <p>ただし、すべての設定データと UI カスタマイゼーションは再設定時に上書きされます。ユーザーデータは再設定後もそのまま維持されます。</p>
依存	<ul style="list-style-type: none">■ Application Server (Application Server 下で実行するように設定されている場合)■ Web Server (Web Server 下で実行するように設定されている場合)■ Access Manager (SSO を使用するように設定されている場合)■ Directory Server■ Calendar Server■ Messaging Server
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	Communications Express を設定解除します。『Sun Java System Communications Express 6 2005Q4 Administration Guide』の「Communications Express の設定解除」の節を参照してください。
アンインストール後の作業	不要なログファイルと Communications Express ディレクトリを削除します。

Delegated Administrator のアンインストール動作

表 8-7 Delegated Administrator のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データ	設定データとユーザーデータはアンインストール時に削除されません。このデータは以降のインストール時に上書きされます。 Delegated Administrator へのカスタマイズはアンインストール時に削除されます。
依存	<ul style="list-style-type: none">■ Directory Server■ Access Manager■ 次のいずれかの Web コンテナ: Web Server または Application Server
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	設定データやユーザーデータの再利用を予定している場合は、『Sun Java System Communications Services 6 2005Q4 Delegated Administrator Guide』の「Preserve an Existing Configuration」を参照してください。
アンインストール後の作業	不要なログファイルと Delegated Administrator ディレクトリを削除します。

Directory Server のアンインストール動作

表 8-8 Directory Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	<p>設定ディレクトリをホストする Directory Server をアンインストールする場合、設定ディレクトリの情報はアンインストール時に削除されます。ユーザーデータをホストする Directory Server をアンインストールする場合、Directory Server の LDAP データベースはアンインストール時に削除されます。</p> <p>注: データの損失を避けるために、アンインストール前に Directory Server 情報をバックアップする必要があります。Directory Server には、Directory Server をバックアップしたり、設定データを移行したりするためのツールやユーティリティが、いくつか用意されています。詳細については、Directory Server のマニュアル (http://docs.sun.com/coll/DirectoryServer_05q4_ja) を参照してください。</p> <p>注: o=NetscapeRoot サフィックスの下にある、設定情報を含む設定ディレクトリをアンインストールする場合、警告は出力されません。その他のディレクトリの設定情報も含む中央の設定ディレクトリをアンインストールすると、アンインストール後にそれらのディレクトリを管理できなくなります。</p>
依存	なし
このインストールを必要とする製品	<ul style="list-style-type: none"> ■ 管理サーバー ■ Calendar Server ■ Directory Proxy Server ■ Access Manager ■ Instant Messaging ■ Messaging Server ■ Portal Server ■ Communications Express
アンインストール前の作業	<ul style="list-style-type: none"> ■ 必要に応じて Directory Server の設定ディレクトリと Directory Server LDAP データベースのバックアップを行います。 ■ 設定ディレクトリをホストする Directory Server インスタンスが稼働していることを確認し、管理者ユーザー ID とパスワードを指定できるように準備します。
アンインストール後の作業	Directory Server のアンインストールでは、残りのファイルとディレクトリの手動削除が必要となる場合があります。

Directory Proxy Server のアンインストール動作

表 8-9 Directory Proxy Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データ	<ul style="list-style-type: none">■ アンインストールする Directory Proxy Server インスタンスの設定データは、アンインストール時に削除されます。■ Directory Proxy Server の複数のインスタンスで共有される設定データは、アンインストール後も残されます。■ Directory Proxy Server はユーザーデータを持ちません。
依存	Directory Proxy Server は、設定 Directory Server として機能するローカルまたはリモートの Directory Server に論理的に依存します。Directory Proxy Server はローカルの管理サーバーに依存しています。
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	なし

Instant Messaging のアンインストール動作

表 8-10 Instant Messaging のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	設定データは、アンインストール後もすべて残されるため、以後のインストールで再利用できます。
依存	<ul style="list-style-type: none">■ Directory Server■ Access Manager SDK
このインストールを必要とする製品	Portal Server (Instant Messaging チャンネルを使用するように設定されている場合)
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	なし

Messaging Server のアンインストール動作

表 8-11 Messaging Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	すべての設定データとカスタマイズ情報はアンインストール後も残されるため、以後のインストールで再利用できます。
依存	<ul style="list-style-type: none">■ Directory Server■ 管理サーバー (同じホストに配備する必要がある)■ Web Server (フィルタなどのメール機能用)■ Access Manager (Schema 2 を使用している場合)
このインストールを必要とする製品	<ul style="list-style-type: none">■ Calendar Server■ Portal Server (メッセージングチャネルを使用するように設定されている場合)■ Communications Express (メッセージングを使用している場合)
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	状況によっては、219 ページの「 Messaging Server インストール後 」に記載されているアンインストール後作業が必要になる場合があります。

Message Queue のアンインストール動作

表 8-12 Message Queue のアンインストールに関する詳細

項目	詳細
設定データ	インスタンスに固有の設定データ、ユーザーリポジトリ、およびアクセス制御ファイルはアンインストール後も残され、以後の再インストール時に再利用できます。
依存	Directory Server (オプション)
このインストールを必要とする製品	Application Server (Message Queue と同じホストに存在する必要がある)

表 8-12 Message Queue のアンインストールに関する詳細 (続き)

項目	詳細
アンインストール前の作業	<ul style="list-style-type: none"> ■ 実行しているすべてのブローカを停止します。ユーザー名 (管理者) とパスワードの入力が求められます。 <code>imqcmd shutdown bkr [-b <i>hostName:port</i>]</code> ■ Message Queue の再インストールを予定しておらず、各ブローカインスタンスに関連する動的データ、フラットファイルユーザーリポジトリ、アクセス制御ファイルを削除する場合は、次のコマンドを使用してこのデータを削除します。 <code>imqbrokerd -name <i>instanceName</i> -remove <i>instance</i></code> ■ Message Queue アップグレードスクリプトを使用して Message Queue をアップグレードする場合には、使用するプロセスを書き留めておいてください。アップグレードスクリプトがインストール情報を Java ES レジストリに書き込まないからです。詳細については、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 アップグレードガイド』を参照してください。
アンインストール後の作業	<p>Message Queue の再インストールを予定していない場合は、コンポーネントのマニュアルで説明されているコマンドを実行してシステムをクリーンアップします。Message Queue のマニュアルは、次の場所から入手できます。 http://docs.sun.com/coll/MessageQueue_35_SP1_ja</p>

Portal Server のアンインストール動作

表 8-13 Portal Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 設定データはアンインストール時に削除されます。設定の解除には、Portal Server によって Access Manager 内に作成されたサービスの削除も含まれます。 ■ ユーザーチャネルのプロバイダは、アンインストール時に削除されないため、以後のインストールで再利用できます。 ■ カスタマイズ設定データには、ディスプレイプロファイル、プロパティファイル、リソース文字列などのカスタマイズデータが含まれ、これらはアンインストールによって削除されません。カスタマイズ設定データは以後のインストールで再利用できますが、それには Portal Server を同一ホスト上に同じ設定で再インストールする必要があります。

表 8-13 Portal Server のアンインストールの詳細 (続き)

項目	詳細
依存	<ul style="list-style-type: none"> ■ Directory Server ■ Application Server または Web Server (IBM WebSphere または BEA WebLogic に依存するように設定することもできる。) ■ Access Manager <p>Portal Server のチャンネルを使用するように設定されている場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Calendar Server ■ Messaging Server ■ Instant Messaging
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	<ul style="list-style-type: none"> ■ Portal Server が Web Server 内で実行されており、Portal Server だけを削除する場合、Access Manager を再起動する必要があります。詳細については、218 ページの「Access Manager アンインストール後の問題」を参照してください ■ Portal Server が IBM WebSphere Web コンテナに配備されている場合、追加のアンインストール作業が必要となる場合があります。

Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作

表 8-14 Portal Server Secure Remote Access のアンインストールに関する詳細

項目	詳細
設定データ	<ul style="list-style-type: none"> ■ Portal Server Secure Remote Access コアコンポーネントのすべての設定データは、アンインストール時に削除されます。 ■ 配備されているすべての Web アプリケーションの配備が解除されます。 ■ Portal Server Secure Remote Access のゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各コンポーネントの設定データには、ユーザーはアクセスできません。

表 8-14 Portal Server Secure Remote Access のアンインストールに関する詳細 (続き)

項目	詳細
依存	<ul style="list-style-type: none"> ■ Portal Server Secure Remote Access は Portal Server に依存しています。 ■ Portal Server, Secure Remote Access ゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各コンポーネントは、Access Manager SDK に依存しています。 ■ Portal Server と Portal Server Secure Remote Access サポートは、同一ホスト上の同一ディレクトリ内に存在する必要があります。 ■ Access Manager SDK は、ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシと同じホスト上に存在する必要があります。ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシを同一ディレクトリ内に置くことはできません。 ■ Portal Server Secure Remote Access のどのコンポーネントを削除する場合も、それに依存するコンポーネントを削除する必要はありません。 ■ ゲートウェイを削除しても、Access Manager SDK をホスト上に残すことができます。
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	なし

Service Registry のアンインストール動作

レジストリ設定プロセスは、レジストリデータベースおよびサーバーキーストアを次のディレクトリ内にインストールします。

- Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWsoar`
- Linux の場合: `/var/opt/sun/SUNWsoar`

このディレクトリは、Service Registry をアンインストールしても削除されません。このため、必要であればそのデータベースを保存しておき、将来のインストール時やリリース時に使用することもできます。そうするには、レジストリの再インストール前に Solaris OS の場合は `/var/opt/SUNWsoar/3.0` ディレクトリを、Linux の場合は `/var/opt/sun/SUNWsoar/3.0` を別の場所にコピーし、再インストール後にそれを元の場所にコピーして戻します。

Sun Cluster のアンインストール動作

表 8-15 Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データ	インストールされているが、クラスタノードの設定に一度も使用されていない Sun Cluster ソフトウェアを除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除には Java Enterprise System アンインストーラを使用しないでください。詳細については、218 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール」を参照してください。
依存	Sun Cluster コアと Sun Cluster エージェントは、同時に削除する必要があります。
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールには、Sun Cluster のインストール時に提供されるユーティリティーだけを使用します。
アンインストール後の作業	Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール後に、productregistry ファイルのアップデートが必要になる場合があります。詳細については、218 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール」を参照してください。

Web Server のアンインストール動作

表 8-16 Web Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データとユーザーデータ	<ul style="list-style-type: none">■ アンインストール時に、ユーザーデータは削除されませんが、設定データは削除されます。■ Web Server の管理サーバーインスタンスと設定済みの Web Server インスタンスディレクトリは、削除されます。初期設定によるドキュメントルートディレクトリは維持されます。■ Web Server 管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスは、アンインストールが完了する前に停止されます。
依存	なし

表 8-16 Web Server のアンインストールの詳細 (続き)

項目	詳細
このインストールを必要とする製品	<ul style="list-style-type: none"> ■ Access Manager (Web Server 内で実行されるように設定されている場合) ■ Portal Server (Web Server 内で実行されるように設定されている場合) ■ Communications Express ■ Application Server ロードバランスプラグイン (Application Server は Web Server を自身の Web コンテナとして使用する)
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	設定データを維持する場合は、インストールディレクトリ内の管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスのディレクトリのバックアップを行います。

Web Proxy Server のアンインストール動作

表 8-17 Web Proxy Server のアンインストールの詳細

項目	詳細
設定データ	インストール場所の下にある alias ディレクトリ内の証明書データベースファイルのみが維持されます。その他のファイルはすべて削除されます。
依存	Directory Server (省略可能。外部 LDAP アクセス制御が選択された場合)
アンインストール前の作業	Web Proxy Server のすべてのインスタンスを停止します。
アンインストール後の作業	WebProxyServer-base/alias ディレクトリの下に証明書データベースが保存されています。再インストールを実行する前に、この証明書データベースを移動し、古いインストールディレクトリを削除する必要があります。

アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与

アンインストール対象として選択したコンポーネントによっては、Access Manager、管理サーバー、および Directory Server への管理者アクセス権をアンインストーラに付与する必要があります。

- Application Server 上の Access Manager Web アプリケーションの配備を取り消し、Access Manager スキーマを削除するには、Access Manager の管理者アクセス権が必要です。
- アンインストール時に設定ディレクトリを管理する必要がある場合は、管理サーバーと Directory Server の管理者アクセス権が必要です。

次の表は、管理者アクセス権を付与するためにアンインストーラが必要とする情報を示しています。各表の左の列は、指定が必要な情報のグラフィカルモードのラベルと状態ファイルのパラメータを示します。右の列は、その説明です。

表 8-18 必要な管理情報

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
Access Manager	
管理者ユーザー ID IS_IAS81_ADMIN	Application Server 管理者のユーザー ID
管理者パスワード IS_IAS81_ADMINPASSWD	Application Server 管理者のパスワード。
ディレクトリマネージャー DN IS_DIRMGRDN	Directory Server に対して無制限のアクセス権を持つユーザーの識別名 (DN)。 デフォルト値は cn=Directory Manager です。
ディレクトリマネージャーパスワード IS_DIRMGRPASSWD	ディレクトリマネージャーのパスワード。
Administration Server	
管理者ユーザー ID ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_USER	設定ディレクトリ管理者のユーザー ID。管理サーバーは、この ID を使用して設定ディレクトリのデータを管理します。
管理者のユーザーパスワード ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_PASSWORD	設定ディレクトリ管理者のパスワード。
Directory Server	
管理者ユーザー ID CONFIG_DIR_ADM_USER	設定ディレクトリに対して管理者権限を持つユーザー。このユーザーは、サフィックスの作成や削除など、Directory Server の設定を変更できます。アクセス制御の制約を受けます。
管理者パスワード CONFIG_DIR_ADM_PASSWD	管理者のパスワード。
Portal Server	
管理者パスワード PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD	
Access Manager 管理者パスワード PS_IS_ADMIN_PASSWORD	

表 8-18 必要な管理情報 (続き)

ラベルと状態ファイルのパラメータ	説明
Directory Server 管理者パスワード	
PS_DS_DIRMGR_PASSWORD	
Directory Server 管理者ドメイン	
PS_DS_DIRMGR_DN	

アンインストーラの実行

192 ページの「アンインストールの前提条件」の関連作業が完了すると、アンインストーラを実行する準備が整います。ここでは、アンインストーラを使用する 3 とおりの方法を説明します。

- 210 ページの「グラフィカルモードでのアンインストーラの実行」
- 213 ページの「テキストベースモードでのアンインストーラの実行」
- 215 ページの「サイレントモードでのアンインストーラの実行」

uninstall コマンドの構文については、付録 B を参照してください。

グラフィカルモードでのアンインストーラの実行

ここでは、対話形式によるグラフィカルインタフェースを使用して、Java ES コンポーネントをアンインストールする方法を説明します。

▼ グラフィカルアンインストーラの起動

手順 1. (オプション) ローカルディスプレイへのアクセスを確保します。

リモートマシンにログインするときは、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適した設定になっていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースモードで実行されます。

- C Shell での例 (マシン名は myhost):

```
setenv DISPLAY myhost:0.0
```

- Korn Shell での例 (マシン名は myhost):

```
DISPLAY=myhost:0.0
```

ローカルディスプレイでインストーラを実行するには、表示権限の付与が必要になる場合があります。たとえば、次のコマンドを使用して、myhost から serverhost のルートユーザーに表示権限を付与することができます。

```
myhost\> xauth extract - myhost:0.0|rsh -l root serverhost xauth merge -
```

注 - このような権限を安全に付与する手順については、『Solaris X Window System 開発ガイド』の「サーバーに対するアクセスの操作」の章を参照してください。

2. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
3. アンインストーラが格納されているディレクトリに移動します。
 - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys4
 - Linux の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys4
4. グラフィカルアンインストーラを起動します。

```
./uninstall
```

「ようこそ」ページが表示されます。
5. 「次へ」をクリックして処理を続けます。
「コンポーネントの選択」ページが表示されます。

▼ アンインストールするコンポーネントの選択

- 手順
1. コンポーネントを調べて、アンインストールするコンポーネントを選択します。
 - システムにインストールされて有効になっているコンポーネントを選択できます。システムにインストールされていないコンポーネントは選択できません。
 - コンポーネントによっては、サブコンポーネントを含むものもあります。それらのコンポーネントを展開すると、対応するサブコンポーネントが表示されます。
 - サブコンポーネントを含むコンポーネントの選択を解除したときは、コンポーネントを展開し、サブコンポーネントのリストを確認します。
 2. 選択内容に問題がなければ、「次へ」をクリックします。
 3. アンインストーラが削除対象として選択された製品間の依存関係を認識し、設定データが失われる可能性が検出された場合には、警告メッセージが出力されます。次のいずれかを選択できます。
 - a. 「続行」をクリックして、アンインストールを続行します。
 - b. 「閉じる」をクリックして、「コンポーネントの選択」ページに戻ります。

▼ 管理者アクセス権の付与

削除を指定したコンポーネントによっては、アンインストーラから管理者 ID とパスワードが要求されます。アンインストーラで入力する必要がある情報の詳細については、208 ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」を参照してください。

注 - それに加えて、ポート番号またはホスト名の入力を求められる場合もあります。

- 手順
1. 必要な管理者情報を指定します。
 2. 「次へ」をクリックして、「アンインストールの準備が完了しています」ページに進みます。

▼ ソフトウェアのアンインストール

アンインストーラは、削除対象として選択されたコンポーネントと再利用可能になるディスク容量の合計を一覧表示します。

- 手順
1. アンインストールの選択内容を確認します。
 - a. 変更が必要な場合は、「戻る」を何度かクリックして「コンポーネントの選択」ページを表示します。
 - b. 「コンポーネントの選択」ページの情報を必要に応じて変更します。
 - c. 「次へ」をクリックし、アンインストーラページを再び先に進めます。
アンインストーラは、ユーザーが以前に指定した値を記憶しています。ユーザーが以前に指定した値は変更可能です。
 2. 選択内容に問題がなければ、「次へ」をクリックします。
アンインストーラはシステムからのソフトウェアの削除を開始し、次の情報を表示します。
 - 現在削除中のパッケージの名前
 - 全体的な完了割合を示す進捗状況バー
 - すべてのコンポーネント製品ソフトウェアの削除が完了すると、アンインストーラは「アンインストールが完了しました」ページを表示します。
 3. 「サマリーの表示」ボタンまたは「アンインストールログの表示」ボタンをクリックすると、アンインストールに関する情報が表示されます。
 - アンインストールサマリー: アンインストールされたコンポーネントおよびそれらのコンポーネントの設定情報がリストされます。
 - アンインストールログ: アンインストール時にアンインストーラが出力したすべてのメッセージが表示されます。

- アンインストールのサマリーファイルとログファイルは、次の場所でも確認できます。
Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs
Linux の場合: /var/opt/sun/install/logs
4. 「閉じる」をクリックしてアンインストーラを終了します。
 5. **Access Manager** または **Messaging Server** をインストールした場合は、[218 ページ](#)の「アンインストール後の作業」に進みます。

テキストベースモードでのアンインストーラの実行

テキストベースインタフェースを使用すると、端末ウィンドウ内に表示されるプロンプトに順次応答することで、端末ウィンドウからアンインストーラを直接実行できます。

ヒント – アンインストール時のテキストベースの入力要求については、[109 ページ](#)の「テキストベースのインタフェースの使用法」を参照してください。

アンインストール中に問題が発生した場合は、[第 9 章](#)を参照してください。

▼ テキストベースモードでのアンインストーラの起動

- 手順
1. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
 2. アンインストーラのディレクトリに移動します。
 - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys4
 - Linux の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys4
 3. アンインストーラを実行します。

```
./uninstall -nodisplay
```

「ようこそ」というメッセージが表示され、システムにインストールされているすべての使用可能な Java ES コンポーネントがリスト表示されます。

▼ アンインストールするコンポーネントの選択

- 手順
1. アンインストーラは、システム内で検出したインストール済みの **Java ES** コンポーネントすべてに番号を付けてリストし、削除対象として選択します。**Return** キー

を押して、すべてのコンポーネントをアンインストールします。
または、アンインストールするコンポーネントに対応する番号をコンマで区切ってリストにし、アンインストールするコンポーネントを指定して、**Return** キーを押します。

注 - システムにインストールされていないコンポーネントは無効になっており、選択できません。

2. アンインストーラは、削除対象として選択された製品間にコンポーネントの依存関係を検出すると、設定データが失われる可能性があることを知らせる警告メッセージが表示されます。次のいずれかを選択できます。
 - a. アンインストールを続行するには、**Yes** と入力し、**Return** キーを押します。
 - b. 「コンポーネントの選択」ページに戻るには、**No** と入力し、**Return** キーを押します。
 - c. アンインストールを終了するには、**!** を入力し、**Return** キーを押します。

▼ 管理者アクセス権の付与

- 手順 ● アンインストーラが管理者 **ID** とパスワードを必要とするコンポーネントを選択した場合は、管理者 **ID** とパスワードが要求されます。
アンインストーラで入力する必要がある情報の詳細については、[208 ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」](#)を参照してください。

注 - 削除対象として選択したコンポーネントによっては、ポート番号またはホスト名の入力を求められる場合もあります。

▼ ソフトウェアのアンインストール

アンインストーラは、ソフトウェアをシステムから削除する前に、サマリーページを表示します。このページには、削除対象として選択されたコンポーネントが表示されます。

- 手順 1. 選択内容を確認します。
- a. 変更が必要な場合は、「コンポーネントの選択」リストが表示されるまで、< 文字を入力し **Return** キーを押してページを順に戻ります。
 - b. 「コンポーネントの選択」リストを必要に応じて変更します。

- c. アンインストーラ画面を再び先に進めます。
2. 選択内容に問題がなければ、数値 **1** を入力し、**Return** キーを押します。
アンインストーラは、システムからのソフトウェアの削除を開始します。アンインストール時に、アンインストーラは全体的な完了割合を示す進捗状況バーを表示します。

すべてのコンポーネントソフトウェアが削除されたら、アンインストールサマリーおよびログを表示することができます。
3. **1** または **2** を入力し、**Return** キーを押してアンインストールに関する情報を表示します。
 - アンインストールサマリー: **1** を入力すると、アンインストールされたコンポーネントおよびそれらのコンポーネントの設定情報がリストされます。
 - アンインストールログ: **2** を入力すると、アンインストール時にアンインストーラが出力したすべてのメッセージがリストされます。
アンインストールのサマリーファイルとログファイルは、次の場所でも見ることができます。
Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs
Linux の場合: /var/opt/sun/install/logs
4. **!** 文字を入力して、アンインストーラを終了します。
Access Manager または Messaging Server をアンインストールした場合は、[218 ページの「アンインストール後の作業」](#)に進みます。

サイレントモードでのアンインストーラの実行

サイレントアンインストールは、設定内容が似ている複数のホスト上の Java ES コンポーネントをアンインストールする場合に便利です。サイレントモードでのアンインストール手順は、[第 5 章](#)で説明したサイレントモードでのインストール手順に似ています。

▼ 状態ファイルの作成

サイレントアンインストールを実行するには、まずグラフィカルモードまたはテキストベースモードで **false** を指定してアンインストールを実行し、状態ファイルを生成する必要があります。[121 ページの「状態ファイルの生成」](#)を参照してください。

- 手順
1. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
 2. アンインストーラのディレクトリに移動します。
 - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys4

■ Linux の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys4

3. アンインストーラのグラフィカルインタフェースを使用する場合は、ローカルディスプレイへのアクセスを確保します。210 ページの「グラフィカルモードでのアンインストーラの実行」を参照してください。

4. サイレントモードでアンインストーラを実行します。次に例を示します。

グラフィカルモードの場合:

```
./uninstall -no -saveState statefile_path
```

テキストベースモードの場合:

```
./uninstall -no -nodisplay -saveState statefile_path
```

uninstall コマンドの完全な構文については、253 ページの「アンインストールコマンド」を参照してください。

5. アンインストーラを最後まで実行します。

ユーザーが入力要求に応答するたびに、アンインストーラはその内容を指定された状態ファイルに記録します。アンインストールが完了すると、指定した場所に状態ファイルが保存されます。ソフトウェアのアンインストールは行われません。

6. サイレントアンインストールを実行するホストごとに、状態ファイルのコピーを作成します。

7. 各ファイルを編集して、サイレントアンインストールを実行するホストに固有の情報を設定します。

状態ファイルを編集する際の指針については、121 ページの「状態ファイルの編集」を参照してください。状態ファイルの編集には状態ファイル ID の生成も含まれます。これについては、124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」を参照してください。

▼ サイレントモードでのアンインストーラの実行

手順 1. **Java ES** コンポーネントをアンインストールするホストの状態ファイルが適切に準備され、編集されていることを確認します。

2. 端末ウィンドウを開きます。

3. **root** としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。

4. アンインストーラのディレクトリに移動します。

■ Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys4

■ Linux の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys4

5. アンインストーラを起動します。次に例を示します。

```
./uninstall -noconsole -state statefile_path
```

`uninstall` コマンドの完全な構文については、253 ページの「アンインストールコマンド」を参照してください。

▼ サイレントアンインストールの進行状況の監視

- 手順 1. 端末ウィンドウで、ログファイルのディレクトリに移動します。
- Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/logs`
- Linux の場合: `/var/opt/sun/install/logs`
2. 現在のアンインストールに関するログファイルを探します。監視対象のログファイルは、次のとおりです。

`Java_Enterprise_System_uninstall.Btimestamp`

`timestamp` 変数は、ログの作成時刻を表します。変数は `MMddhhmm` 形式で指定します。各表記の意味は次のとおりです。

<hr/>
<code>MM</code> 月を示す
<hr/>
<code>dd</code> 日付を示す
<hr/>
<code>hh</code> 時間を示す
<hr/>
<code>mm</code> 分を示す
<hr/>

3. `tail` コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。次に例を示します。

```
tail -f logfile_name
```

`tail` プログラムを終了するには、`Ctrl+C` キーを押します。

Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール

Sun Cluster ソフトウェアがインストールされているが、クラスタノードの設定に一度も使用されていない場合を除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除には Java ES アンインストーラを使用しないでください。Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールには、Sun Cluster ソフトウェアのインストール時に提供されるユーティリティーを使用します。Sun Cluster Core と Sun Java System 用 Sun Cluster エージェントは、同時に削除する必要があります。Sun Cluster ソフトウェアの設定解除およびアンインストールの詳細については、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』を参照してください。

Sun Cluster ソフトウェアを手動でアンインストールしたら、Java ES アンインストーラを実行して Sun Cluster と Sun Cluster エージェントを製品レジストリから削除します。

アンインストール後の作業

ここでは、システムから Java ES コンポーネントをアンインストールしたあとで実行が必要となる作業について説明します。実際に必要となる作業は、アンインストールしたコンポーネントによって異なります。

- 218 ページの「Access Manager アンインストール後の問題」
- 219 ページの「Application Server アンインストール後の作業」
- 219 ページの「Messaging Server インストール後」
- 220 ページの「Service Registry インストール後の作業」
- 220 ページの「Web Server アンインストール後の作業」

Access Manager アンインストール後の問題

Access Manager はアンインストールしたが、その Web コンテナ (Application Server または Web Server) はアンインストールしなかった場合、Access Manager が配備されていたインスタンスに対して設定変更を適用する必要があります。

場合によっては、アンインストーラでは Access Manager ファイルの一部またはすべてが削除されないことがあります。その場合は、次の 2 つのディレクトリとその内容を削除して、最終的なクリーンアップを行います。

/opt/SUNWam

Access Manager がデフォルトの場所にインストールされなかった場合:

`AccessManager_base/SUNWam`

Application Server アンインストール後の作業

Access Manager はアンインストールしたが、その配備先の Application Server はアンインストールしなかった場合、次の手順を実行する必要があります。

▼ Application Server のアンインストールの完了

- 手順
1. 必要に応じて **Application Server** の管理インスタンスを起動します。たとえば、**Solaris** ホストの場合は次のようにします。

```
cd /opt/SUNWappserver/appserver/bin./asadmin start-domain
--user admin_user --passwordfile path_to_admin-password_file domainname
```
 2. ブラウザから **Application Server** の管理コンソールにアクセスします。デフォルトの URL は、`https://hostname:4849` です。
 3. 左の区画で、「アプリケーションサーバーインスタンス」の左の鍵をクリックします。
 4. サーバーまたは **Access Manager** が配備されていた **Application Server** インスタンスの名前を選択します。
 5. 「**Apply Changes**」をクリックします。

Messaging Server インストール後

場合によっては、アンインストーラではインストールファイルの一部またはすべてが削除されないことがあります。最終的なクリーンアップを行うには、**Messaging Server** のベースディレクトリとその内容を削除します。デフォルトのベースディレクトリは、次の場所です。

`/opt/SUNWmsgsr`

また、次の場所にある **Messaging Server** の設定ディレクトリも削除できます。

`/var/opt/SUNWmsgsr`

Messaging Server をアンインストールしたあと、**Messaging Server** 用の `sendmail` の設定をすべて元に戻してください。

Service Registry インストール後の作業

場合によっては、アンインストーラではインストールファイルの一部またはすべてが削除されないことがあります。最終的なクリーンアップを行うには、次の場所にある Service Registry のベースディレクトリとその内容を削除します。

- Solaris OS の場合: /opt/SUNWsoar
- Linux の場合: /opt/sun/SUNWsoar

Service Registry データベースが格納されたディレクトリは、レジストリのアンインストール時に削除されません。

- Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWsoar
- Linux の場合: /var/opt/sun/SUNWsoar

必要であれば、このディレクトリを手動で削除してもかまいません。ただし、このデータベースを保存しておき、将来のインストール時やリリース時に使用するには、レジストリの再インストール前に次のディレクトリを別の場所にコピーし、再インストール後にそれを元の場所にコピーして戻します。

- Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWsoar/3.0
- Linux の場合: /var/opt/sun/SUNWsoar/3.0

Web Server アンインストール後の作業

Access Manager はアンインストールしたが、その配備先の Web Server はアンインストールしなかった場合、次の手順を実行する必要があります。

▼ Web Server のアンインストールの完了

- 手順
1. 必要に応じて **Web Server** の管理インスタンスを起動します。
`cd /opt/SUNWwbsvr/https-admserv./start`
 2. **Web Server** の管理コンソールにアクセスします。
 3. 「**Apply Changes**」をクリックして **Web** コンテナを再起動します。

第 9 章

トラブルシューティング

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) のインストールとアンインストールに関する問題を解決するためのヒントを提供します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 221 ページの「トラブルシューティングの手法」
- 226 ページの「インストールに関する問題」
- 231 ページの「アンインストールに関する問題」
- 233 ページの「Common Agent Container の問題」
- 236 ページの「コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント」

トラブルシューティングの手法

ここでは、Java ES のインストールおよびアンインストール時に、問題の原因を分析して特定するための一般的なガイドラインを紹介します。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 222 ページの「インストールログファイルの検証」
- 223 ページの「コンポーネントログファイルの検証」
- 223 ページの「製品の依存関係の検証」
- 224 ページの「リソースと設定のチェック」
- 224 ページの「インストール後の設定のチェック」
- 224 ページの「配布メディアのチェック」
- 224 ページの「Directory Server の接続性チェック」
- 225 ページの「パスワードの確認」
- 225 ページの「コンポーネントのインストール状態の検証」
- 226 ページの「管理者アクセスの確認」

インストールログファイルの検証

インストールまたはアンインストール中に問題が発生した場合、次の logs ディレクトリ内の適切なログファイルを確認します。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs

Linux の場合: /var/opt/sun/install/logs

アンインストーラとインストーラのログファイル、および Java ES の設定ログとコンポーネントのログを調べることは、問題の原因の特定に役立ちます。たとえば、インストールログに記録されているパッケージと、アンインストールログに記録されているパッケージを比較することができます。

ほとんどのログには 2 つのバージョンがあります。

- ログファイルの A バージョンには完了が記録されます。
- ログファイルの B バージョンには、詳細なログメッセージが保存されます。

次の表は、ログファイルの形式を示しています。

表 9-1 Java ES ログファイル名の形式

ログに記録される内容	ログファイル名の形式
インストーラ: コンポーネント	Java_Enterprise_System_install.Atimestamp
	Java_Enterprise_System_install.Btimestamp
	Java_Enterprise_System_Config_Log.id
アンインストーラ	Java_Enterprise_System_uninstall.Atimestamp
	Java_Enterprise_System_uninstall.Btimestamp
	Java_Enterprise_System_Config_Log.id
インストールサマリー	Java_Enterprise_System_Summary_Report_install.timestamp
	JavaES_Config_log.timestamp
	JavaES_PanelFlow_log.timestamp
	JavaES_MasterLog_log.timestamp
	Java_Enterprise_System_Summary_Report_uninstall.timestamp

ログファイルをトラブルシューティングに使用するには、最初に発生した問題を特定します。それは、最初の問題が原因となって、次々と問題が引き起こされることがよくあるためです。

▼ ログファイルによるトラブルシューティング

ログファイルによって、次に示すような、次の手順を見極めるためのヒントが与えられることがあります。

- 設定に問題がある場合は、設定のサマリーを参照して使用している設定を調べます。
- ディレクトリが競合している場合は、コンポーネントによって予約されているディレクトリを指定していないかどうかチェックします。

- 手順
1. インストールのサマリーファイルを参照します。このファイルには、何がインストールされ、設定されているかについての概要が記載されています。
問題が発生した場合は、どのコンポーネントが問題の原因であるかを確認します。複数の問題が発生している場合は、最初の問題を特定します。
 2. 詳細なログファイルを参照します。
 - a. 最初に発生したエラーまたは警告を探して、解決を試みます。1つのエラーを解決すると、関連性がないように見える後続の多数のエラーも解決することがよくあります。
 - b. 問題の原因となっているコンポーネントまたはパッケージの名前を探します。

コンポーネントログファイルの検証

コンポーネントの起動時に問題が発生する場合は、ログファイルを調べます。多くのコンポーネントのログファイルの場所については、[236 ページの「コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント」](#)を参照してください。

製品の依存関係の検証

多数のコンポーネントに、インストール時の相互依存関係があります。1つのコンポーネントに影響を与える問題は、別のコンポーネントにも影響を与える可能性があります。まず、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストール計画ガイド』で説明されている内容をよく理解してください。

- サマリーファイルおよびログファイルを参照し、関連付けられている製品に問題が発生していないかどうか確認します。これにより、最初に解決すべきことの手がかりが得られる可能性があります。
- 正しい接続情報を指定しているかどうかチェックします。例:
 - Directory Server の設定時に指定した情報は、Directory Server を使用するコンポーネントに指定したディレクトリ情報と一致しているか。
 - Portal Server または Portal Server SRA に指定した Access Manager の情報は、Access Manager に指定した情報と一致しているか。

コンポーネントの相互依存関係のほかに、一部のコンポーネントは Solaris パッケージがインストールされているかどうかにも依存しています。パッケージがホストにインストールされていない場合、それが原因でインストールが失敗することがあります。詳細については、リリースノートの「ソフトウェア要件」の節を参照してください。

リソースと設定のチェック

次のホストレベルの問題は、インストール時に問題を引き起こす可能性があります。

- **アップデート:** 推奨アップデート (パッチ) は適用されているか。
- **ディスク容量:** ディスクパーティションをどのように設定し、どのパーティションにインストールディレクトリを作成するか。インストールディレクトリ `/var/sadm` および `/etc/opt`、または独自に指定したデフォルト以外のディレクトリに、十分なディスクの空き容量が必要です。
- **ネットワークポート:** 設定時に、Java ES コンポーネントのポート番号を指定します。次の項目をチェックします。
 - `/etc/services` ファイルで標準ポート番号を調べる。
 - サマリーログファイルを参照し、標準の設定と比較する。ポート番号を誤って入力していないか、またはあるサーバーに対して通常は別のサーバーで使用するポートを設定していないか。
 - `netstat -a` コマンドを使用して、現在システムで使用しているポートを調べる。すでに他で使用中のポート番号を割り当てていないか。

IP アドレス: 設定時に、IP アドレスを指定します。正しい IP アドレスを入力したかどうかチェックします。確認する必要があることがいくつかあります。

- このシステムに複数のネットワークインタフェースがある場合、それぞれに独自の IP アドレスが指定されているか。
- 高可用性設定において、論理ホストの IP アドレス、またはクラスタノードの IP アドレスを指定したか。

インストール後の設定のチェック

コンポーネントの起動時に問題が発生する場合は、[第 6 章](#)に記述されている手順が正しく行われたか確認します。

配布メディアのチェック

DVD または CD からのインストールでは、メディアの汚れや損傷を調べます。ディスクに汚れがあると、インストール時に問題が発生する可能性があります。

Directory Server の接続性チェック

Directory Server に依存するコンポーネントをインストールする場合、次のいずれかの問題によって問題が発生する可能性があります。

- Directory Server に対して不正なユーザー ID およびパスワードを指定した。

- 不正な LDAP ポートを指定した。
- Directory Server に接続できない。
インストーラを対話モードで実行するとインストール時に Directory Server の接続性がチェックされますが、サイレントモードではチェックされません。Directory Server を利用できない状態でサイレントインストールを実行すると、Access Manager または Portal Server のインストールが失敗する可能性があります。

Web Server のファイルおよびディレクトリの削除

編集済みの設定ファイルなど、カスタマイズされたファイルの上書きを防ぐために、そのファイルが格納されるディレクトリには Web Server をインストールできません。

Web Server を再インストールする場合、インストールディレクトリをチェックして、それが空であることを確認します。空ではない場合は、どこか別の場所にファイルをアーカイブしてからインストールを再試行します。

パスワードの確認

インストーラは、コンポーネントごとにパスワードの入力を求めます。複数のホストに複数のコンポーネントをインストールする場合、各ホストで正しいパスワードを入力することが重要です。

パスワードの問題を解決するには、いったんアンインストールしてから再インストールすることが必要となる場合があります。アンインストールに失敗した場合は、[226 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」](#)を参照してください。

コンポーネントのインストール状態の検証

コンポーネントをインストールしたものの問題があり、再インストールまたはアンインストールを実行できない場合は、Solaris の `pkginfo` コマンドまたは Linux の `rpm` コマンドを使用して、インストールしたパッケージを調べます。その結果を、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」に記載されている Java ES パッケージと比較します。追加情報については、[226 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」](#)を参照してください。

ヒント – Solaris 9 と Solaris 10 では、prodreg ツールを使用することもできます。このツールは、製品レジストリへのグラフィカルインタフェースを提供し、pkg ユーティリティの代わりに、各コンポーネントおよびそのパッケージの両方への索引付けをします。prodreg を起動するには、コマンド行でこのコマンド名を入力します。詳細については、prodreg(1) のマニュアルページを参照してください。

管理者アクセスの確認

208 ページの「アンインストール用の管理者アクセス権の付与」で説明されているように、アンインストール時に管理者アクセス権をアンインストールに付与しなければならないことがあります。

インストールに関する問題

ここでは、インストール時に発生する可能性のある次の問題について説明します。

- 226 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」
- 228 ページの「アンインストール後に製品レジストリに含まれる共有コンポーネントが削除されたためにインストールが失敗する」
- 228 ページの「IBM WebSphere を Portal Server の Web コンテナとして設定できない」
- 229 ページの「予期せぬ外部エラーが発生する」
- 230 ページの「グラフィカルインストーラが応答しない」
- 230 ページの「サイレントインストールの失敗: 状態ファイルに互換性がない、または破損している」
- 230 ページの「サイレントインストールに失敗した」
- 231 ページの「マニュアルページが表示されない」

アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗

アンインストール時にコンポーネントやパッケージが削除されずに残されることがあります。このような場合、Java ES を再インストールする前に、コンポーネントやパッケージを手動で削除する必要があります。この問題には、次のものが該当します。

- アンインストーラで問題が発生し、アンインストールに失敗したパッケージの名前が表示される。

- 一度削除したコンポーネントをインストールしようとしたが、インストーラはそのコンポーネントがすでにインストールされていることを示す。

▼ 部分的なインストールのクリーンアップ

- 手順 1. 次のコマンドを使用して、一部だけがインストールされたパッケージがないかどうか調べます。

Solaris OS の場合:

```
pkginfo -p
```

Linux の場合:

```
rpm -qa |grep sun | xargs rpm -V
```

コマンドの出力で、一部だけがインストールされたパッケージのリストが表示されます。『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」を参照し、返されたパッケージ名に基づいてそれらのパッケージが属しているコンポーネントを調べます。

2. コンポーネントまたはパッケージを削除します。
- Solaris 9 または Solaris 10 では、`prodreg` というツールを使用します。
`prodreg` ツールを使用すると、ホスト上のパッケージベースのコンポーネントを管理できます。各コンポーネントとそのパッケージについて、相互依存関係を含む完全な情報を参照できます。`prodreg` ツールを使用して、安全にコンポーネントをアンインストールし、パッケージを削除することができます。
`prodreg` ツールでコンポーネントを削除すると、再インストールできるようになります。
 - Solaris 8 では、`pkgrm` コマンドを使用します。
`pkgrm` コマンドを使用すると、コンポーネントはパッケージごとにまとめて削除されます。このコマンドによって、製品のレジストリが更新されることはありません。コマンド実行後の状況に応じて、アーカイブされた製品のレジストリファイルを復元することも、削除されたコンポーネントを参照しないように、手動で製品のレジストリファイルを編集することもできます。
製品のレジストリファイルを編集するには、
`/var/sadm/install/productregistry` ファイルを開きます。この XML ファイルには、各コンポーネントの説明があります。各コンポーネントの説明は、`<compid\>` タグで始まり、`</compid\>` タグで終わります。コンポーネントのエントリ全体を削除します。
 - Linux では、`rpm -e` コマンドを使用します。
製品のレジストリファイルを編集するには、
`/var/opt/sun/install/productregistry` ファイルを開きます。この XML ファイルには、各コンポーネントの説明があります。各コンポーネントの説明は、`<compid\>` タグで始まり、`</compid\>` タグで終わります。

す。コンポーネントのエントリ全体を削除します。

3. `/opt`、`/etc/opt`、および `/var/opt` ディレクトリをクリーンアップします。
4. インストーラをもう一度実行します。

アンインストール後に製品レジストリに含まれる共有コンポーネントが削除されたためにインストールが失敗する

Java ES 2005Q4 リリースから、インストールが終了すると、製品レジストリファイル内に共有コンポーネントが登録されるようになっていきます。

Java ES アンインストールは、選択可能なコンポーネントをシステムから削除しますが、共有コンポーネントは削除しません。アンインストールが終了しても、製品レジストリには共有コンポーネントのエントリが依然として含まれています。アンインストール後に Java ES の共有コンポーネントを手動で削除しても、それらのコンポーネントは製品レジストリからは削除されません。したがって、次回の Java ES 2005Q4 のインストールは失敗します。なぜなら、手動で削除された共有コンポーネントに対するエントリが製品レジストリ内には依然として存在するため、インストーラはそれらのコンポーネントが存在するものと仮定するからです。

ヒント - Java ES の共有コンポーネントをシステムから手動で削除しないでください。

推奨される解決方法: 製品レジストリファイルから対応するエントリを削除するか、製品レジストリファイル自体を削除します。製品レジストリファイルからエントリを削除するとファイルが壊れる危険性があるため、製品レジストリの全体を削除することをお勧めします。これを行う前に、Java ES コンポーネント以外の製品が製品レジストリファイルを使用していないことを確認してください。

Linux の場合: Linux ではグラフィカル製品レジストリファイルに相当するものはありません。したがって、そのような rpm ファイルを間違えて削除した場合、製品レジストリファイルを手動で編集する必要があります。

IBM WebSphere を Portal Server の Web コンテナとして設定できない

WebSphere を実行していない、または WebSphere のネイティブ設定と一致しない WebSphere 値を指定したことが原因として考えられます。この問題の解決には、次の2つの方法があります。

設定のチェック

1つの方法は、WebSphere インスタンスの設定をチェックすることです。

▼ WebSphere 設定のチェック

- 手順
1. **WebSphere** が実行されていることを確認します。
 2. 次のインストーラフィールドの値を調べます。
 - WebSphere 仮想ホスト (状態ファイルの `PS_IBM_VIRTUAL_HOST`)
 - Application Server 名 (状態ファイルの `PS_IBM_APPSERV_NAME`)
 3. **WebSphere** ツールで設定をチェックし、これらの値と一致する値を確実に入力します。
 4. 再試行します。

新しいインスタンスの作成

もう1つの方法は、WebSphere エンティティの新しいインスタンスを作成することです。

▼ WebSphere エンティティの新しいインスタンスの作成

- 手順
1. `adminclient.sh` を使用して、**WebSphere** コンソールを起動します。
 2. 新しい仮想ホストのインスタンスおよび新しい **Application Server** のインスタンス名を作成します。
 3. ノード (通常はホスト名) の下のエントリをクリックし、**Regen WebServer Plugin** を選択します。
このプロセスにより、`plugin` 設定ファイルに新しいエントリが保存されます。インストーラによって、その正式名称がチェックされます。
 4. インストーラに戻り、作成した値を入力します。

予期せぬ外部エラーが発生する

電源障害またはシステム障害が発生した可能性があります。または CTRL/C を入力して、インストーラのプロセスを停止した可能性もあります。

推奨される解決方法: インストール中または設定プロセスで障害が発生した場合は、おそらく一部だけがインストールされたままになっています。インストーラを実行します。アンインストールが失敗した場合は、232 ページの「アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った」の手順に従います。

グラフィカルインストーラが応答しない

イメージが入力を受け付けるようになる前に、インストーラによって画面上にイメージが作成されることがあります。待ちきれずにインストールウィザードで何度も「次へ」をクリックすることは避けてください。

推奨される解決方法: デフォルトの選択肢を表すボタンには、青い四角形が表示されます。この四角形は、ボタンが表示されたあとに表示されることがあります。ボタンをクリックするときは、青い四角形が表示されるまで待ってください。

サイレントインストールの失敗: 状態ファイルに互換性がない、または破損している

使用しているプラットフォームで作成された状態ファイルを使用している場合、ファイルが壊れ、原因不明であるというエラーが発生する可能性があります。この問題の解決には、次の2つの方法があります。

新しい状態ファイルの生成

- サイレントインストールを実行しているのと同じプラットフォームで状態ファイルを作成した場合は、新しい状態ファイルを生成して再インストールします。
- 別のプラットフォームまたは別のバージョンで作成した状態ファイルを使用している場合、問題は、その状態ファイルが、作成したときと同じタイプのプラットフォームだけで実行できることです。たとえば、状態ファイルを Solaris 9 で作成した場合、そのファイルは Solaris 8 では使用できません。また、x86 プラットフォームで作成した状態ファイルは、SPARC プラットフォームでは使用できません。

プラットフォームに適した新規 ID の作成

状態ファイルを作成したプラットフォームが、サイレントインストールを実行しているプラットフォームと異なる場合、状態ファイルに対してプラットフォームに適した ID を新たに作成します。この方法については、[124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」](#)を参照してください。

サイレントインストールに失敗した

状態ファイルを編集した場合、それによってエラーが発生した可能性があります。次の点をチェックし、[121 ページの「状態ファイルの作成」](#)の説明に従って状態ファイルを再生成します。

- すべてのローカルホストパラメータが設定され、矛盾のない値が設定されているか。

- パラメータ値の大文字、小文字の区別は適切か。
- 目的のパラメータを入力せずに、必須のパラメータを削除してしまっていないか。
- 使用するすべてのポート番号は有効であり、かつ割り当て済みではないか。

マニュアルページが表示されない

この問題が起きる場合、たいていはインストールしたコンポーネントの MANPATH 環境変数が正しく設定されていないことが原因です。130 ページの「MANPATH の設定」を参照してください。

アンインストールに関する問題

ここでは、アンインストール時に発生する可能性のある次の問題について説明します。

- 231 ページの「アンインストーラが見つからない」
- 232 ページの「アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った」
- 233 ページの「製品レジストリが破損している」

アンインストーラが見つからない

Java ES のインストールプログラムは、システム上の次の場所に `uninstall` (アンインストーラ) を格納します。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys4`
- Linux の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys4`

アンインストーラがこのディレクトリにない場合は、次のいずれかの原因が考えられます。

- このホストに Java ES がインストールされたことが一度もない
- Java ES アンインストーラは、すでにアンインストーラを含むすべてのコンポーネントをこのホストから削除している。

アンインストール時に、どの Java ES コンポーネントもホストに存在しないことを検出すると、アンインストーラはアンインストーラ自身をもアンインストールします。

- 失敗したインストールの実行中に、次のいずれかの状況が生じた。
 - アンインストーラがホストにインストールされなかった。
 - アンインストーラは削除されたが、一部の Java ES コンポーネントはホストに残された。

推奨される解決方法: 232 ページの「アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った」の説明に従ってシステムを手動でクリーンアップします。

アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った

アンインストーラがファイルまたはプロセスを削除できなかったために手動クリーンアップが必要となった場合は、次の手順を実行し、システムからパッケージを削除します。

▼ 手動でのパッケージのクリーンアップ

- 手順
1. 削除が必要なパッケージを特定します。
システム上のパッケージを、『Sun Java Enterprise System 2005Q4 インストールリファレンス』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」に記載されている Java ES パッケージと比較します。インストールされているパッケージを特定するには、Solaris の `pkginfo` または `prodreg` ユーティリティー、あるいは Linux の `rpm` コマンドを使用できます。(226 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」を参照)
 2. **Java ES** コンポーネントの実行中のプロセスをすべて停止します。
プロセスの停止手順の概要については、第 6 章のコンポーネントマニュアルを参照してください。
 3. 以後のインストールで再利用を考えているカスタム設定データとユーザーデータをすべてバックアップします。
バックアップすべき設定データやユーザーデータについては、194 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」を参照してください。詳細については、各コンポーネントのマニュアルを参照してください。
 4. `pkgrm` または `rpm -e` コマンドを使って **Java ES** コンポーネントパッケージを削除します。
 5. 以後のインストールで使用しない、残されているコンポーネントディレクトリとその内容をすべて削除します。これらのディレクトリをあとで利用する場合は、別の場所に移動します。
 6. 次の場所にある製品レジストリファイルを更新します。
Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/productregistry`
Linux の場合: `/var/opt/sun/install/productregistry`
アンインストーラはこのレジストリを使用して、ホストにインストールされているコンポーネントを特定します。インストーラとアンインストーラは、インストールまたはアンインストールの完了時に製品レジストリを更新します。

注 - アンインストーラを使用せずに、パッケージを手動で削除した場合は、システムにインストールされているソフトウェアを製品レジストリが正しく反映するように、このファイルを手動で更新する必要があります。

7. 次の場所にあるシステムのログファイルをクリーンアップします。

Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/logs`

Linux の場合: `/var/opt/sun/install/logs`

ログファイルは、パッケージを手動削除したあとのシステムの状態を正しく反映していない可能性があります。

製品レジストリが破損している

アンインストール時に、アンインストーラは製品レジストリファイルを使用して、アンインストールが必要な要素を特定します。

Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/productregistry`

Linux の場合: `/var/opt/sun/install/productregistry`

- アンインストーラが失敗した場合は、バックアップコピーから製品レジストリを復元してからアンインストールを再実行しなければならないことがあります。
- パッケージを手動で削除した場合、製品レジストリは自動更新されません。製品レジストリがシステムの状態を正しく反映していないために、後でアンインストーラを実行したときに問題が生じる可能性があります。このような場合は、再インストールを行ってから、アンインストーラを再実行します。

Common Agent Container の問題

ここでは、Common Agent Container の共有コンポーネントに関連して起きる可能性のある次の問題について説明します。

- 233 ページの「ポート番号の競合」
- 235 ページの「ルートパスワードの安全性が危惧される場合」
- 236 ページの「ロックファイルに関するエラー通知」

ポート番号の競合

Java ES 内部の Common Agent Container は、デフォルトで次のポート番号を占有します。

- JMX ポート (TCP) = 10162
- SNMP アダプタポート (UDP) = 10161
- トラップ用 SNMP アダプタポート (UDP) = 10162
- Commandstream アダプタポート (TCP) = 10163
- RMI コネクタポート (TCP) = 10164

上記のポート番号のいずれかがすでにインストール時に予約されている場合は、Common Agent Container が占有するポート番号を次のようにして変更します。

Common Agent Container の `cacaoadm` コマンドの詳細については、`cacaoadm` のマニュアルページを参照してください。このマニュアルページをコマンド行に表示できない場合は、`MANPATH` が正しく設定されているか確認します。130 ページの「[MANPATH の設定](#)」を参照してください。

ポート番号の確認

▼ Solaris のポートの確認

手順 1. ルートとして、**Common Agent Container** 管理デーモンを停止します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm stop
```

2. 次の構文を使用して、ポート番号を変更します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm set-param param=value
```

たとえば、SNMP アダプタが占有するポートをデフォルトの 10161 から 10165 に変更するには、次のようにします。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm set-param snmp-adaptor-port=10165
```

3. **Common Agent Container** 管理デーモンを再起動します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm start
```

▼ Linux のポートの確認

手順 1. ルートとして、**Common Agent Container** 管理デーモンを停止します。

```
# /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm stop
```

2. 次の構文を使用して、ポート番号を変更します。

```
# /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm set-param param=value
```

たとえば、SNMP アダプタが占有するポートを 10161 から 10165 に変更するには、次のようにします。

```
# /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm set-param snmp-adaptor-port=10165
```

3. **Common Agent Container** 管理デーモンを再起動します。

```
# /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm start
```

ルートパスワードの安全性が危惧される場合

Java ES が稼働するホストで、セキュリティーキーを再生成することが必要になる場合があります。たとえば、ルートパスワードが他の人に知られたおそれがあり、安全性が危うくなっている場合には、セキュリティーキーを再生成する必要があります。**Common Agent Container** サービスによって使用されるキーは、次の場所に格納されています。

Solaris OS の場合: /etc/opt/SUNWcacao/security

Linux の場合: /etc/opt/sun/cacao/security

通常の操作条件では、これらのキーはデフォルトの設定のままでかまいません。キーの安全性が危うくなったために、キーを再生成することが必要な場合は、次の手順でセキュリティーキーを再生成できます。

セキュリティーキーの問題

▼ Solaris OS の場合のキー生成

手順 1. ルートとして、**Common Agent Container** 管理デーモンを停止します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm stop
```

2. セキュリティーキーを再生成します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm create-keys --force
```

3. **Common Agent Container** 管理デーモンを再起動します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm start
```

注 - Sun Cluster ソフトウェアの場合は、この変更をクラスタ内のすべてのノードに伝達する必要があります。詳細については、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』の「How to Finish a Rolling Upgrade to Sun Cluster 3.1 8/05 Software」を参照してください。

▼ Linux の場合のキー生成

手順 1. ルートとして、**Common Agent Container** 管理デーモンを停止します。

```
# /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm stop
```

2. セキュリティーキーを再生成します。

```
# /opt/sun/cacao/bin/cacoadm create-keys --force
```

3. **Common Agent Container** 管理デーモンを再起動します。

```
# /opt/sun/cacao/bin/cacoadm start
```

cacoadm コマンドの詳細については、cacoadm(1M) のマニュアルページを参照してください。

ロックファイルに関するエラー通知

cacoadm サブコマンドを実行したところ、別のユーザーがまったく同時に何かのコマンドを実行しているということもありえます。しかし、cacoadm サブコマンドは一度に1つしか実行できません。

Solaris OS の場合、次のエラーメッセージが生成されます。

```
If cacoadm daemon is running, it is busy executing another command.  
Otherwise remove lock file /var/opt/SUNWcacao/run/lock
```

Linux の場合、次のエラーメッセージが生成されます。

```
If cacoadm daemon is running, it is busy executing another command.  
Otherwise remove lock file /var/opt/sun/cacao/run/lock.
```

この通知メッセージを受け取ったときにまず行うとよいことは、少し待ってから再試行することです。

再試行しても同じ通知メッセージを受け取る際には、ロックファイルが **Common Agent Container** 管理デーモンによって削除されていない可能性があります。障害発生時にそのようなことがあります。ロックファイルがあるために、それ以後 cacoadm サブコマンドは実行できません。

エラーメッセージに示されている場所からロックファイルを削除します。

コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント

ここでは、コンポーネントについてのさまざまなヒントを提供し、役立つマニュアルを紹介します。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [237 ページの「Access Manager のトラブルシューティングのヒント」](#)

- 238 ページの「管理サーバーのトラブルシューティングのヒント」
- 238 ページの「Application Server のトラブルシューティングのヒント」
- 239 ページの「Calendar Server のトラブルシューティングのヒント」
- 239 ページの「Communications Express のトラブルシューティングのヒント」
- 240 ページの「Delegated Administrator のトラブルシューティングのヒント」
- 240 ページの「Directory Proxy Server のトラブルシューティングのヒント」
- 241 ページの「Directory Server のトラブルシューティングのヒント」
- 241 ページの「Instant Messaging のトラブルシューティングのヒント」
- 241 ページの「Message Queue のトラブルシューティングのヒント」
- 242 ページの「Messaging Server のトラブルシューティングのヒント」
- 242 ページの「Portal Server のトラブルシューティングのヒント」
- 243 ページの「Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント」
- 243 ページの「Service Registry のトラブルシューティングのヒント」
- 243 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント」
- 244 ページの「Web Server のトラブルシューティングのヒント」
- 245 ページの「Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント」
- 245 ページの「トラブルシューティングの追加情報」

Access Manager のトラブルシューティングのヒント

表 9-2 Access Manager のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
設定ファイル	AMConfig.properties Solaris OS の場合: /etc/opt/SUNWam/config Linux の場合: /etc/opt/sun/identity/config
ログファイルとデバッグファイル	ログファイルのディレクトリ: <ul style="list-style-type: none"> ■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/logs ■ Linux の場合: /var/opt/sun/identity/logs デバッグファイルのディレクトリ: <ul style="list-style-type: none"> ■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/debug ■ Linux の場合: /var/opt/sun/identity/debug
デバッグモード	『Sun Java System Access Manager 7 2005Q4 Developer's Guide』の「Auditing Features」の章を参照してください。

管理サーバーのトラブルシューティングのヒント

表 9-3 管理サーバーのトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	インストールログのディレクトリ: <ul style="list-style-type: none">■ <i>AdministrationServer-base/admin-serv/logs/</i> 設定ログファイル: <ul style="list-style-type: none">■ <i>Administration_Server_install.Atimestamp</i> <i>Administration_Server_install.B.timestamp</i> ログのオプションについては、『Sun Java System Administration Server 5 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。
トラブルシューティング	を参照してください。

Application Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-4 Application Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	ログファイルのディレクトリ: Solaris OS の場合: <i>/var/sadm/install/logs/</i> Linux の場合: <i>/var/opt/sun/install/logs/</i> Application Server インスタンスのログディレクトリ (最初に作成するインスタンスのデフォルトの場所): Solaris OS の場合: <i>/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/logs</i> Linux の場合: <i>/var/opt/sun/appserver/domains/domain1/logs</i> メッセージログのファイル名: <i>server.log</i> (サーバーインスタンスごとに存在する)
設定ファイル	設定ファイルのディレクトリ: <i>/var</i>
トラブルシューティング	『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Troubleshooting Guide』を参照してください。

Calendar Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-5 Calendar Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	管理サービス (csadmin): admin.log分散 データベースサービス (csdwpd): dwp.logHTTP サービス (cshttpd): http.log 通知サービス (csnotifyd): notify.logCalendar バックアップサービス (csstored): store.log デフォルトのログディレクトリ: /var/opt/SUNWics5/logs 詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。
設定ファイル	/opt/SUNWics5/cal/config/ics.conf
デバッグモード	デバッグモードを使用するには、Calendar Server の管理者が ics.conf ファイルで logfile.loglevel 設定パラメータを設定します。次に例を示します。 logfile.loglevel = "debug" 詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

Communications Express のトラブルシューティングのヒント

表 9-6 Communications Express のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	デフォルトのログファイル: <i>uwc-deployed-path</i> /logs/uwc.log
トラブルシューティング	『Sun Java System Communications Express 6 2005Q4 Administration Guide』の第 5 章「Troubleshooting」を参照してください。

Delegated Administrator のトラブルシューティングのヒント

表 9-7 Delegated Administrator のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	実行時ログファイル: /opt/SUNWcomm/log
トラブルシューティング	『Sun Java System Communications Services 6 2005Q4 Delegated Administrator Guide』の付録 C 「Debugging Delegated Administrator」を参照してください。

Directory Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-8 Directory Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	デフォルトのログファイル: <i>DirectoryProxyServer-base</i> /dps -hostname/logs/fwd.log 詳細については、『Sun Java System Directory Proxy Server 5 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Directory Proxy Server 5 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

Directory Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-9 Directory Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	インストールログファイル: Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs Linux の場合: /var/opt/sun/install/logs 設定ログファイル: Directory_Server_install.Atimestamp Directory_Server_install.Btimestamp ログファイルの管理については、『Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

Instant Messaging のトラブルシューティングのヒント

Instant Messaging のトラブルシューティングについては、クライアントのオンラインヘルプおよび『Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q1 Administration Guide』を参照してください。

Message Queue のトラブルシューティングのヒント

表 9-10 Message Queue のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
トラブルシューティング	『Sun Java System Message Queue 管理ガイド』の「問題のトラブルシューティング」の章、および次の MQ フォーラムを参照してください。 http://swforum.sun.com/jive/forum.jspa?forumID=24
パフォーマンス	『Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 管理ガイド』の「メッセージサービスの分析と調整」を参照してください。

Messaging Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-11 Messaging Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
実行ファイルの場所	/opt/SUNWmsgsr/sbin
ログファイル	MessagingServer-base/data/log
トラブルシューティング	『Sun Java System Messaging Server 6 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

Portal Server のトラブルシューティングのヒント

Portal Server は、Access Manager と同じログファイルとデバッグファイルを使用します。

表 9-12 Portal Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
デバッグファイル	Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/debug Linux の場合: /var/opt/sun/identity/debug
ログファイル	Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/logs Linux の場合: /var/opt/sun/identity/logs
トラブルシューティング	『Sun Java System Portal Server 6 2005Q4 管理ガイド』を参照してください。

Portal Server は、Access Manager と同じログファイルとデバッグファイルを使用します。

- desktop.debug
- desktop.dpadmin.debug

ヒント - dpadmin、par、rdmgr、および sendrdm という Portal Server コマンド行ユーティリティーには、デバッグメッセージを生成するためのオプションがあります。それらのオプションについては、『Portal Server 管理ガイド』を参照してください。

Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント

Portal Gateway のデバッグログは次のディレクトリに格納されます。

- Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWps/debug`
- Linux の場合: `/var/opt/sun/portal/debug`

注 - Access Manager 管理コンソールからログインをオンにした場合、NetFile などの Portal Server サービスのログは `/var/opt/SUNWam/debug` に作成されます。

Service Registry のトラブルシューティングのヒント

表 9-13 Service Registry のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	Application Server のインスタンスログ: Solaris OS の場合: <code>/var/opt/SUNWsoar/domains/registry/logs/server.log</code> Linux の場合: <code>/var/opt/sun/SUNWsoar/domains/registry/logs/server.log</code>
トラブルシューティング	『Service Registry 3 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。

Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント

表 9-14 Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	デフォルトのログディレクトリ: <code>/var/cluster/logs/install</code> エラーメッセージ: <code>/var/adm/messages</code>
トラブルシューティング	『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』を参照してください。

Web Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-15 Web Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	<p>Web Server のログファイルは 2 種類あります。errors ログファイルと access ログファイルです。どちらも次のディレクトリに格納されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Solaris OS の場合: /opt/SUNWwbsvr/https-<i>instancename</i>/logs■ Linux の場合: /opt/sun/webserver/https-<i>instancename</i> /logs <p>errors ログファイルには、サーバーで発生したすべてのエラーがリストされます。access ログファイルには、サーバーに対する要求と、サーバーからの応答に関する情報が記録されます。詳細については、『Sun Java System Web Server 6.1 SP4 Administrator’s Guide』を参照してください。</p>
トラブルシューティング	『Sun Java System Web Server 6.1 SP4 Installation and Migration Guide』を参照してください。
設定ファイルのディレクトリ	/opt/SUNWwbsvr/https- <i>instance-name</i> /config
デバッグモード	<p>次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ログ出力は、診断とデバッグに利用できる可能性があります。 /server_root/https-<i>instancename</i>/config/server.xml ファイル内の LOG 要素の loglevel 属性の値を、次の値に設定できます。 info、fine、finer、または finest。これらの値は、デバッグメッセージの詳細度を示し、finest で詳細度が最大になります。LOG 要素の詳細については、『Sun Java System Web Server 6.1 SP4 Administrator’s Configuration File Reference』を参照してください。■ デバッグフラグを有効化してサーバーの Web コンテナをデバッグモードで起動し、JPDA (Java Platform Debugger Architecture) デバッガとの連携準備を整えることができます。これを行うには、 /instance_root/https-<i>servername</i>/config/server.xml ファイル内の JAVA 属性の jvm.debug フラグの値を、true に設定します。詳細については、『Sun Java System Web Server 6.1 SP4 Administrator’s Configuration File Reference』を参照してください。■ Sun Java System Studio 5, Standard Edition のプラグインは、Web アプリケーションのデバッグに利用できます。詳細については、『Sun Java System Web Server 6.1 SP4 Programmer’s Guide to Web Applications』を参照してください。

Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-16 Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

項目	詳細
ログファイル	デフォルトのログの場所: <code>/opt/SUNWproxy/ proxy-instancename/logs</code> 詳細については、『Sun Java System Web Proxy Server 4.0.2 2005Q4 Administration Guide』を参照してください。
設定ファイルのディレクトリ	<code>/opt/SUNWproxy/proxy-instancename /config</code>
デバッグモード	<code>/server-root/proxy-instance-name/config/server.xml</code> ファイル内の LOG 要素の <code>loglevel</code> 属性の値を、次の値に設定できます。info、fine、finer、finest。

トラブルシューティングの追加情報

このマニュアルに記載されている次の情報も、トラブルシューティングに役立ちます。

- 第 6 章には、インストール後設定の実行手順が含まれています。
- 第 8 章には、Java ES ソフトウェアのアンインストール時に発生する可能性のある問題に関する情報が含まれています。

付録 A

このリリースの Java ES コンポーネント

この付録では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアに含まれる選択可能な共有コンポーネントの一覧を示します。

- 247 ページの「選択可能なコンポーネント」
- 249 ページの「共有コンポーネント」

選択可能なコンポーネント

Java ES インストーラのコンポーネント選択ページでは、選択可能なコンポーネントが、提供されるサービスごとにグループ化されています。コンポーネントのインストール時にともにインストールされるサブコンポーネントは、それぞれ次のとおりです。

通信サービスと共同作業サービス

- Sun Java System Messaging Server 6 2005Q4
- Sun Java System Calendar Server 6 2005Q4
- Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q4
 - Instant Messaging Server コア; サーバーとマルチプレクサソフトウェアを含む
 - Instant Messenger リソース
 - Access Manager の Instant Messaging サービス
- Sun Java System Portal Server 6 2005Q4
- Sun Java System Portal Server Secure Remote Access 6 2005Q4
 - Secure Remote Access コア
 - ゲートウェイ
 - Netlet プロキシ
 - Rewriter プロキシ
- Sun Java System Communications Express 6 2005Q4

- Sun Java System Directory Preparation Tool 6 2005Q4
- Communication Services Delegated Administrator 2005Q4
 - Delegated Administrator コンソールとユーティリティー
 - Delegated Administrator Server

Web サービスとアプリケーションサービス

- Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4
 - ドメイン管理サーバー
 - Application Server ノードエージェント
 - コマンド行管理ツール
 - Load Balancing Plugin

Web Server 6.x または Apache Web Server 1.3.33 以上のいずれかで使用できます。設定時に選択できます。デフォルトは Web Server です。
 - PointBase データベース
 - サンプルアプリケーション
- Sun Java System Web Server 6.1 SP5 2005Q4
- Sun Java System Web Proxy Server 4.0 2005Q4
- Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 Enterprise Edition
- Service Registry 3 2005Q4

ディレクトリサービスとアイデンティティサービス

- Sun Java System Access Manager 7 2005Q4
 - アイデンティティ管理とポリシーサービスコア (Delegated Administrator を含む)
 - Access Manager 管理コンソール
 - 連携管理の共有ドメインサービス
 - Access Manager SDK
- Sun Java System Directory Server 5 2005Q4
- Sun Java System Directory Proxy Server 5 2005Q4

可用性サービス

- High Availability Session Store (HADB) 4.4.2
- Sun Cluster 3.1 8/05
 - Sun Cluster コア
 - Sun Java System 用 Sun Cluster エージェント
 - HA/Scalable Sun Java System Web Server
 - HA Sun Java System Application Server
 - HA Sun Java System Message Queue
 - HA Sun Java System Calendar Server

- HA Sun Java System Administration Server
- HA Sun Java System Directory Server
- HA Sun Java System Messaging Server
- HA Sun Java System Application Server EE (HADB)
- HA Sun Java System Instant Messaging

管理サービス

- Sun Java System Administration Server 5 2005Q4

注 - Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster エージェントは、Linux オペレーティングシステムでは使用できません。

共有コンポーネント

共有コンポーネントは、選択可能なコンポーネントにローカルサービスとテクノロジーサポートを提供します。Java ES コンポーネントをインストールすると、そのコンポーネントに必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、インストーラは自動的にそれらの共有コンポーネントをインストールします。

Java ES のこのリリースには、次の共有コンポーネントが含まれています。

- Ant (Jakarta ANT Java/XML ベースビルドツール) 1.6.2
- Apache Derby Database 10.0.2.1
- Apache Apache Common Logging (ACL) 1.0.3
- Berkeley Database 4.2.52
- Common Agent Container 1.1
- ICU (International Components for Unicode) 3.2
- IMSDK (Instant Messaging SDK) 6.2.8
- J2SE™ (Java 2 Platform, Standard Edition) platform 5.0 Update 3
- JAF (JavaBeans™ Activation Framework) 1.0.3
- JATO (Java Studio Enterprise Web Application Framework) 2.1.5
- JavaHelp™ Runtime 2.0
- JavaMail™ Runtime 1.3.2
- JAXB (Java Architecture for XML Binding) Runtime 1.0.4
- JAXP (Java API for XML Processing) 1.2.6
- JAXR (Java API for XML Registries) Runtime 1.0.7
- JAXRPC (Java API for XML-based Remote Procedure Call) Runtime 1.1.2
- JCAPI (Java Calendar API) 1.2
- JDMK (Java Dynamic Management™ Kit) Runtime 5.1
- JSS (Java Security Services) 2.1.4 および 4.1
- KTSE (KT Search Engine) 1.3.2
- LDAP C SDK 5.11

- LDAP Java SDK 4.18
- MA Core (Mobile Access Core) 1.0.6
- NSPR (Netscape Portable Runtime) 4.5.2
- NSS (Network Security Services) 3.10
- SAAJ (SOAP with Attachments API for Java) 1.2.1
- SASL (Simple Authentication and Security Layer) 2.18
- Sun Explorer Data Collector (Solaris OS のみ) 4.3.1
- Sun Java Monitoring Framework 1.0.1
- Sun Java Web Console 2.2.4
- WSCL (Web services Common Library) 1.0

付録 B

インストールコマンド

この付録では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) インストーラとアンインストーラの実行で使用するコマンド構文とオプションについて説明します。

- 251 ページの「インストーラコマンド」
- 253 ページの「アンインストールコマンド」

インストーラコマンド

Java ES installer コマンドの書式は次のとおりです。

```
installer [option]...
```

次の表に、installer コマンドのオプションを説明します。

表 B-1 Java ES インストーラのコマンド行オプション

オプション	説明
-help	インストーラに使用できるコマンド行オプションを定義します。
-id	状態ファイル ID を画面上に出力します。
-no	ソフトウェアをインストールしない設定でインストーラを実行します。
-noconsole	インストーラをサイレントモードで起動し、グラフィカルインタフェースを抑制します。サイレントモードでインストーラを起動するには、このオプションと <code>-state</code> を組み合わせて指定します。
-nodisplay	インストーラをテキストベースモードで起動します (グラフィカルインタフェースを起動しない)。

表 B-1 Java ES インストーラのコマンド行オプション (続き)

オプション	説明
<code>-saveState [statefile]</code>	<p><i>statefile</i> によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにインストーラに指示します。状態ファイルは、サイレントインストールの実行に使用されます。</p> <p>指定されたファイルが存在しない場合、このファイルは自動的に作成されます。</p> <p><i>statefile</i> の値を省略すると、インストーラはデフォルトの <code>statefile.out</code> ファイルに書き込みます。</p> <p>以後のインストールセッションで連続して同じ状態ファイルを指定することができます。初回のセッションが終了すると、ファイル名に <i>n</i> が追加されます。この <i>n</i> はゼロ (0) から始まる整数で、セッションが開始されるたびに増えます。</p>
<code>-state statefile</code>	<p>指定された状態ファイルをサイレントインストールの入力として使用します。サイレントインストールを開始するには、このオプションと <code>-noconsole</code> を組み合わせて指定します。</p>

例

インストールディレクトリからインストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./installer
```

インストーラをテキストベースモードで実行する。

```
./installer -nodisplay
```

ソフトウェアをインストールせずに、インストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./installer -no
```

ソフトウェアをインストールせずに状態ファイルを作成する。

- グラフィカルモードの場合

```
./installer -no -saveState myInstallStatefile
```

- テキストベースモードの場合

```
./installer -no -nodisplay -saveState myInstallStatefile
```

ソフトウェアをインストールしながら状態ファイルを作成する。

```
./installer [-nodisplay] -saveState myInstallStatefile
```

インストーラをサイレントモードで実行する。

```
./installer -nodisplay -noconsole -state myInstallStatefile
```

アンインストールコマンド

Java ES `uninstall` コマンドの書式は次のとおりです。

```
uninstall [option]...
```

次の表に、`uninstall` コマンドのオプションを説明します。

表 B-2 Java ES アンインストールのコマンド行オプション

オプション	説明
<code>-help</code>	アンインストーラに使用できるコマンド行オプションを定義します。
<code>-id</code>	状態ファイル ID を画面上に出力します。
<code>-no</code>	ソフトウェアを削除しない設定でアンインストーラを実行します。
<code>-noconsole</code>	アンインストーラをサイレントモードで起動し、グラフィカルインタフェースを抑制します。サイレントモードでアンインストーラを起動するには、このオプションと <code>-state</code> を組み合わせて指定します。
<code>-nodisplay</code>	アンインストーラをテキストベースモードで起動します (グラフィカルインタフェースを起動しない)。
<code>-saveState [statefile]</code>	<p><code>statefile</code> によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにアンインストーラに指示します。状態ファイルは、サイレントアンインストールの実行に使用されます。</p> <p>指定されたファイルが存在しない場合、このファイルは自動的に作成されます。</p> <p><code>statefile</code> の値を省略すると、アンインストーラはデフォルトの <code>statefile.out</code> ファイルに書き込みます。</p> <p>以後のアンインストールセッションで連続して同じ状態ファイルを指定することができます。初回のセッションが終了すると、ファイル名に <code>n</code> が追加されます。この <code>n</code> はゼロ (0) から始まる整数で、セッションが開始されるたびに増えます。</p>
<code>-state statefile</code>	指定された状態ファイルをサイレントアンインストールの入力として使用します。サイレントアンインストールを開始するには、このオプションと <code>-noconsole</code> を組み合わせて指定します。

例

Java ES インストーラでインストールを実行すると、アンインストーラが次の場所に格納されます。

- Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys4
- Linux の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys4

アンインストーラディレクトリからアンインストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./uninstall
```

アンインストーラをテキストベースモードで実行する。

```
./uninstall -nodisplay
```

ソフトウェアを削除せずに、アンインストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./uninstall -no
```

ソフトウェアを削除せずに状態ファイルを作成する。

- グラフィカルモードの場合

```
./uninstall -no -saveState myUninstallStatefile
```

- テキストベースモードの場合

```
./uninstall -no -nodisplay -saveState myUninstallStatefile
```

ソフトウェアをアンインストールしながらアンインストーラ状態ファイルを作成する。

```
./uninstall [-nodisplay] -saveState myUninstallStatefile
```

アンインストーラをサイレントモードで実行する。

```
./uninstall -nodisplay -noconsole -state myUninstallStatefile
```

状態ファイルの例

用に準備された状態ファイル

この付録では、サイレントインストールの状態ファイルの例を示します。
PSP_SELECTED_COMPONENTS パラメータは、対話式インストールで選択したコンポーネントを示します。

```
#
# Wizard Statefile created: Tue May 17 20:50:02 CST 2005
# Wizard path: /tmp/.jes_CaChE/Solaris_x86/.install/EntsysInstall_
SunOS_x86_9.class
#
#
# Install Wizard Statefile section for Sun Java(tm) Enterprise
System
#
#
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Enterprise System ad21547ce1f4b70d10b1c
361c2d8ffb10611158c]
LICENSE_TYPE =
PSP_SELECTED_COMPONENTS = LDAPJDK, JDK, NSPR, NSS, JSS, JATO, JAXP,
WSCL, JAXB, JavaActivationFramework, JavaMail, SOAPRuntime, JAXR,
JAXRPC, ApacheCommonLogging, DSConfigurator, SASL, LDAPCSDK, ICU,
Dssetup, AdminConsole, DirectoryServ32, MiscPackages, MAPplugin,
ISConfigurator, appserv, WSCommon, ASCommon, Ant, JavaHelpRuntime,
SunONEMessageQueue, Tomcat, SunWebConsole, JDMK, ASAdmin, ASCore,
OrionUninstaller, ISAdministrationConsole, InstantMessaging,
InstantMessagingConfig, IMAPI, InstantMessengerResources, NSPRD,
NSSU, webproxyserver, SunCluster, Explorer, Cacao, SCCore,
SCDirServer, HADBConfigurator, HADB, ASSamples, ASPointBase,
SCAppServer, MFWK, MFWK-CFG, MFWK-AGENT, MFWK-MAN,
InstantMessagingServer, CalendarServ, SunONEWebServerEn, KTSE,
SunONEWebServer, ASNA, SCCalServer, PortalSRA, PSRAL10NConfigurator,
PortalServer, PSL10NConfigurator, MAPCore, WebNFS, ExternalJARs,
IdentityServerSDK, BDB, IdentityServerSDKAlone,
ISCommonDomainDeployment,
SunONEIdentityServerManagementandPolicyServices, PortalServerCore,
SRACore, SCMsgServer, CommDA, JCAPI, ASConfigurator, AdminServ,
MessagingServ, UWC, IdentityServerInstantMessagingService,
```

```

DPSConfigurator, DirectoryProxyServ, SRAGateway, IdentityServ,
SRARewriterProxy, DerbyDB, DAS, RegistryServer, SRANetletProxy,
SCMQ, LB, SUNWcomic, SUNWcomis, SCAdminServer, SCInstantMessaging,
SCHADB, SCWebServer, SCAgents
PSP_EXIT_ON_DEPENDENCY_WARNING = no
PSP_LOG_CURRENTLY_INSTALLED = yes
REMOVE_BUNDLED_PRODUCTS = Yes
CCCP_UPGRADE_EXTERNAL_INCOMPATIBLE_JDK =
CMN_SRA_INSTALLDIR = /opt
CMN_DS_SERVER_ROOT = /var/opt/mps/serverroot
CMN_WPS_INSTALLDIR = /opt/SUNWproxy
CMN_REG_SERVER_ROOT = /opt
CMN_IS_INSTALLDIR = /opt
CMN_AS_DOMAINSDIR = /var/opt/SUNWappserver
CMN_DPS_INSTALLDIR = /
CMN_DSSETUP_INSTALLDIR = /opt/SUNWcomds
CMN_PS_INSTALLDIR = /opt
CMN_COMMDA_INSTALLDIR = /opt/SUNWcomm
CMN_WS_INSTALLDIR = /opt/SUNWwbsvr
CMN_UWC_INSTALLDIR = /opt/SUNWuwcc
CMN_IIM_INSTALLDIR = /opt
CMN_CS_INSTALLDIR = /opt
CMN_UNINSTALL_INSTALLDIR =
CMN_AS_INSTALLDIR = /opt/SUNWappserver
CMN_MS_INSTALLDIR = /opt/SUNWmsgsr
CONFIG_TYPE = Custom
CMN_HOST_NAME = myComputer
CMN_DOMAIN_NAME = example.com
CMN_IPADDRESS = 192.168.255.255
CMN_ADMIN_USER = admin
CMN_ADMIN_PASSWORD = admin123
CMN_SYSTEM_USER = root
CMN_SYSTEM_GROUP = other
WS_ADMIN_USER = admin
WS_ADMIN_PASSWORD = admin123
WS_ADMIN_PORT = 8888
WS_ADMIN_SYSTEM_USER = root
WS_ADMIN_HOST = myComputer.example.com
WS_INSTANCE_USER = root
WS_INSTANCE_GROUP = other
WS_INSTANCE_PORT = 80
WS_INSTANCE_CONTENT_ROOT = /opt/SUNWwbsvr/docs
WS_INSTANCE_AUTO_START = N
AS_ADMIN_USER_NAME = admin
AS_PASSWORD = admin123
AS_ADMIN_PORT = 4849
AS_JMX_PORT = 8686
AS_HTTP_PORT = 8080
AS_HTTPS_PORT = 8181
AS_MASTER_PASSWORD = admin123
ASNA_ADMIN_HOST_NAME = myComputer
ASNA_ADMIN_USER_NAME = admin
ASNA_PASSWORD = admin123
ASNA_MASTER_PASSWORD = admin123
ASNA_ADMIN_PORT = 4849

```

```

ASNA_NODE_AGENT_NAME = myComputer
AS_WEB_SERVER_LOCATION = /opt/SUNWwbsvr/https-myComputer.example.com
AS_WEB_SERVER_PLUGIN_TYPE = Sun Java System Web Server
DS_ADMIN_USER = admin
DS_ADMIN_PASSWORD = admin123
DS_DIR_MGR_USER = cn=Directory Manager
DS_DIR_MGR_PASSWORD = admin123
DS_SERVER_IDENTIFIER = myComputer
DS_SERVER_PORT = 389
DS_SUFFIX = dc=red,dc=sun,dc=com
DS_ADM_DOMAIN = example.com
DS_SYSTEM_USER = root
DS_SYSTEM_GROUP = other
USE_EXISTING_CONFIG_DIR = 0
CONFIG_DIR_HOST = myComputer.example.com
CONFIG_DIR_PORT = 389
CONFIG_DIR_ADM_USER = admin
CONFIG_DIR_ADM_PASSWD = admin123
USE_EXISTING_USER_DIR = 0
USER_DIR_HOST = myComputer.example.com
USER_DIR_PORT = 389
USER_DIR_ADM_USER = admin
USER_DIR_ADM_PASSWD = admin123
USER_DIR_SUFFIX = dc=red,dc=sun,dc=com
DS_DISABLE_SCHEMA_CHECKING = 0
DS_ADD_SAMPLE_ENTRIES = 0
DS_POPULATE_DATABASE = 1
DS_POPULATE_DATABASE_FILE_NAME =
ADMINSERV_ROOT = /var/opt/mps/serverroot
ADMINSERV_PORT = 390
ADMINSERV_DOMAIN = example.com
ADMINSERV_SYSTEM_USER = root
ADMINSERV_SYSTEM_GROUP = other
ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_USER = admin
ADMINSERV_CONFIG_ADMIN_PASSWORD = admin123
ADMINSERV_CONFIG_DIR_HOST = myComputer.example.com
ADMINSERV_CONFIG_DIR_PORT = 389
DPS_PORT = 489
DPS_SERVERROOT =
DPS_CDS_ADMIN = admin
DPS_CDS_PWD = admin123
IS_LDAPUSERPASSWD = 123admin
IS_ADMINPASSWD = admin123
IS_LDAP_USER = amldapuser
IS_ADMIN_USER_ID = amAdmin
AM_ENC_PWD = 123admin
AM_REALM = disabled
DeploymentServer = AppServer
PortalSelected = TRUE
IS_WS_HOST_NAME =
IS_WS_INSTANCE_DIR =
IS_WS_INSTANCE_PORT =
IS_WS_DOC_DIR =
IS_SERVER_PROTOCOL = http
IS_APPSERVERBASEDIR = /opt/SUNWappserver/appserver

```

```

IS_AS_CONFIG_DIR =
IS_IAS81INSTANCE = server
IS_IAS81INSTANCEDIR = /var/opt/SUNWappserver/domains/domain1
IS_IAS81INSTANCE_PORT = 8080
IS_IAS81_ADMIN = admin
IS_IAS81_ADMINPASSWD = admin123
IS_IAS81_ADMINPORT = 4849
ASADMIN_PROTOCOL = https
IS_SUNAPPSERVER_DOCS_DIR = /var/opt/SUNWappserver/domains/domain1
/docroot
IS_BEA_INSTALL_DIR =
IS_BEA_ADMIN_PASSWD =
IS_BEA_ADMIN_PORT =
IS_BEA_DOMAIN =
IS_BEA_INSTANCE =
IS_BEA_DOC_ROOT_DIR =
IS_BEA_WEB_LOGIC_JAVA_HOME_DIR =
IS_BEA_MANAGED_SERVER =
IS_IBM_INSTALL_DIR =
IS_IBM_VIRTUAL_HOST =
IS_IBM_APPSERV_NAME =
IS_IBM_APPSERV_PORT =
IS_IBM_DOC_DIR_HOST =
IS_IBM_WEB_SERV_PORT =
IS_IBM_WEBSPHERE_JAVA_HOME =
IS_WAS40_NODE =
CONSOLE_HOST = myComputer.example.com
CONSOLE_DEPLOY_URI = amconsole
PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI = ampassword
IS_SERVER_HOST = myComputer.example.com
IS_SERVER_PORT = 8080
CONSOLE_PORT =
SERVER_DEPLOY_URI = amserver
COOKIE_DOMAIN_LIST = .sun.com
USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER =
CDS_DEPLOY_URI = amcommon
ADMIN_COMPONENT_SELECTED = true
IS_DS_HOST = myComputer.example.com
IS_DS_HOSTNAME = myComputer
IS_DS_PORT = 389
IS_ROOT_SUFFIX = dc=red,dc=sun,dc=com
IS_DIRMGRDN = cn=Directory Manager
IS_DIRMGRPASSWD = admin123
IS_EXISTING_DIT_SCHEMA = n
IS_LOAD_DIT = y
IS_ORG_OBJECT_CLASS = sunISManagedOrganization
IS_ORG_NAMING_ATTR = o
IS_USER_OBJECT_CLASS = inetorgperson
IS_USER_NAMING_ATTR = uid
IS_DIRECTORY_MODE = 1
PS_DEPLOY_TYPE = SUNONE8
PS_DEPLOY_DIR = /opt/SUNWappserver/appserver
PS_DEPLOY_INSTANCE = server
PS_DEPLOY_PROTOCOL = http
PS_DEPLOY_PORT = 8080

```

```
PS_DEPLOY_DOCROOT = /var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/docroot
PS_DEPLOY_DOMAIN = domain1
PS_DEPLOY_INSTANCE_DIR = /var/opt/SUNWappserver/domains/domain1
PS_DEPLOY_ADMIN_PORT = 4849
PS_DEPLOY_ADMIN = admin
PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD = admin123
PS_DEPLOY_ADMIN_PROTOCOL = https
PS_DEPLOY_PRODUCT_DIR =
PS_DEPLOY_PROJECT_DIR =
PS_DEPLOY_NOW = y
PS_DEPLOY_JDK_DIR = /usr/jdk/entsys-j2se
PS_DEPLOY_VIRTUAL_HOST =
PS_DEPLOY_CELL =
PS_DEPLOY_NODE =
PS_DEPLOY_URI = /portal
PS_LOAD_BALANCER_URL = http://myComputer.example.com:8080/portal
PS_SAMPLE_PORTAL = y
PS_IS_INSTALLDIR = /opt
PS_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD = 123admin
PS_IS_ADMIN_PASSWORD = admin123
PS_DS_DIRMGR_DN = cn=Directory Manager
PS_DS_DIRMGR_PASSWORD = admin123
SRA_DEPLOY_URI = /portal
SRA_IS_INSTALLDIR = /opt
SRA_SERVER_DOMAIN = example.com
SRA_GATEWAY_PROTOCOL = https
SRA_GATEWAY_DOMAIN = example.com
SRA_GATEWAY_PORT = 443
SRA_GATEWAY_PROFILE = default
SRA_LOG_USER_PASSWORD = admin123
SRA_GW_PROTOCOL = https
SRA_GW_HOSTNAME = myComputer
SRA_GW_SUBDOMAIN =
SRA_GW_DOMAIN = example.com
SRA_GW_PORT = 443
SRA_GW_IPADDRESS = 192.168-255-255
SRA_GW_PROFILE = default
SRA_GW_START = n
SRA_NLP_HOSTNAME = myComputer
SRA_NLP_SUBDOMAIN =
SRA_NLP_DOMAIN = example.com
SRA_NLP_PORT = 10555
SRA_NLP_IPADDRESS = 192.168.255.255
SRA_NLP_GATEWAY_PROFILE = default
SRA_NLP_START = n
SRA_RWP_HOSTNAME = myComputer
SRA_RWP_SUBDOMAIN =
SRA_RWP_DOMAIN = example.com
SRA_RWP_PORT = 10443
SRA_RWP_IPADDRESS = 192.168.255.255
SRA_RWP_GATEWAY_PROFILE = default
SRA_RWP_START = n
SRA_IS_CREATE_INSTANCE = y
SRA_SERVER_PROTOCOL = http
SRA_SERVER_HOST = myComputer.example.com
```

```
SRA_SERVER_PORT = 8080
SRA_SERVER_DEPLOY_URI = /portal
SRA_IS_ORG_DN = dc=red,dc=sun,dc=com
SRA_IS_SERVICE_URI = /amserver
SRA_IS_PASSWORD_KEY = 123admin
SRA_CERT_ORGANIZATION = Sun Microsystems
SRA_CERT_DIVISION = Software
SRA_CERT_CITY = Santa Clara
SRA_CERT_STATE = CA
SRA_CERT_COUNTRY = US
SRA_CERT_PASSWORD = admin123
SRA_CERT_SELFSIGNED =
HADB_DEFAULT_AMDINPORT = 1862
HADB_DEFAULT_RESDIR = /var/opt
HADB_AUTO_START = N
HADB_DEFAULT_GROUP = root
HADB_ALLOW_GROUPMANAGE = N
WPS_ADMIN_USER = admin
WPS_ADMIN_PASSWORD = admin123
WPS_ADMIN_PORT = 8888
WPS_ADMIN_RUNTIME_USER = root
WPS_INSTANCE_RUNTIME_USER = nobody
WPS_INSTANCE_PORT = 8080
WPS_INSTANCE_AUTO_START = N
WPS_PROXY_DOMAIN = myComputer.example.com
[STATE_DONE Sun Java(tm) Enterprise System
ad21547ce1f4b70d10b1c361c2d8ffb10611158c]
```

索引

A

Access Manager
Directory Server を使用する例 (単一セッション), 80-82
Portal Server と別ホスト, 84-86
Portal Server を使用する例 (単一セッション), 80-82
アンインストール後, 218-219
アンインストール動作, 195-196
インストール後の設定, 134-136, 136-137
インデックスの追加, 135-136
起動と停止, 170
サードパーティー製 Web コンテナ, 136
サブコンポーネント, 248
トラブルシューティング, 237-238
非ルートの Web コンテナ上, 86-92
Access Manager SDK, 75-76
サードパーティーの Web コンテナを使用する例, 65-67
ACL (Apache Common Logging), 249
Administration Server, アンインストール動作, 196-197
amconfig, 67
amsamplesilent, 67
amsamplesilent ファイル, 66
ant, 154
Ant, 184, 249
Apache Derby Database, 249
Apache Web Server, 44-46, 248
Apache ログ (ACL), 249
Application Server
アンインストール後, 219
アンインストール動作, 197-198

Application Server (続き)

インストール後の設定, 138-140
インストール中のアップグレード, 96
起動と停止, 172-173
サブコンポーネント, 248
データサービスの設定, 157-158
トラブルシューティング, 238-239
マニュアルページの場所, 131
ルート以外の ID による設定, 162
例 (単一セッション), 44-46
ロードバランス用 Apache Web Server, 44-46

B

BEA WebLogic, および Portal Server, 153-154
Berkeley Database, 249

C

Calendar Server
Messaging Server を使用する例, 68-70
アンインストール動作, 198-199
インストール後の設定, 141-142
起動と停止, 174-175
データサービスの設定, 158
トラブルシューティング, 239
ルート以外の ID による設定, 162
Common Agent Container, 249
トラブルシューティング, 233-236
マニュアルページの場所, 131

Communications Express

- アンインストール動作, 199-200
- インストール後の設定, 142-143
- 起動と停止, 175
- トラブルシューティング, 239-240
- 例 (単一セッション), 72-74

D

Delegated Administrator, 80-82

- アンインストール動作, 200-201
- サブコンポーネント, 248
- トラブルシューティング, 240

Directory Preparation Tool, 47-48

Directory Proxy Server

- アンインストール動作, 202
- インストール後の設定, 143-144
- 起動と停止, 175-176
- 情報, 240
- トラブルシューティング, 240-241
- ルート以外の ID による設定, 162
- 例 (単一セッション), 48-50

Directory Server

- 64 ビット Solaris 上での 32 ビット, 145
- Access Manager を使用する例 (単一セッション), 80-82
- アンインストール動作, 201-202
- インストール後の設定, 145-146
- インデックス、追加, 135-136
- 起動と停止, 176-177
- データサービスの設定, 158
- トラブルシューティング, 241
- マニュアルページの場合, 131
- ルート以外の ID による設定, 163
- 例 (単一セッション), 46-48

Directory Server の暗号化, 46-48

Directory Server のレプリケーション, 46-48

DISPLAY 設定, 30

H

HADB

- インストール後の設定, 147
- インストールの例, 82-84
- データサービスの設定, 158

I

IBM WebSphere, および Portal Server, 153-154

ICU バージョン, 249

IM SDK, 249

imqbrokerd.conf ファイル, 148

installer コマンドのオプション, 251-252

Instant Messaging

- アンインストール動作, 202-203
- インストール後の設定, 147
- 起動と停止, 177-178
- サブコンポーネント, 247
- データサービスの設定, 159
- トラブルシューティング, 241
- マルチプレクサ, 147
- 例 (単一セッション), 50-52

Instant Messaging と Access Manager の例, 74-76

J

J2SE, 249

JAF, 249

JATO, 249

Java ES, インストールの例, 39-92

Java ES, ソフトウェアの入手, 36-37

JavaHelp Runtime, 249

JavaMail Runtime, 249

Java 仮想マシン (JVM) の調整, 160-161

JAXB, 249

JAXP, 249

JAXR Runtime, 249

JAXRPC Runtime, 249

JCAPI, 249

JDMK, 249

JSS, 249

JVM の調整, 160-161

K

KT Search Engine (KTSE), 249

L

LDAP C SDK, 249

LDAP Java SDK, 250

LDAP Schema 1 の例, 70-72
Linux, 249
 Korn Shell, 32
Linux 用の Korn Shell, 32

M

MA Core, 250
MANPATH
 環境変数の更新, 131-132
 設定, 130-132
Message Queue
 アップグレード, 52-53
 アンインストール動作, 203-204
 インストール中のアップグレード, 96
 起動と停止, 179
 単独でインストール, 52-53
 データサービスの設定, 159
 トラブルシューティング, 241-242
 例 (単一セッション), 52-53
Messaging Server
 Calendar Server を使用する例, 68-70
 アンインストール後, 219
 アンインストール動作, 203
 インストール後の設定, 148-149
 起動と停止, 179-180
 データサービスの設定, 159
 トラブルシューティング, 242
 ルート以外の ID による設定, 163
Monitoring Framework, 250

N

Network Security Services (NSS), 250
NSPR, NSS, 250

P

Perl, インストールの確認, 34
pkginfo, 29
Portal Server
 Access Manager と別ホスト, 84-86
 Access Manager を使用する例 (単一
 セッション), 80-82

Portal Server (続き)
 Web コンテナの非ルートインスタンス
 上, 89-92
 アンインストール動作, 204-205
 インストール後の設定, 150-152, 152-154
 起動と停止, 181-182
 トラブルシューティング, 242-243
 ルート以外の ID による設定, 163
 例 (単一セッション), 42-44
Portal Server Secure Remote Access
 アンインストール動作, 205-206
 インストール後の設定, 150-152, 152-154
 起動と停止, 182-183
 サブコンポーネント, 247
 トラブルシューティング, 243
 例 (単一セッション), 53-56
prodreg, 29, 228

R

rpm -qa, 29
RSMAPI 機能 (Sun Cluster), 63-64
RSMRDT ドライバ機能 (Sun Cluster), 63-64

S

SAAJ, 250
SASL, 250
Schema 1, インストールの例, 70-72
Schema 2, 46, 72-74
SCI-PCI アダプタ機能 (Sun Cluster), 63-64
sendmail, 219
sendmail、無効化, 35
Service Registry
 アンインストール動作, 206
 起動と停止, 183-184
 設定, 154-155
SOAP for Java (SAAJ), 250
Solaris 10
 ゾーンのインストール例, 59-60
 メモリーチェック, 32
 ロード済みのソフトウェア, 28-29
Solaris 10 ゾーンの継承ファイルシステ
 ム, 60-61
Solaris 10 のゾーンの例, 59-60
Solaris コンテナ (ゾーン), 59

Sun Cluster

- アンインストール, 218
- アンインストール動作, 207
- インストール後の設定, 132-133
- インストールの例, 61-64
- およびインストール後の設定, 132
- 停止と再起動, 185
- 特殊機能のインストール, 63-64
- トラブルシューティング, 243-244
- マニュアルページの場所, 131

Sun Explorer Data Collector, 250

Sun Java Monitoring Framework, 250

Sun Java Web Console, 250

Sun Cluster エージェント, 156-160

- インストールの例, 61-62
- サブコンポーネント, 248

Sun Cluster データサービス

- Calendar Server, 158
- Directory Server, 158
- HADB, 158
- Instant Messaging, 159
- Messaging Server, 159
- Web Server, 159-160
- 管理サーバー, 157, 159

Sun Cluster データサービスの設定, 156-160

Sun Cluster の再起動, 185

Java ES ソフトウェアの入手, 36-37

T

tail コマンドおよびサイレントインストール, 128

U

uninstall コマンドのオプション, 253

W

Web Proxy Server

- アンインストール動作, 208
- 起動と停止, 186-187
- 情報, 245
- 設定, 155

Web Server

- アンインストール後, 220
- アンインストール動作, 207-208
- インストール後の設定, 156
- 起動と停止, 185-186
- データサービスの設定, 159-160
- トラブルシューティング, 244-245
- ルート以外の ID による設定, 163
- 例 (単一セッション), 57-59
- Web とアプリケーションサービスの例, 82-84
- WSCL, 250

あ

- アップグレード, 確認目的, 30-31
- アンインストーラ, 概要, 28
- アンインストーラの管理者アクセス権, 208-210
- アンインストール, 189-220
 - Access Manager のアンインストール後, 218-219
 - Access Manager の動作, 195-196
 - Administration Server の動作, 196-197
 - Application Server のアンインストール後, 219
 - Application Server の動作, 197-198
 - Calendar Server の動作, 198-199
 - Communications Express の動作, 199-200
 - Delegated Administrator の動作, 200-201
 - Directory Proxy Server の動作, 202
 - Directory Server の動作, 201-202
 - Instant Messaging の動作, 202-203
 - Message Queue の動作, 203-204
 - Messaging Server のアンインストール後, 219
 - Messaging Server の動作, 203
 - Portal Server Secure Remote Access の動作, 205-206
 - Portal Server の動作, 204-205
 - Service Registry の動作, 206
 - Sun Cluster, 218
 - Sun Cluster の動作, 207
 - Web Proxy Server の動作, 208
 - Web Server アンインストール後, 220
 - Web Server の動作, 207-208
 - アンインストール後, 218-220
 - インストール済みコンポーネントの調査, 193-210

アンインストール (続き)
 管理者アクセス権, 208-210
 グラフィカルインタフェース, 210-213
 コマンドオプション, 253
 コンポーネントの動作, 194-208
 しゅくみ, 189-192
 実行, 210-217
 状態ファイル, 215-216
 前提条件, 192-193
 相互依存関係の処理, 191-192
 トラブルシューティング, 221, 231-233
 非ルートの Access Manager, 87
 部分的なアンインストールのクリーン
 アップ, 226-228
 アンインストール後, 218-220
 Access Manager, 218-219
 Application Server, 219
 Messaging Server, 219
 Web Server, 220
 アンインストールコマンド, 例, 253-254

い

インストーラ
 コマンドオプション, 251-252
 例, 252
 インストーラの言語, 25-26
 インストーラのモード, 25
 インストール
 インストール後の設定, 129-163
 インストール前のチェックリスト, 33-35
 確認, 166-168
 グラフィカルインタフェース, 93-107
 言語の概要, 25-26
 サイレントモード, 119-128
 およびプラットフォームに適した
 ID, 124-126
 トラブルシューティング, 230-231
 サイレントモード処理, 120
 サイレントモードでの実行, 126-128
 サマリーレポート, 106, 130
 準備, 23-38
 状態ファイルを使用した, 121-124
 設定オプション, 27
 追加コンポーネントのインストール, 106
 テキストベースのインタフェース, 109-118
 テキストベースの手順, 110-117

インストール (続き)
 トラブルシューティング, 221
 取消し, 105
 ネットワーク上の共有イメージ, 37-38
 プラットフォームに適した ID, 124-126
 プロセス, 23-28
 モード, 25
 ログ, 106
 インストール後設定, 確認, 168-169
 インストール後設定後の確認, 168-169
 インストール後の確認, 166-168
 インストール後の設定, 129-163
 Access Manager, 134-136, 136-137
 Application Server, 138-140
 Calendar Server, 141-142
 Communications Express, 142-143
 Directory Proxy Server, 143-144
 Directory Server, 145-146
 HADB, 147
 Instant Messaging, 147
 Messaging Server, 148-149
 Portal Server, 150-152, 152-154
 Portal Server Secure Remote
 Access, 150-152, 152-154
 Service Registry, 154-155
 Sun Cluster, 132
 Sun Cluster フレームワーク, 132-133
 Web Proxy Server, 155
 Web Server, 156
 管理サーバー, 137-138
 インストール済みコンポーネントの調
 査, 193-210
 インストール済みソフトウェアの検出, 26-27,
 29-31
 インストールのシーケンス, 39-92
 インストールのシナリオ, 39-92
 インストールの取消し, 105
 インストール前のチェックリスト, 33-35

え

エージェントおよび Sun Cluster, 156-160

か

概要

- Java ES インストール, 27
- インストールの準備, 23-38
- インストールの例, 39-40
- インストールプロセス, 23-28
- 共有コンポーネント, 249
- 言語の選択, 25-26
- コンポーネント, 247
- コンポーネントのチェック, 26
- 設定オプション, 27

確認手順, 165-188

管理コンソール (Service Registry 用)、アクセス, 184

管理サーバー

- インストール後の設定, 137-138
- 起動と停止, 170-172
- 情報, 238
- データサービスの設定, 157
- トラブルシューティング, 238
- マニュアルページの場所, 131
- ルート以外の ID による設定, 161

き

起動シーケンス, 168-169

共有インストールイメージ, 37-38

共有コンポーネント, 一覧, 249

く

グラフィカルインタフェース

アンインストール, 210-213

インストール, 93-107

こ

コマンド行インストール, 109-118

コンポーネント

アンインストール動作, 194-208

依存性の確認, 26-27

一覧, 24, 247-250

インストール済みのバージョンの検出, 29-31

コンポーネント (続き)

インストール済みのバージョンの調査, 193-210

概要, 247-250

起動と停止, 168-169

Access Manager, 170

Application Server, 172-173

Calendar Server, 174-175

Communications Express, 175

Directory Proxy Server, 175-176

Directory Server, 176-177

Instant Messaging, 177-178

Message Queue, 179

Messaging Server, 179-180

Portal Server, 181-182

Portal Server Secure Remote

Access, 182-183

Service Registry, 183-184

Sun Cluster, 185

Web Server, 185-186

管理サーバー, 170-172

サーバーコンソール, 171-172

マルチプレクサ (Instant

Messaging), 177-178

追加のインストール, 106

トラブルシューティング, 236-245

ルート以外の ID による設定, 161-163

コンポーネントの依存性の確認, 26-27

コンポーネントの起動と停止, 168-169

Access Manager, 170

Application Server, 172-173

Calendar Server, 174-175

Communications Express, 175

Directory Proxy Server, 175-176

Directory Server, 176-177, 182-183

Instant Messaging, 177-178

Message Queue, 179

Messaging Server, 179-180

Portal Server, 181-182

Service Registry, 183-184

Sun Cluster, 185

Web Proxy Server, 186-187

Web Server, 185-186

管理サーバー, 170-172

サーバーコンソール, 171-172

マルチプレクサ (Instant

Messaging), 177-178

コンポーネントのチェックとインストール, 26

コンポーネントのバージョン, 24

さ

サードパーティー Web コンテナ, 96
サードパーティー製 Web コンテナ, 136
サードパーティーの Web コンテナ, 65-67
サーバーコンソール
 起動, 171-172
 停止, 172
サービスレジストリ, 例 (単一セッション), 56-57
サイレントアンインストール, 215-216
サイレントインストール, 119-128
 インストーラの実行, 126-128
 および状態ファイル, 121-124
 状態ファイルの例, 255
 ログファイル, 127-128
サマリーレポートおよびインストール, 106
参照整合性検査プラグイン、有効化, 135

し

状態ファイル
 インストールでの使用, 121-124
 およびアンインストール, 215-216
 トラブルシューティング, 230
 パラメータ, 122-124
 プラットフォームに適した ID, 124-126
 例, 255
シングルサインオン, 80

せ

製品レジストリ、トラブルシューティング, 228, 233
設定、MANPATH, 130-132
設定オプション, 27
設定の種類, 27

そ

ゾーン、ロード済みのソフトウェア, 28-29
ソフトウェア
 CD または DVD, 36-37
 ダウンロード, 36-37
 ファイルサーバー, 36-37
 ロード済み, 36-37

た

単一セッションインストールの例, 40-59

つ

通信サービスと共同作業サービスの例, 76-80

て

データサービスの設定
 HADB, 158
 および Calendar Server, 158
 および Directory Server, 158
 および Message Queue, 159
 および Messaging Server, 159
 および Web Server, 159-160
 および管理サーバー, 157
データサービスの設定 (Sun Cluster), 156-160
テキストベースのインストーラ、使用方法, 109-110
テキストベースのインストール, 109-118

と

トラブルシューティング
 Access Manager, 237-238
 Application Server, 238-239
 Calendar Server, 239
 Common Agent Container, 233-236
 Communications Express, 239-240
 Delegated Administrator, 240
 Directory Proxy Server, 240-241
 Directory Server, 241
 Instant Messaging, 241
 Message Queue, 241-242

トラブルシューティング (続き)
Messaging Server, 242
Portal Server, 242-243
Portal Server Remote Secure Access, 243
Sun Cluster, 243-244
Web Server, 244-245
アンインストール, 231-233
インストール, 221
管理サーバー, 238
コンポーネント, 236-245
サイレントモードインストール, 230-231
手法, 221-226
状態ファイル, 230
製品レジストリ, 233
部分的なアンインストールのクリーン
アップ, 226-228
ポート番号, 233-235
ルートパス, 235-236
ログ, 222
トラブルシューティングの手法, 221-226

ね
ネットワーク共有インストール, 37-38

は
パッケージ, Sun Cluster の特殊機能, 63-64
パッチ
グラフィカルベースのインストール中の追
加, 101, 115
テキストベースのインストール中の追
加, 114

ひ
評価インストールの例, 41-42
非ルートのインストール, 86-92

ふ
負荷分散, Web とアプリケーションサービスの
例, 82-84

プラットフォームに適した ID および状態
ファイル, 124-126
ブローカ, 「Message Queue」を参照

ほ
ポート番号, 競合, 233-235
ホストの調査, 29-31, 31-32

ま
マニュアルページのデフォルトの場所, 131
マルチプレクサ, 起動と停止, 177-178
マルチプレクサ (Instant Messaging), 147

よ
用語集へのリンク, 19

る
ルート以外の ID
Application Server の設定, 162
Calendar Server の設定, 162
Directory Proxy Server の設定, 162
Directory Server の設定, 163
Messaging Server の設定, 163
Portal Server の設定, 163
Web Server の設定, 163
管理サーバーの設定, 161
コンポーネントの設定, 161-163
ルートパスワード、トラブルシューティン
グ, 235-236

れ
例
Access Manager とは別ホストの Portal
Server, 84-86
Calendar Server と Messaging Server, 68-70
HADB, 82-84
Instant Messaging と Access Manager, 74-76
Schema 1, 70-72

例 (続き)

- Solaris 10 ゾーン, 59-60
- Sun Cluster, 61-64
- Web とアプリケーションサービス, 82-84
- アンインストールコマンド, 253-254
- インストーラコマンド, 252
- インストールシーケンス, 39-40
- 概要, 39-40
- 状態ファイル, 255
- 単一セッションインストール, 40-59
- 通信サービスと共同作業サービス, 76-80
- 評価, 41-42
- 非ルート, 86-92
- 負荷分散, 82-84

ろ

- ロード済みのソフトウェア, 28-29
- ロードバランス, Apache Web Server, 44-46
- ロードバランスプラグイン, 45-46, 82-84

ログ

- インストール, 106
- サイレントインストール, 127-128
- トラブルシューティング, 222
- ファイル名の形式, 222

